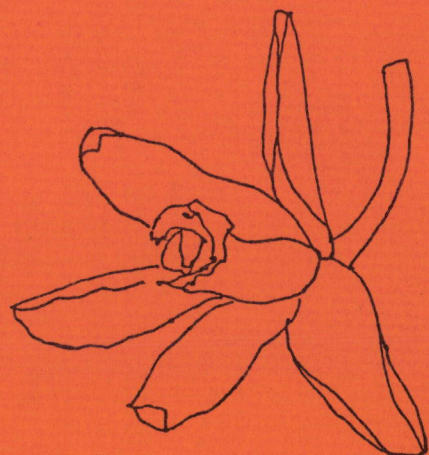
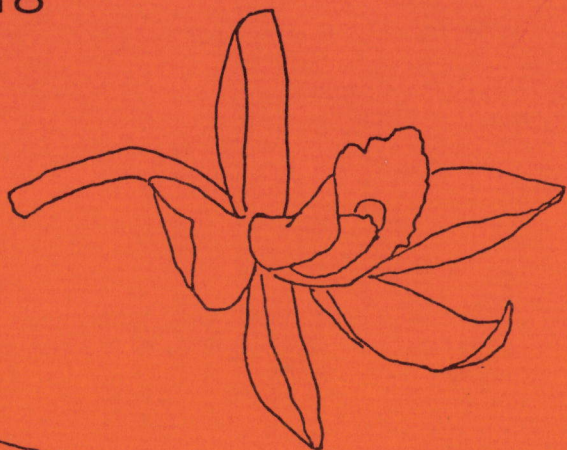


片岡

女性問題研究

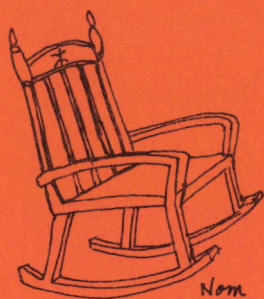
女性問題研究 No.18



言葉と現実

如工

1985年版 * NO.18
女性問題研究会発行



はじめに

今年は何連婦人の十年の最終年、七月にはケニアのナイロビでこの十年の成果を語りあい、残された課題を明らかにして21世紀に向けての戦略を討議する世界大会が開かれるという。だから私たちも、自分の家庭・地域・職場でこの十年の間にどれだけ男女平等がすすんだのか、何が障害になっているのか、どうしたら「平等・発展・平和」の目標は達成できるのか——あらためて原点にかえてケンケンガクガク話してみようではないか。

国連は、この疲れきった世界を再生するにはいままですげられていた力に潜在力をひきだすことだという戦略から、国際婦人年、国際児童年、国際障害者年、国際青年年とキャンペーンをはっているのだという。中でも婦人年だけは一年かぎりではなく十年もつづけ、しかも二年ごとに点検の会議もする、差別撤廃条約の署名や批准も各国政府に迫るという画期的なものなのだ。

私たち運動をしている側は、この官民総かりの「婦人解放」に何となくなじめなくてこの力を充分活用したとはいえない。国連加盟一五九カ国のうち非同盟諸国が三分の二以

上をしめるといふ力関係をつい忘れてしまふからだが……。

でもすでに反動は始まっている。もともと平等は先進資本主義国の、発展は第三世界の平和は社会主義国の要求を現わしているが、アメリカなど大国からは、この三つの不可分のスローガンの中から、平和をはずそうという声があがっているという。また国際婦人年のキャンペーンを21世紀までつづけるのにも反対だとか……。こんなに分担金を出している大国の意見が通らなくて、何の力もない有象無象の小国が一国一票を楯にして大国批判をするのはけしからんというわけだ。

折しも今年には被爆四十年、日ソ共産党会談や米ソの交渉で核廃絶の大運動が始まっている。そして国連は来年を「国際平和年」にするという。この地球上に五万発はあるという核、ひとたび爆発すれば地球は核の冬となって凍結し、人類は死滅するといふ核時代に生きる私たち——世界の軍事費を暮らしにまわすことで飢餓のない平等で平和な世界をつくるうではないか。まずは日本の軍事費をへらすことから。

(正路)

「れふあむ」とはフランス語で女たち。一九六三年、神戸外大で生まれた女性問題研究会の機関誌の名前で、学生時代に三号まで刊行し、卒業後五年のブランクの後、初めの発起人を中心に年一回の機関誌づくりと例会を四回行なう気楽な集まり。参加資格はすべての女性と女性問題に関心のある男性。会費、会則、会長すべてなし。参加希望者はハガキで下記へ。荒井由美子／西宮市高木西町一一の三一

目次

I 家族をめぐる

- 寝そべる夫
- 別居結婚——单身赴任のもたらしたもの
- “嫁”って何——妻にはなっても嫁にはなるな
- 40歳で始めての赤ちゃんを
- 子供の成長に支えられて
- 母の思い出
- 十年ののち——私のセカンドステージ



- ごとう もも子…2
- つな ゆみ子…4
- 角橋 佐智子…8
- 尾形 ゆき江…10
- 徳田 リツ子…12
- 原沢 那美子…13
- 米家 佐奈恵…16
- 網野 和子…21
- 大西 陸子…30
- 田畑 鞠子…32
- 正路 怜子…33
- 小田島 美影…42
- 尼川 洋子…43
- ヴェレーナ・ブルコルタ…45

III ひそやかな決意

- 言葉と現実——その一
- ことば・旅・そしてポルトガル
- 年金生活者とお金
- あゝ男たちよ——その二
- 【詩】もがり笛
- 女たちの同時代
- 心身統一合気道に学んで
- 死のために立ち止まることのできないので
- エミリ・ディキンソンの死生観
- もつと世界に目を開こうとわたしは思った
- イタリア半島一周の旅——被害編
- 男が作る料理を女がたべる日”から8年
- 四年前からピアノを始めました

- 片岡 陽子…46
- 若松 千代子…49
- 田畑 鞠子…51
- 吉田 喜代…52
- 西本 椰枝…53
- 田丸 青実…54
- 片岡 美智子…57
- 岩田 典子…58
- 貫名 美隆…60
- 浅野 祐子…62
- 小田 信康…63
- 宮城 万史…64

- カットとカバーデザイン まつのきよこ
- カバーのレタリング 中川 信子

I

家を矢もめどって

寝るる夫

ごとうもも子

私は両手に紙袋をぶら下げて、十五階のオフィスからエレベーターで一階のロビーにおりた。玄関のガラス扉越しに見える柳の木が、風に揺れていた。十六年間、毎日見てきた景色なのに、今日はそれが妙に新鮮に見えている。

私はドアを開けて外に出ると、玄関の中央をちよつと外れた場所で、夫になる人の現われるのを待った。

彼は恥しそうに近づいてくると、黙って私の手から紙袋を取った。二つともという彼に、私は、いくら何でも一つは自分で持つと言って、並んで歩いた。紙袋の中には、長い間使った座布団、ソロバン、鉛筆入れ等が入っていた。

私は振り返らなかつたけれど、十六階建てのビルが、別れを惜しんで見送ってくれているように感じて歩いた。

十六年間勤めた商社を辞めたのである。結婚のために。

その日から今日まで、あつという間に年月は流れていった。娘は今十二歳。ちよつと離れて産れた男の子は六歳である。

夫はと言えば、会社から帰ってきてもろくに話すこともなく、テレビの前に寝ころぶ。日曜日朝から晩まで、ひどい時は深夜放送が終るまで、いや、すべての番組がおわってシャーツと言っても、テレビの前に寝ころびっぱなしである。寝ころばれるのがいやなので、リクライニングの椅子を買ったら、その椅子の最高の傾斜、床と平行になるくらいまでして、テレビを見るのである。大金をはたいて買う必要はなかった。カーペットと椅子の差たるや、十センチとないのだから。

上の女の子の方はもう諦めているが、男の子の方は、いつパパが「電車に乗せてやろう」、「ボール投げをしよう」と誘ってくれるかと、ウロウロして待っている。結局、しびれを切らした私が、子供二人をどこかに連れ出して、日曜日は終る。もちろん、年に二、

三回は、家族で出かけることはあるのだが……。そんなことでは、男の子の父親への愛は、満たされないのである。

ちょっと文句を言おうものなら、「俺は、会社で働いてきているんだぞ。」男とはかくなるものかと気づいた時は、もう遅いのである。

布団をあげるのも、台所に顔を出すのも、男の恥と思っている男性が、今、この世の中に、私の目の前にいるのである。私が会社に勤めていた頃は、全てが自分の時間であった。会社で拘束されている八時間といえど、それは自分のために働いている時間であった。

それが今は、朝から晩まで子供に振り回され（これは決していやではないが）、やっと、夜、子供も眠り、片づけもすんで、やれ座ろうとすると、「ただいま」とご主人さまの御帰宅である。私は読みたい新聞、本、パンフレット類、子供の学校、幼稚園からの手紙類、と、目を通さなくてはならないものをテーブルに山積みにして、やっと片づいたばかりの台所で、夫の食事を暖めなおすのだ。

たまに、子供の学校や、幼稚園で知り合った、気の合うお母さんたちと、お茶とケーキで話している時だけが、自分の時間かしら。「みんなの出掛けた後は、全部、君の時間ではないか」と、夫は言うけれど、掃除・洗濯・雑事、きりがない。「掃除なんか、一週間しなくても死にはしない」と夫。以前に、保健所主催の講習会で、一日、掃除機をかけないと、何万匹というダニがふえるというのを聞いた

私は、一日一度は、何としてでもかけないと気がすまない。「その潔癖性が、いけないのだ」と、またまた夫のこと。

そうかもしれない。家にいるから、だめなのだ。下の子が小学校へ行きはじめたら、勤めてみよう。赤字続きの家計も何とかしなくてはならないのだと、未だ独身で働いているかつての同僚に電話をしてみた。たとえ十三年間のブランクがあるとはいえ、主婦業よりはまだ会社勤務の方がキャリアが長い。

「何を言ってるのよ、あなたの頃のコンピューターとは、ぜんぜん違っているのよ。伝票の整理？ タイプ？ そんなのみんな変わっているのよ。私だって何とかついていっているのよ。それに、あなた何歳？」電話のむこうで彼女は笑っている。なんと、まだまだやれると思っているのに！

私は電話を切った。さしずめ、パートで、スーパーのレジか、ビルの清掃、皿洗い、である。

「どんな仕事でも、ケーキを食べて、主婦同士つまらない噂話をしているより、ずっと意義があつて、立派な社会参加だわ」と、これまた独身で、バリバリ仕事をしている姉が言う。

「そうか……」
そんな仕事について、疲れて帰ってきてても、主人は台所ひとつ手伝ってくれないだろうし、日曜日は、テレビの前から、トイレと食事の時以外は動かないであろう。

何年か前に、夫の家事参加の調査というのが新聞に載っていたが、共働き、そうでないにかかわらず、一分か二分が、手伝い時間と出ているのを思い出す。

夫へのささいな不満の積み重ねに、不満をいだきつつ、子供二人を結婚させた暁には「別れさせていただきます」と、今はやりの妻からの離縁状をつきつけて、さっそうと、どこるか、とぼとぼと家を出て行くのであろうか。

「別れてやるわ、最後の面倒なんかみてやるものか」と、言うことによつて、うさを晴らして、これから生きて行こうか、と、思ったりもする。

ひよっとしたら、ひょうたんからこまが出ないとも限らないと思うこのごろである。

「うわ、女っておそろしい」
そんなことは露知らず、夫たるもの、毎月せつせと給料を運んでいるのである。

女・心とからだ

婦人科相談室のカルテより
五〇〇〇枚の

“れふあむ”おなじみの保健婦の赤松彰子さんが同僚の内田真砂さんと一緒にフリーの保健婦になって十年の体験をもとに、ドラマ仕立てで、生むこと、中絶、子宮筋腫、夫のきたえ方、嫁、姑など女の心とからだにひそむおはなしをレポートしています。一月十日付の朝日新聞に大きく紹介がのり、いま好評発売中です。創元社刊、一〇〇〇円です。

別居結婚

單身赴任のもたらしたものの

つなゆみこ

單身赴任は働き盛りの40代50代に集中しており、その理由は一に子供の教育、二に家を建てた、三に老親の都合、四に妻の勤務となっている。別居をきっかけに潜在的な家族の問題が顕在化して家庭崩壊をもたらすなど、單身赴任の非人間的な側面が今や社会問題になっている。

実際、妻に収入のない場合の二重世帯の消費はひどくかさみ、また、日常的に相談事がしにくく、大人同士の対話がなくて淋しい、夫の食生活が心配など、マイナス面は多い。プラス面としては、妻に自由時間がふえ、気楽、食事の手間が省ける、家族のありがたさを再認識するなどが挙げられている。

さて、私の夫も單身赴任して早や一年八カ月が終った。別居当初は、それぞれ今迄より一層たしかな自立を迫られて緊張し、一生懸命だったが、慣れてきたせいで二年目ともなると単親家庭としての生活形態ができてきかけている。

ひとり暮らしによって夫が自炊できるようになり、料理のレパートリーをふやしてくれることをひそかに期待したが、どうやらそれは無理のようである。帰宅するたびに私の炊いた煮物をおいしそうに食べて、弁当に持ち帰っている。

私達は夫が比較的近距离であること、自由業の要素の強い仕事がいまして、週末には会うことにしているの、私自身はさほど別居による不自由や淋しさを深刻には考えな

った。

が、この夏は自分たちの別居がもたらしたマイナス面に、深刻な家族の問題や生き方そのものについてあらためて考えないわけにいかない事が起きた。

私が別居してまで職にしがみついているのは、今の有利な職業のまま自分が経済的に自立していたいことが第一の理由である。

不況に関係なく年齢と共に上る給料、能力や持ち味を即仕事に生かして研修の機会が多く、同僚のレベルがほぼ同じで話も合う、こういう仕事か他の職場で簡単に見つかるはずもない。

15年前の初任給は3万5千円だったが、現在は手取りで24万円ある。私の年齢と能力にすれば最高の条件の職業といっても過言ではない。

ふたりの子供を保育所に預けている間中、情緒不安などに悩みながら仕事を続けてきたこと、9年間も学生だった夫と、親からの仕送りは一切なしに奨学金とアルバイトで協力してもらいながら勤め続けてきたことを思えば、夫の給料(26万円)で生活できるようなったからというだけの理由で退職するなど、今さらできないことである。

子供の教育費だって、十分なことをしてやろうと思えば近い将来どれだけ多くのお金が必要なことか。

私がどれほど苦勞して仕事を続け、仕事に執着をもっているかを知り抜いているはずの

夫なのに、この夏彼は私に退職を迫ってきた。「仕事と家庭とどっちが大切なんだ。僕はもう別居には疲れた。君みたいにひとりでもたくましく器用に仕事と家事はこなし切れない。子供だってかわいそうだし、仕事をやめて一緒に暮らすことを考えてくれ。」と言う。それまで目をつぶってきた日常生活の欲求不満がたまっていたことに加えて、私の夫への愛情に強い疑惑が生じていたのが大きな原因であった。去年は受験した転職のための採用試験を、今年は競争倍率の高さに恐れをなしたことに加えて、コネが全くなく採用の望み薄さからやる気をなくして途中で放棄した事から、同居する気をなくしたと受けとられたのである。

疑われる材料はほじくればいくらでもあった。ある夜かかってきた電話は、夫が出るとこちらのけいを伺うようにして無言のままプツリと切れた。私の男友達からの誘惑だったのではないかと、その時以来疑い出したようだ。

汗ばむ季節のこともあり、たまっていたもの香水を時たまふりかけては身ぎれいにして毎日のいそいそと出勤しては、同僚の男性たちとフランクにつき合っている様子にも猜疑心と嫉妬心が膨らんでいたのである。

「君が仕事をやめないなら別れてもいい」などと本心からとは思われないダダをこねられて初めて私は、それまで深く詮索もせずに放置してきた夫の孤独な深層心理をのぞいた思

いであつた。

勤務が早く終わった日に同僚の男性とふたりに美術館に行ったり、食堂で昼食を一緒にとるようなことは、私にとっては単なる気晴らしであり、軽い楽しみであっても、生真面目な夫にとっては自分に秘密だったというだけで、不貞行為と同じ位のショックだったらしい。

私に見捨てられていくような気がして追いつめられていた夫の苦しみをやっと気づいた私は、同僚の男性にチャホヤされていい気になって浮わっていたのではないかと反省したのである。

しかし、考えてみれば朝の7時半に家を出て、早くて平日は5時過ぎに仕事から帰宅し、買い物、洗濯、子供の世話にあげくれ、酒もタバコものまず、つましく生活している私、どれほどのんきに気楽にやっていたとしてもたかが知れているではないか。私がどんな悪い事をしたというのだと聞き直りたくもなる。

パート勤務の友人は別居についてこう言う。「私はあなたほど立派な専門職じゃないからいつでも辞めて夫についていくわ。家族を犠牲にしてまで意地を通すほど仕事に情熱をもやしているわけではないし、パートの仕事なんて単に労働力の切り売りにすぎないからねえ。」家庭第一の彼女は、パートを転々としているが、誠実な夫とふたりの子供に囲まれて平凡だが幸せそうである。

言われてみれば私も子供や夫に犠牲を強いる程重要な職でもなければ仕事そのものに打ちこんでそれだけを生きがいにしているわけでもない。家庭をおろそかにしていいなどとは決して思わないが、私には仕事も必要なの。しかし、何年先まで続くかわからないというのに、別居のままでいいのだろうかという焦燥感に駆り立てられることが全くないわけではない。

なまじ恵まれた労働条件に執着するからいけないのだ、条件が落ちることさえ納得すればどんな仕事だっていいではないかと自分を責めてみることもあった。

仕事をもつことが当然であり、自然のこととされる男には決して問われることのない疑問が女にはこれでもかこれでもかと、次々に新しい試験を課して圧迫する。女が労働戦線から脱落していくのは、仕事そのものにいきづまってというより周囲の家庭状況が追いこんでいるのだともいえる。

子供が小さい時は長時間保育やカギツ子問題、中年期は夫の転勤(単身赴任)、老親の介護問題——既婚の女が働くのはまさしく障害物競争なのだ。

数年前、沖藤典子さんの「女が職場を去る日」を本とテレビの両方共ひとごとと思えず身につまされながら興味深くみせてもらった。女に生まれるとやっぱり損だ、人生設計の変更を迫られたり、分の悪い仕事を押しつけられ、踏み台にされるのはいつも女の側だとい

うやりきれない感想をもったことである。

そんなのは被害者意識だ、平和な家庭のために妥協も犠牲もやむを得ないことだと言っただけだ。だが、女のために自分の仕事を犠牲にした男が果たして何人いるだろうか、微々たる数で例外的といってもいい。

最も悲劇的なのは、その時の解決策があつたか、微々たる数で例外的といってもいい。最も悲劇的なのは、その時の解決策があつたか、微々たる数で例外的といってもいい。

私達は別居によって毎月9万円もの余分の出費（交通費＋家賃＋水光熱費）がかさむが、それでも私が働かないで夫と同居している場合に比べれば、別居してでも働いていた方がはるかに多くのゆとりがあり、毎月の貯金は8万円にはなる。

私は結婚以来9年間も学生だった夫との結婚生活を振り返っては、結婚によってこれ以上自分を犠牲にしたくないと考えてきた。自分は損をしたのだという拭いがたい不満を心のどこかに巣食わせたまま、とり返しのない程大きな賭け（転職）をすべきでないとの自己保身本能というか打算と、私を強く求める夫に応えてやりたい愛着心とがせめぎ合い葛藤して私の胸をさいなんだ。

一家同居のために、損を承知で退職して別の所へ再就職と決心したのはつい最近のことであるが、就職先が決まる直前になって取りやめになった。

「15年もの仕事をわずかな退職金で打ち切

ってまで、確実に下がる勤務条件のところに
行くからには、あなたも永住する覚悟で最低
20年は勤めてほしい。」と迫ったところ、「先
の事は確約できない。別のところへ転職も考
えられる。」と言うのだ。もし数年先に再び
夫と同居できなくなるような異動があれば、
私の転職は無意味になるばかりか、その時は
失業してしまうだろう。

子供のためにも、一時は同居を切実に考
えてみたが、子供だつてあと10年もすれば上
の子は21歳、下の子は18歳で、親離れするし、
結婚すればいやでも子離れせざるを得なくな



り、私にとって仕事はますます必要不可欠の
ものになってくるというものだ。

別居結婚さえしていなければこんな葛藤は
味わわずにすんだのにと思うことがある。見
廻したところ、結婚が女に不公平をもたらし
ていることが多すぎるようだ。

が、誰のためにも忍耐せず、損もしない独
身が理想かというところも思わない。自分だ
けの事しか考えないですむ気ままなひとり暮
らしを長く送っていたとしたら、わがままな
私はそれこそ周囲の人へのこまやかな気配り
をもてず、生活者として地に足がついていな
かっただろう。また、妻や嫁、母としての経

験は、世間の人並の人がやってきたことは一
応自分もやったのだという自信というか、安
定感のようなものをもたらした。

一生のうち一度は結婚して親になる経験は
してみる価値はある。結果がたとえ失敗にお
わつてもしないよりはるかに人間として成熟
する教訓をもたらすと思う。ただ、その機会
や苦楽を自分の中に血肉化して成長していけ
るかどうかは、その人の資質や生きる姿勢が
決める。

結婚によってむき出しのエゴイズムがぶつ
かり合い、互いの親戚がからみ合うトラブル
や気持ちのすれ違いなど、複雑に錯綜して織
りなす人間関係に疲れ果てることもある。

しかし、反面、夫婦として愛し愛されるこ
とで得られる心の安らぎや充足感、無条件に
かわいい子供の成長を共に見守れるなど、精
神面での豊かさを得ているのだから、結婚は
単純に物理的な損得勘定では推し量れないと
ころがある。

すべてが条理に叶っていて、プラスマイナ
スの帳尻が合つてさえいけばいいというもの
でもなからう。不完全な人間同士がカバーし
合い許容し合うのが家族であり、家庭のぬく
もりはそこにあるのだといえよう。

それらのもろもろの要素を総括してみても尚
言えることは、もしこの先離婚したとしたら、
もう二度と結婚はしたくないというのが私の
今の本音である。どんなに立派な男性と結婚
しても、そのつど男の甘えやエゴイズムにつ

き合わされて腹立たしい思いを味わうのは目に見えている。

現在別居しながらも、それぞれの仕事や生き方を尊重して円満な結婚をしている人達は、さまざま工夫や思いやり、努力を重ねているようだ。

お互いに自立しながら信頼し合い、協力し合うという関係が同居、別居を問わず理想的な結婚であろうと思う。

自立できない（しようとしない）人が、自立している相棒に際限なくもたれかかって重い負担をかけ続けていると、第二の人生ともいえる老後の人間関係にひずみが生じて「粗大ゴミ」扱いされたり、老妻に「せめて余生は自由にしたい」と離縁されなはいえない。

私達は何度も話し合った末、自分の現状維持でいくことにした。一緒に生活しながら地獄の思いで耐えている人や憎み合いながら別れられない人もいることを思えば、毎日電話をかけ、週末には2日間を共に過ごして家庭のどんらんを味わっているのだから、これで満足するしかない。今の別居が最良の家庭のあり方だとは思っていないが、お互いに仕事を優先させる以上やむを得ない。

仕事を捨てずに同居できる日がくるかこないか、それまで夫婦の間がもつのかどうかは予測がつかない。一時は深刻に悩み苦しんだが、私はもはやどんな事があったても仕事を捨てない決心を固めた。「人間は裏切ることがあっても仕事は決して裏切らない」からである。

考えてみると、今の私たち夫婦を結びつけているのはまず愛情であり、共通の価値観や趣味、子育てであり、また、貧困をかくくぐってきた戦友のようなもの、運命共同体とも名づけられるような要素が強いようだ。私はほぼ理想に近い男性とおそらく生涯に一度の恋愛結婚でき、かなり幸福な結婚生活をしていると思う。

物事には両面あることに目を向けて、今は別居のマイナス面をむしろ積極的にプラスに転化し、健康で働けることに感謝しつつ、生活を楽しみながら明るくのりきっていきたいと思っている。

子供だって成人すればやがて親をうとましがらるだろうし、どんなに多くの家族に囲まれていても、ピツタリと心に寄り添うような連帯感ももてるとは限らない。人は所詮ひとりで生まれてひとりで死ぬ孤独な存在なのだ。高齢化社会に向けて、これからはひとりひとりがいや応なく自立を迫られる時代に入っている。豊かな老後、生きがいある老後のためにも、早くから人生設計をしっかりと立て、自分の事は人に頼らない努力をつみ重ね、趣味や友人の幅も広げておきたい。また、好奇心を絶やさないで、常に新しいものに目を向ける感性も磨いておきたいものである。

れふあむ例会レポート

56回／84年2月5日十三華麻衣にて新年会会場あふれんばかりの大にぎわい。17号の合評会は、網野さんの「私の時間、私の世界」に集中。さて本日の庄巻は「フラメンコその魔性の魅力」を書いた荒井さんが、日頃の練習の成果を華麗に披露、熱演が会場の皆さんにのりうつってディスコダンスの時間が短かく感じられました。ギターは村上徳蔵、踊りは飯倉多恵さんにもう一人。つまり女性3人で大熱演。荒井さんの夫君も子づれでカメラマンをやっていました。（辻幸子）

この日の食事その他を用意したのはランゲ裕子さん。お手伝いは寺島令子さんと辻幸子さん。私と米家さんは梅田コマ劇場の人にたのんで荒井さんがおどるフラメンコの舞台をとり。米家さんの教え子のつとめる運送店から大きなトラックを借りて運びました。

宣伝が行きわたっていて、次々とお客が来るわ、来るわ。東京からは「女から女たちへ」を松野さんと一緒に出している佐伯洋子さんと「女たちの映画祭」の松本加奈子さん。そしてキャサリン・プロデリックおや子にフランス人も。そしてダイエーの伊藤さんや執筆者の田畑、人見、高木、由里、尼川さんも。「それいゆ」からは吉田さんも、京都の「ウイメンズ・ブックストア」の中西さんも。何だかあわただしくも華麗な一日でした。浅野さんのスライドによるケニアレポートも。

（正路）

家ってなぬあに
毒になつても嫁にはなるな
角橋 佐智子

M子、五十五歳。繊維関係の会社に勤める
Oしならぬオフィス・オパンである。愛想よく
客に接する姿はとても孫がいる人とは思えず
若やいで見える。

しかし、退社時刻が過ぎ、家路に向うに従
って、彼女の心は重くなつていく。M子が勤
務に出ている間に、亡夫の弟妹たちが財産分
与の利権をめぐる、彼女の息子夫婦を責め
たて、姑を言いくるめ、M子の居場所をおび
やかしているかも知れないからである。

この小姑たちを一蹴する力を彼女は持たな
い。
数カ月前、舅が亡くなり、財産(といつて
も家屋敷だけだが)相続問題が持ち上つた。
M子の夫はすでに十二年前、彼の父(舅)よ
り先に亡くなつていたので、妻たる彼女の相
続権は、頭上を素通りして、彼女の息子たち
のところへ行つてしまふため、これに関して
何の権利も主張出来ないからである。

M子の青春は空襲とそれに次ぐ焼土から始
まつた。女学校時代は授業の代りの学徒動員
で、豚の飼育、軍需工場での作業と、国策に
添つて働き、純な女学生は、勝利の日まで、
頑張つた。

だが、日本は負けた。多くの若い男性が死

んでいた。

軍国女学生から一転、新時代の女性へ胸を
張つて変身した人もあつたが、ほとんどの普
通の女性はそうではなかつた。

空襲の恐怖から解放されたとしても、今日
を一日食べることに精一杯の時代である。第
一、せつかくの学生生活が軍需工場通いでは、
まともな本にも充分触れることなく過して来
ている。さあ、これから自覚的に生きろとい
う方が無理というものだ。あらゆる面で余裕
のない、割に合わない世代である。

M子も女学校を終え、少しずつ世の中が落
ち付いてくると花嫁修業にいそしんだ。
新しい憲法が制定され、男女の平等、家族
制度の廃止を謳つても、庶民の日常感覚や社
会通念が、すぐさま条文どおりすんなりと変
つていくものではない。

女の生きる道は、すなわち嫁して子を産み、
夫につかえ、家を守ることで、「女大学」がま
だ露地裏では充分生きていたころである。
女性が本当に自由に生きられるようになって
たのは、ほんのつい最近のことといつてよい
だろう。

M子もそのころのごく平均的な市民感覚で
もつて見合結婚をした。昭和二十八年、二十

四歳のときであつた。

相手は旧家の六人兄妹の長男、M子と同齡
の長妹が結婚して家を出てただけで、第一
人、妹三人、それに父母、祖母の大家族の中
へ嫁入つたのである。

その中で男子二人を生み、祖母は亡くなり、
弟妹たちは次々と結婚して家を去つた。
と、文字で書けばあつけないが、その間、
夫の事業の失敗、大家族の中の人間関係と、
大波小波の打ち寄せる日々は、身も心も安ら
かではなかつた。

息子たちも成人にあと一步という、心おだ
やかな日が訪れかけ、M子が四十代にさしか
かつたころ、今度は頼みの夫が突然倒れた。
それから三年の入院生活中、M子は病床脇
の付き添い用ベッドで寝泊りしながら、生活
を支える勤めに出た。

やがて夫が退院して、リハビリにはげんで
いたのに、風邪がもとであつけなく世を去つ
た。彼女は四十三歳であつた。
そして、上の息子が成人し、結婚。さんざ
ん荒波にほんろうされた母を見ながら育つた
心やさしい息子は、結婚後も母、祖父母と同
居した。

今年初め、高齢の舅が亡くなつたことから、
M子の周辺は再び波立ちはじめた。
舅名儀の家屋敷、つまり現在、M子とその
家族(姑、息子夫婦、孫)が住んでいる場所
を、相続法に基づいて公平に分割せよと、亡
夫の弟妹たちが主張し出し、骨肉のあらそい

が始まった。弟妹たちは十数年前にそれぞれ独立して自分の生活を築いているにもかかわらず、残された家族の住む家を「親の遺産」として譲渡の権利を主張してきたのだ。

度重なる会議が開かれ、欲望むき出しの修羅場が幾度も演じられた。

ここに住んで三十余年、実質的には家を代表する立場にあるM子が、その会議には相続権なしということ、全くの部外者になってしまった。

もし、M子の夫・亡父から相続権を引き継ぐ息子が同居していなかったら、彼女はたちまち居場所を失ってしまっただろう。

夫に先立たれた妻は、遺言状でもない限り、舅からの財産は毛すじ一本受ける権利はない。

「ここは私の家だ。私たちの生活の場をとりに上げるなんてゆるせない。」という、人間として当然の主張が、現行の法律に照らすとM子にはできないのである。

宮々と舅姑につかえ、夫の弟妹の世話をし、親戚つき合い一さいを引き受けた長男の嫁の座は、全くはかない幻であった。

法には「妻」はあっても「嫁」は存在しない。しかし、嫁の法的根拠はなくても、実体は依然として存在することは確かだ。

永年、M子の周辺はM子に「嫁」の立場に居てその任を果たすよう求め、それを当然のこととしてきた。彼女もまた、いろいろな思いはあったとしても、忠実にその任を勤めて来たのである。

そして、あげくにM子の困って立つ場所が無いとは、一体どういうことなのだろうか。もっと早く目ざめて、女性は自己を主張していくべきだという人がいるかも知れない。だが、それができなかった世代の人たちが確かにいるのだ。

法律が前衛的な、非常に近代的な型で存在しているのに、人びとの意識の方が立ち遅れ、そのギャップによる悲劇である。

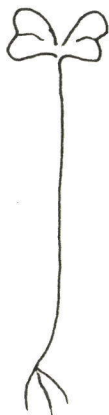
時代の狭間に押し潰されてしまった「嫁」たちを救うのに、どういう方法があるのだろうか。

今を生きる女性の自衛策は唯一つ、「妻」にはなっても、まちがっても「嫁」になつてはいけないのだ。

「嫁」という、何となくうらさびしい、遠慮がちで陰気な言葉を、決して女性の上に載ってはいけないのだ。

三十余年の存在が、まるで、その古屋に住みつくねずみ一匹よりも心もとなない状況になりかねないのだから。

ちなみにM子とは私の実姉である。こんな馬鹿なことがあってよいものかと思いつつ、手をこまねいて見守るしかない己れの非力を嘆いている。



れふあむ例会レポート

57回/84年の9月9日淡路の金尾恵子さん宅、テーマ「動物の絵をかいて(金尾恵子) 最新アメリカレポート(松野潔子)」

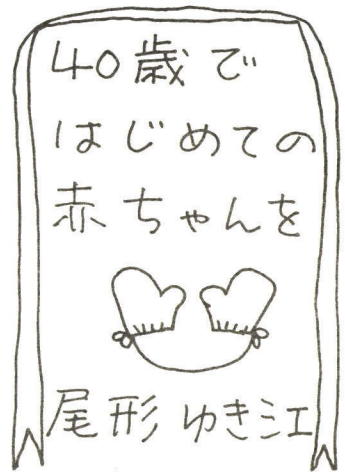
大雨の中を、とつてもわかりにくい地図、なにしろ電話できいただけで一度も行ったことないのに適当に書いた案内図をたよりに迷いながら到着。

8匹の猫そして犬、イモリ、生まれて2週間目のセキセイインコとそして母上と妹さんと同居の動物絵描きさん。絵本は10冊以上作成。鳥の絵やライオン、カメなどこまかくかきこんでいる。素人だけど好きで始めてもう15年——つづけることですと明るく語る。松野さんのおはなしいいかげんに聞きながしタイ料理にインド料理にパクついたのは初参加の丹羽、安東、北原、前川さんの他、キャサリン、尼川、金本、後藤、黒田、辻、浅野さんたち。

彼女を紹介してくれたのは浅野裕子さん。83年の年末に、大阪市立婦人会館の婦人問題講座で知りあった「ビヤダル」の人たちとケニア旅行に行つてからだという。動物の絵をかいたためにサファリにも行ったとか。

私もこの夏のケニア旅行に備えて(?)「野生のエルザ」を読み始めた。ナイロビでの国際婦人年世界大会に参加するのが目的だがどうなりますやら。

(正路)



私は長い間独身で新潟市役所に勤務していた。同窓生たちが各々の家庭を築き、人生の基礎を固めているというのに三十路を過ぎても結婚恐怖症があった。私には十三歳の時略血して十六歳でやっと気管支拡張症と診断された持病と慢性中耳炎があった。毎年三、四回吐血するという有様で、それが結婚恐怖症の最大原因であった。それでも公務員ということで公務員からの縁談が多かった。その凡てが共稼ぎを条件にしていた。だが、吐血する身に共稼ぎを続けながら出産し姑に仕えるなどという勇氣はなかった。そのうちに女の厄年も過ぎた。それまで文学活動、社会教育活動に情熱を注いだりして、それなりにハイミス生活をエンジョイした面もあった。

だが、だんだんそんな生活に虚無感と倦怠感を感じはじめ、自分の容貌に老いを感じはじめると、もうたまらなくなっていた。なんとかして生活の形を変えなくては、一度も結婚しなかった、と後悔するより、その結果

がどうなろうと結婚してみよう、と決心した。ちやうどその頃現在の夫となった人との縁談がおきた。茨城県鉾田町在住の地方公務員であった。私は三十五歳で結婚した。晩婚だったので子供のことはあきらめていた。

ある時、石岡市のお祭り日、墨衣の尼さんが占いをしていた。私の生年月日と手相を見た尼さんは、「あなたにはお子さんが授かります」と予言した。だが三年経っても四年経ってもその兆しは見られなかった。とうとう四十歳になってしまった。やっぱり石女で一生終るのかもしれない、と思っていた矢先、今年三月上旬、我身の妊娠を知った。だが、三十九歳までを高齢出産と称しても四十歳の私は超高齢出産であり、加うるに咳と痰がつきまとう気管支拡張症といつ激痛におそわれるかしの腎臓結石を持っていたのである。一度も妊娠、中絶、流産を体験したことの無い私であるだけにいっそう生みたい、と切望した。母も姉妹たちも、そんな危険な出産に臨むことに反対した。奇形児やダウン症の発生率も高い、と云われる。

だが、妊娠と同時に流産の危険が現われた。トイレに立つ以外は安静に、と医師に指示され、家事の大部分を夫が引き受けた。夫は役所の帰りに既成品のお菜を買って帰る日が続いた。だが安静にしても気管支の奥にたまった痰を吐くたびにお胎に力が入り、三月中には二回子宮から少量の出血を見た。それでも入院もせず自宅で安静にしている。四月

下旬に入って、もう妊娠四カ月半だから大丈夫かしら、と思っていると気管支から血痰が二回ほど出た。内科へ行くと医師の方が驚いて、「妊娠四カ月半の身体に止血剤を注射することも飲み薬を出すこともできません」と宣告される。産婦人科医でもらった咳止めも痰をきる薬も効かず、ただ流産しないようにと神さまにお祈りしながら寝ているしかなかった。その時に次のような詩が生まれた。

受胎

おまえを身籠ってから
坂道を登るように
肩で息をする

花粉の季節が訪れ
激しい咳が毎晩おそって
おまえの海を揺るけれど
たえず喉をふさぐ
痰をさらねば眠れない
腺病質の母体

胎芽が胎児になり
海辺の揺れる巣の中の
青鷺の雛のような
目 肋骨 心臓ができあがり
心拍動が確認される日まで

月の光の透きとおる
繭になったままでいるように
と

医師に指示されたけれど突然切れた気管支の毛細血管おまえを身籠った繭に血がにじむ

おまえは生物の進化の二千万年の過程を僅か一日で辿るこの地球での重い日々おまえの全身に産毛が生えはじめようとするのに

血をにじませた繭のまま産毛の一本さえも

創造することに手助けできない遠い海鳴りを聴きながらわたしは母になるということに堪える

季節は若葉の五月になり妊娠五カ月半に入った。これで流産の危険も去ったらしいと一安心すると、また咳のために子宮から少量の出血。五月十五日、夜中今度は左腎臓結石の激痛がおそい、身体を四つん這いにして苦しむ。夜中入院。当直医は超音波で胎児の身体の動きを見ながら、「母体は弱いけれど胎児は元気ですよ」と言ってくれました。点滴を受けながら、こんな弱い母体を因縁性として生まれて来ようとする生命があるなんて、と思わず涙が出てしまう。翌朝、血尿が止まり帰宅。五月二十三日胎動を感じる。

六カ月に入りもうこれで流産の危険も去っ

たと思い、「詩人貞松瑩子像」を執筆したくて、敬愛する貞松さんに会うため千葉県松戸市に行く。茨城新聞社より詩、随筆の原稿依頼がある。そのためあせって、七月中旬、七カ月の身重の体をひきずって水戸市で催された「山村暮鳥生誕百年記念講演会」を聴きに行く。会場の冷房に当たり風邪をひく。激しい咳が一週間続き子宮から少量の出血。その時は早産するかもしれない、と覚悟する。だが出血も止まり八カ月に入る。猛暑の八月、胎動をいっそう強く感じ、こみあげるいとしさと母性を自覚する。屋根の低い借家での生活は暑くて苦しかった。汗がいつもの二倍出る。八月四日、夫の運転する車で郡山経由で帰郷。途中、会津若松で一泊。

八月十日、新潟市の竹山病院（オキノ式避妊で有名な荻野博士のいらした病院）で診察を受ける。八十歳の高橋医師に、「気管支拡張症の女は出産してはならないのですよ、どうして二、三カ月の時に中絶してしまわなかったのですか。激しい咳のために胎児がもう骨盤の近くまで下がっています。八カ月児は育たんですよ。今月生まれたら母子ともに危険ですよ」と宣告される。その日も私も食事が喉に通らない。安静を言い渡される。湿気の多い猛暑の夜、不眠と咳と痰に苦しむ。もらった薬が効かない。安静にして一日も多のお胎の中で胎児を育てるように、と指示される。胎児にとってのお胎の中の一日は、この世の生の七日間に値すると言われる。月の上

に座礁した小舟のような不安の日々が続いた。神さまに祈るより方法がなかった。

九月二日、いよいよ九カ月に入ったというのに咳のため子宮から出血。入院。切迫早産になりそうになり陣痛止めの注射を一カ月間続ける。抗生物質を一カ月間服用することになる。内心、奇形児になることを恐れるが、医師を信じて服用。老医師に、「当病院で気管支拡張症でお産をした人はいません。あなたは冒険をします」と言われあきれられる。薄水をはった池の上を祈りながら歩くような一カ月が過ぎた。毎日元気な胎動を感じる。いよいよ臨月。夜になると益々痰が喉をふさぎ呼吸困難になる。私の吸う酸素が胎盤を通して胎児に送られているのでとても心配になる。夜中、呼吸困難で眠れなくなり筆筒によりかかって起きている。母体も弱ってきて脂汗が流れる。

十月十五日、検診日に人工陣痛をおこして出産させてもらうよう頼む。医師も二十日以降生まれなければ人工陣痛をおこす、と言われる。十月十六日夜中の一時、陣痛がおこり明け方入院。初めて体験する陣痛に腰も子宮も砕けそうに感じる。気管支拡張症があるため医師はあくまで正常分娩で出産させようと努力して下さったが、三十時間頑張っても子宮は四センチしか開かなかった。

母はよく「胎児の頭が出る時の痛みは障子の棧も見えなくなるほどの痛み」だと言い、私の五、六分おきの陣痛ぐらいでは、まだま

だ生まれない、と言った。私は陣痛の苦しみの最中に帝王切開してもらいたいと思った。そして、四十歳の母体は、陣痛が女自身の持つ痛覚の極限に高まることを非常に恐れた。三十時間の陣痛の後、体力が弱るからということと弱い局部麻酔で帝王切開になった。十七日、午後二時十二分、二九〇〇グラムの男児が元気な産声をあげた。沢山の薬を服用したにもかかわらず、五体満足な丈夫そうな赤ん坊の誕生であった。思わず涙が流れた。父母も妹も泣いて祝福してくれた。

帝王切開したら気管支拡張症は三倍悪くなります、と言われたけれど、本当に産出した夜から一週間たえず痰が喉をふさいだ。粘着性の強い痰がしつこく喉をふさぎ、お腹の傷のためにその痰を切ることもできず、呼吸困難の日が続いた。痰を切るたびに脂汗が流れた。抜糸したお腹は退院してもしばらく痛み、気管支拡張症のために胸痛があり、夜中赤ん坊にミルクを作るのが苦痛であった。

私自身、妊娠が進行すればする程、気管支拡張症が悪化するということと、陣痛の度合を初めから解っていたなら、臆病者の私はきつと出産を避けたかもしれない。そういうことに無知だったがゆえにこんな冒険ができたのかもしれない。平均体重より小さく生まれた子であったが、一カ月検診日には四六〇〇グラムになっていた。こんな弱い母体に必死になんてしがみついて来たこの男児は今、丈夫なひょうきん者として逞しく育っている。

四年程前に「働く婦人の悩み一一〇番」に電話して皆さんの仲間入りし、いろいろアドバイスしていただき頑張っています。当時保育所通いの息子も今は小学二年生。

保育所の帰りに「どうして僕だけいつも六時までなの？他の人は四時なのに」と言われ胸の奥までグサツときて涙がでてきそうでした。でも私たちにとって大きな問題でした。

「人の顔もそれぞれ違うでしょう。それと同じでお母さんにはお母さんの仕事があるのよ。私も頑張っているからあなたも頑張っても早く終わったら急いで行くからね」

一応納得したのか、その後そのことは言わなくなりました。それでもいつもいろんな質問をかかえてやってきます。大人は当然のことと思っているけど、子供の目はきびしいもので、改めて考えさせられることの連続です。

先日も台所へやってきて「僕、トマホークいややわ」と、ひとりごとのように言っていました。あれっ／＼と思いつトマホークって何なの」と聞くと

「ミサイルのことや。戦争の時使うものや。広島や長崎に落した原爆と同じみたいやけど、ちょっと違うの。広島のは飛行機で落したけど、トマホークはボタンを押すと飛んで行くのや」

ここまで知っているのかと、びっくり、大人の問題だと思っていたけど、親子で話し合える話題ができて、力づけられます。

又「お母さんどうしてコマージュは、女

子供に成長に支えられて……徳田リツ子

の人が多いのかな？」またまた困って、変なことばかり聞くな、と思いつながら、

「お母さんにもわからないの？」

「えらくないから勉強しているのよ」

そんなやりとりの翌日、女たちの映画祭に参加しました。その時みた国連のフィルム「女性の地位」にやはりコマージュの問題がでてきて、あっ／＼と目をしていました。子供って本心に素直できびしい目をしているんですね。

親は全く進歩せず、子供に取り残されたような気持ちで、悲しく思う時もあります。言うことをきかないので怒ると、

「今おこっているの？注意しているの？」と、困ることを言うてきます。しかたなく、

「注意しているに、きまつてるでしょう」といわざるをえなくなってしまうのです。

時には親子であったり、恋人同士であったり、夫婦であったりと、その時の会話でいろいろと変わります。

「きょうは、梅田で待っているから、できて」と言ってお金をおいて朝家を出る。待っている間、乗りかえてこれるかな？ちょっと心細いけど、会えた時はとてもうれしい。一度できると「今度はいつ？」と楽しみにしている。長期休みになると、新幹線で親戚へいそいそと行ってしまふ。


これからもいろいろチャレンジして、親子で頑張っていきます。



母の思い出

此頃「自分史」を書くことが流行っているという。私自身の「自分史」など大して面白くもないが、最近亡くなった母の一生は多少面白いのではないかと思うし、供養にでもなれば、と勧められるままペンをとってみる。

母は日露戦争の勝利に日本中が湧きたっている明治三十八年十一月、横浜の輸出絹物商を両親に、六人兄弟の五番目として生まれた。横浜の小学校、県立高女を経て共立女子専門学校和裁科に進む。十九才の時、下校途中の品川で関東大震災に遭い、その日は品川から鎌倉の友人宅まで歩いたとか。翌日横浜の自宅跡へ戻り、家族が石川県に避難したのを知り、後を追う。母の両親はこれを機に商売を次男に譲り、田舎で暮らすことにしたので、母もそのまま学校をやめさせる積りだったらしい。ところが、母の級友で女学校卒業後五年間働いて学費をためた末共立に進学してきたという方が、「学問は今でなければ出来ないのだし、きっと将来学んでおいてよかったという日が来る」と母に復学を勧め、又母の両親にも手紙を書いて説得して下さったお陰で、



原沢那美子

母は再び横浜に戻り、次兄の家から神田の共立に通学することになる。(余談だが、このお友達は後に大阪で幼稚園から短大迄の私立学校を創立し、八十三才の今も現役の学長として御活躍中である。母は生涯この方を恩人としておつき合い願っていた。)昭和初期の世界的不況で商売の縮少を余儀なくされた次兄一家には子供が八人もおり、上の三人の面倒は殆んど母がみたとか。後年母が私を育てるのに家事手伝を余りさせなかったのは、この時の経験から、女はどうせいつかは嫌でも家事をしなければならなくなるのだから早くからあわててやる事もない、との信条に達したものでらしい。級友の勧めに従って共立の師範科迄を卒業した母はそのまま助手として母校に勤務することになる。

この頃兄嫁の弟の帝大生を憎からず思っていたらしいが、嫁姑の問題から両家の間がこじれており、彼に「親をすてて来るなら結婚する」といわれ、あきらめた由。間もなく満鉄に勤める人と結婚して満州に渡る。母は旅行好きで、満鉄のパスのお陰であちこち行け

て楽しかった、とよく聞かされた。だが新婚生活も束の間、一年余で夫が肋膜炎を患い内地へ戻ることになる。夫の親戚のいた神戸の垂水に居を定め、間もなく長男誕生。夫の療養費及び親子三人の生活費は母が共立和裁科で学んだ知識を基に、洋裁で稼ぐ生活が始まった。神戸という土地柄のせいか、母の洋裁のお客には外人も多かったらしい。お宅に仮縫に行ったら奥様が母の目の前で下着までとってしまったのにはびっくりした、といっていた。しかし夫は急性肺炎にかかり、「子供を無事に育てあげてくれるなら再婚でも何でもしていい」といい残して死ぬ。この時母二十六歳、兄二歳。

その後兄嫁の兄が関西に転任してきたのを縁に母と結ばれ私が生まれた。この時母三十六歳、兄十二歳。私が小さい頃母は月に一度「塩断ちの日」を作っていた。私が理由をきいた、兄が病気になる時神様に願をかけた、といっていたが、兄にきいても大病はしていないという。後年私が塩断ちの事を思い出してきたら、もう終り、といっていたが、どうやら私の生い立ちに関係するのではないかと思われる。私の父は昭和二十年、私が三歳の時ふとした風邪がもとで急逝、残されたのは千八百円の私名儀の預金だけ。それも預金封鎖、新円切換等で役に立たず、再び母の細腕一本に戦中戦後の親子三人の生活がかかることになる。そこで母は祖母のいる石川県へ疎開、洋裁を教え、仕立物をこなし、畑仕事

をして何とか生活を維持していく。

兄が大学へ行きたいといい出したのを機会に再び神戸に戻り洋裁店を開いた。母四十六歳、兄二十二歳、私十歳。この時が母の一生の中で一番心細かったとのこと。後年、役人から政治家になっていた叔父が私を可愛がってくれて、母が何か頼んできたなら、いつでも手を貸すつもりだった、というのでその言葉を母に伝えたら、「そんな事は一度も考えたことがない。人に頭を下げて頼むより自分で苦労する方がいい」とのことだった。そして私にも「人に迷惑をかけるな。人に迷惑さえかけなければ何をしてもいい」といつていた。(私の一人言、私の頭が高いのはこの教えのせいかも……)

兄が結婚して独立したのは母が四十九歳の時。私も公立の大学に入っていたので、母もようやく経済的、精神的に少し余裕が出てきたらしい。前述したように母は旅行が好きだったが、それまではやはり旅行好きの兄が買ってきた時刻表を好んで読む位で、実際の旅行はなかなか出来なかった。しかし8才年上の伯母に「行きたい所があれば六十歳迄に行っておかないと、体が弱って行けなくなる」と言われてからは、今年は六月に北海道、次は九州、と旅を楽しみ始める。九州旅行は、暮の二十九日、突然「年内に」と頼まれた仕事は一通り終わったから、明朝一番の汽車で鹿児島へ行く」と言い出し、帰省ラッシュで混んでいるから、といくらとめてもきかず、翌

朝私が目をさました時には母は出発した後だった。帰ってからきいたら、「元旦の桜島がとてきれいだ。行ってよかった」と満足気だった。

母の勧めで私が東京に就職してからは仕事のひまな二月、八月及び共立同窓会の開かれる五月と少なくとも年に三回は上京、一週間程私の処に来るのを楽しみにしていた。その東京からの帰途、車中で偶然知り合った若い方々につれられてゴムゾウリで黒四ダムへ登



ったとかで、写真が送られてきて、礼状の代筆をさせられたこともあった。又ある時は、神戸から東京へ行くついでに四国一周をしたと聞き、あきれてしまった。母の旅行は、行ったことのない場所へ行きたい、知らない駅で下りて、行先も知らないバスに乗って終点からすぐ又戻ってくるだけでも楽しい、というもので、座席の予約がとれないとか、いい旅館に泊まりたい、おいしい物が食べたい、などという事は一切言わなかった。いつも一

人で、仕事の合間を見つけて、日頃からなるべく安い切符を買ってルートを頭をひねり、隣席に話の合う方が坐るのを楽しみにしていた。言葉の問題もあるし、国内でも充分楽しいから、と外国志向は薄かったが、私の結婚後は仕事柄外国生活の多い私の夫に色々細かい質問をしていた。自分が短い結婚生活を送った満州の大連や奉天の街は特別なつかしいらしく、たまたま銀行員として中国在勤経験を持つ夫との間に話の華を咲かせていた。

二人の子供たちが巣立ってからも、ずっと垂水で一人暮らしをしながら洋裁を続けていた。正式に洋裁を習った訳でもないし、それ程かっよく仕上げるとも思えないので、私が「どんな方が頼むの」ときいたら、母曰く、「年とった人はかっよさより、着心地第一だから、私の作るのが一番着易いと言ってくれる。それに年寄りには安くしてあげるから。」とのことだった。

母は最後に肺癌に冒されるまでは健康そのもので、二十一世紀になれば何か素晴らしい事がありそう、と長生きするのを楽しみにしていた。その母の健康法の第一は、共立の時習ったという自彊術体操、六十年以上も毎日欠かさずやっていた。後年は身体も固くなり、あれでも曲げているのかと思われるやり方ではあったが、肺癌で入院した後もやれる限りはやっていたらしい。第二は水泳と散歩。幸い垂水に住んで海が近かったので、夏になると毎朝五時頃から「一気に泳げるだけ泳いで

帰ってくる、三百米から五百米位」といっていた。朝は漁師の他誰もいないから、と私の着なくなった赤い水着を着ていくので、万におぼれかけて漁師のお兄さんが助けに来てくれても、水着の中身を見てひき返すのでは、とひやかしたものだ。夏以外は、二時間の早朝散歩をしていた。だから足は達者で、のろのろ歩くとかえって疲れる、といっていた。昨年九月お医者に行った時の母の訴えは「今まで男の人に負けないで歩いて平気だったのに、この頃息が切れる」というものだった。

ともかく生活費を子供たちに頼らず、仕事があり、健康で、時々東京へ行くついでに回遊切符で好きな旅行をするなんて、理想的な老後の人生だと本人も思っていたらしい。東京に来ると、友人連にせっせと電話をかけ、又あちこちからもかかって来る。母の短い滞在が終わった後でかかってくることもあって、代りに私が少しおしゃべりしたりで、母のお友達のお顔は存じあげなくても、お声だけは聞きなれた方も何人かいらっしやる。

その母が昨年九月、夏の疲れがなかなかとれない、と書いてきたので、医者に行くよう勧めた直後、兄からの電話で母が肺癌と診断され、余命は一年と知らされた。垂水の玉津病院に二カ月入院した後、神戸の生活に未練たっぷり母をなだめすかせて、母の友人も多い東京で、子供もなく専業主婦の私の家に引き取った。東京に来てからも母の話はいつも十年、二十年先のことで、前向きな姿勢を

崩さない母と話していると、余命一年というのが全く信じられなかった。移って二カ月して再び肺に水がたまったからと入院したが、少し微熱があるだけで全く元気に見えたので、母も私も前回同様に水を抜いたらすぐ退院出来るものと思い、医師もそうに言って下さっていた。しかし現実には、そのまま最後の五カ月余を病院で過ごすことになってしまった。それでも母は「昔垂水に住んでいた大変な時期を元気で過せて幸せだった」と言っていた。亡くなってからの整理で改めて母にお友達が多かったのに驚く。小学校以来とか、共立で教えた方とか、何れも五十年、六十年のおつき合いの方が多い。四月末に病院から外泊した折、共立のクラス会に初めて付き添って行ったが、流石に疲れた様子だった。それでも五月の共立同窓会に出るのを楽しみに、病院へ「同窓会出席の為」と外泊許可願を出した程だったが、衰弱が進んで、「毎年出席していたのに」と残念そうだったが、終に出ずじまいになった。

生前の母は余り信仰心の厚い方ではなかった。というよりは、生活に追われてそれどころではなかったのだろう。新幹線開通の頃、母は「お墓はいらない。灰を新幹線からまいてくれればいい」といって、子供たちから新幹線の窓が開かないと教えられると、「飛行機からまいてほしい」「洗濯物が汚れては迷惑」とうとうとう瀬戸内海にまくことになった。晩年はどう思っていたか分らないが、五十余

年住み慣れた神戸で長男一家と一緒に、又以前訪ねて気に入った川越で娘一家と一緒に眠れる様に、都合二カ所に墓が出来たことを知ったら何というか。「そんな二度手間なことしなくてもいいのに」と照れ臭そうな、そして又満更でもなさそうな顔をするのではないかと思う。

四月のクラス会に付き添って行ったのと、多分いつかの電話でのおしゃべりの縁で、私にこの秋のクラス会は母の追悼会にするから母の写真と共に出席する様に、との御招待を受けた。母の亡き後追悼会までして下さる友人に恵まれ、親不孝ばかりでもなかった子供を持った母の一生は、苦勞があったにしても幸せだった、と思えるこの頃である。

那美子さんのこと

正路怜子

私と那美子さんは神戸外大ロシア学科のクラスメート。30人中4人しか女子がいなくてそれでもいままでは2人だったのに倍化してみんな可愛い子ばかり「はきだめに鶴だよ」などとおだてられて、せっせとロシア語の勉強にはげみ、年末の「語劇祭」では、チェホフやゴリーキー作の女優として大活躍。なにしろ女が少ないから出演する確率がたかいです。

大柄な那美子さんと小さな私はいつも一緒にごはんを食べ、かつ遊んでましたので人呼んで「おみきどっくり」。彼女の母上にもたくさん洋服をぬってもらいました。

十年ののち

■私のセカンドステージ■

穂佐米

＊男女同権は喫茶店のワリカンから

F M大阪の朝の番組に、「今朝の提言」というのがある。ある朝、「国連婦人の十年最終年」というテーマで、某大学の先生が話していた。

「男女同権、という主張には、僕はもっともだと思いません。けれども、レストランや喫茶店で、権利やら平等やらを主張する女性の話をさんざん聞かされた揚句、店を出る時にお金を払うのは依然として男性なんですわねえ。いわば、男性は、どんなに男女平等だとか聞かされても、男性に払わせて当然だと思ってる女性を見ると、やはり最後には自分の力や優位性を認めざるを得ない。本当に女性が平等を主張したいのなら、ワリカンにすべきです。まずそういう所から考え直さなければ本当の平等にはならないんじゃないでしょうか。」

ざっとこんな話だった。いつもこの番組は提言というわりにはつまらない意見が多くて、なかなか睡気を醒まさせてくれるようなものには出会えない。しかし、暖い寝心地を楽しんでいた私は目が醒めてしまった。もちろん、

鋭い提言に目葉さされてお目々パッチリといたさわやかな目醒めではない。何だかおかしくって、クスツとひとり笑いをした瞬間、これ以上眠れなくなってしまった。私は十年前のことを思い出した。

十年前、私は、大学の二回生だった。文学部のそのクラスは、何故か女子学生が多くて、数だけでなく、発言力も、おそらくは能力もコンパの時のお酒の量も、やさしくおとなしい男子学生を圧倒していた。コンパの二次会で、そんな女子学生の一人が言った。

「ねえ、男の子と喫茶店に行くと、どうしても男の子だけがコーヒー代を払うのかしら。」
そういえばおかしいねえ、ワリカンでいいのに。男も女もアルバイトで稼ぐお金なんてそう変わらないし。

ワイワイ議論を始めた私たちは、気がついたら、婦人問題研究会なる集まりを作っていた。時あたかも、国際婦人年の年。メキシコの世界会議で、世界の女の人たちが集まる姿を新聞でテレビで、まるでお祭りの報道のように見たものだった。エンゲルスやベーベルを読み、男女平等の基本は、女性の経済的自

立であり、仕事と家庭の両立のためには家事と保育の社会化が必要不可欠の条件である、これが私たちの「公式」になった。ボーボワールを読みあさり、「真知子」とか「伸子」とかの小説を読み、女性が自立してはじめて男女の真の愛も育つのだと胸を躍らせた。

とりわけ、ロマン・ロランの『魅せられた魂』のアンネットの生き方は強烈だった。婚約者との愛が真実でない悟った彼女は、彼の子を宿していたにもかかわらず、彼と別れ、未婚の母として生きていく。その真摯さにあこがれた。真の愛情とは何だろうか、どうして一夫一妻制なのか。同時に二人の男性を愛することはできないのだろうかなど、クラブの合宿ではよく討論もした。「みそ汁論争」なるものもあった。やっぱり、奥さんは暖いみそ汁を作って夫が帰るのを待っていて欲しい、そう主張する男の子を連れてきて討論会を開いた。

内容は忘れてしまったけれど、ビラまきもした。男女平等になれば、無理して女の子のコーヒー代を出す必要はなくなるのだから、きつと男の子も喜ぶはずと思っただけなのに、「わぁー、中ピ連みたい」と言われたのは心外だった。

コンパの時、一年上のAさんが、私はこの歌を唄います、と言って「瀬戸の花嫁」を唄いだした。みんな一緒に合唱したけれど、あの時のことは、今思い出しても、おかしくなる。

「男日照り」という言葉もあった。私たちは、こんなに一所懸命、自立して生きる道を求めているのに、それを理解し、共に歩いてくれる男性は本当にいるのだろうか。ひょっとしたら見つからないのでは、いやどこかにきつという。そんな私たちの思いを表わす合言葉だった。

真剣だった。今から思えばロマンチックな机上の空論だったのかもしれない。でも、大学の卒業生の実態をアンケート調査したことは、私たちの考えが決して単なる空論ではないことを証明してくれたし、現実の生活の難しさを垣間見たような気がした。ただ、どうして「瀬戸の花嫁」だったのだろう。何となくおかしいと思いつながら、その時はそのおかしさがわからなかった。

こうして、私が「婦人問題」に出会って、もう十年たったことになる。

「なんで男の子がコーヒー代を払うの?」これが私たちの十年前の問いかけだった。私たちが出発点にしたことを、国連婦人の十年の最終年の今ごろ、エライ大学の先生が言うてはる。そう思ったら、思わず、目が醒めてしまったのだ。

私たちは、かつて、女の子のコーヒー代を無視して払わずにすむようになれば、男の子も喜ぶだろうと思ってピラをまいたのだった。けれど、実際にはあまり喜ぶ男の子はいなかった。週刊セブンティーンには、テーブルでこっそりお金を渡して、レジでは彼に払って

もらいましようなんてマナーが書いてあったりした。

それはともかく、この某教授の提言で思うのは、最後にお金を払うことで、男性はまだまだ安心していうことだ。あるいは、もはや、コーヒー代を払うことでしか男性の優越性を示せないのかもしれない。もちろん、実際には、あっさりワリカンで平等に払っている男女はたくさんいるのに、彼がそんな女性に残念ながら出会ったことがないという不



幸な体験の持ち主だったり、何かの一例を普遍化して曲解しようとしているのではといった悪意の解釈は別にしても、である。本当に、彼女の平等の主張が理解できるのであれば、「君の言い分と態度は矛盾している。平等にするのであれば、ワリカンにしよう」と提言すればいいのに。彼は矛盾を見い出して、ホッと一安心、まだまだ男は安泰だ、とそう思いたいのだ。

ここで私がいいたいのはワリカン論議では

ない。私も、たいていワリカンにするし、時には奢ることもある。(でも奢られることはもっと好きなので、念のため。)ただ、気になるのは、男性がまだ安心していう、言いかえれば、女の人たちが色々なことを考えたり言ったりしているようではあっても、まだ男性を安心させているということだ。

★フェミニズムの第一段階は終わった

ベティ・フリーダンは一九八一年に書いた『セカンド・ステージ』の中で、フェミニズムの第一段階は終わった、これからは、第二段階だと言っている。第一段階では、女らしさの神話を破り、社会の中で男性と同等の地位につくことが、フェミニズムの課題だった。そこでは、目ざめた女性たちは、家庭や子育てを切りすて、キャリアを選んだ。男は女を抑圧する敵であり、女の実力を証明するべき競争相手であった。気がついた時、女性は、男なみに働き、男なみの基準で平等を達成し、母性を否定していた。それは、女らしさの神話を打ち砕こうと母性を切りすてた分だけ、逆に女らしさ、弱さにとらわれていたのだとフリーダンは言う。この本を日本に紹介した下村満子氏は、「第一段階は、一方的に女がわめき、男がせせら笑っていた時代だったんです。」という。男はせせら笑い、潮がひたひたと足元によせてくるのがまだ見えないでいる。婦人の十年の最終年に、エライ先生が、「平等を言うならワリカンに」という提言しかでき

ないようでは、日本の婦人問題は、まだまだ第一段階と言わざるを得ない。

それでは、私たちには、フェミニズムの第二段階、セカンドステージはまだ先の課題なのだろうか。決してそうではない。フリーダンの意見は興味深い。

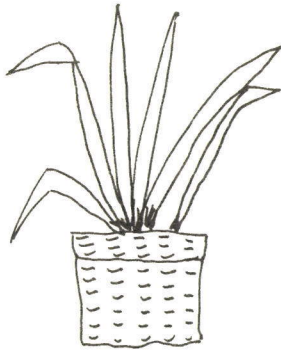
セカンド・ステージに到達する土壌として、アメリカでは、女性運動は、ポイント・オブ・ノーリターン、もう引き返すことのできない線を越えてしまったのだという。多くの女性が、家庭から出て男性と対等、あるいはそれ以上のキャリアを獲得した動きは、レーガン大統領がどんなに女性よ家庭に帰れと叫んでももう元に戻すことはできない。それはもはや、米国民のコンセンサスですと、下村満子氏は言う。

アメリカは徹底した実力社会である。その中で、平等な地位を獲得するために、渾身こめて努力してきた女性がどれほどたくさんいたことだろう。

ここで私が思い出すのは、ミセスクレイマーのこと。映画クレイマー・クレイマーでは、ダスティン・ Hoffman 演ずる父親と子どもにも多くの興味と、「同情」が注がれて、一方、私は離婚して自立しますと、さっさと出ていった妻の描き方が不十分だった。どうも類型的で添え物的印象しかない。(おかげで、演じるメリル・ストリープが大女優だということも、ちっとも知らずじまいだった。) 女性の家庭責任が強調される日本では、なおさらである。

女性の自立↓離婚の増加↓家庭の崩壊↓子どもも非行。そんな図式を、人々に納得させ、脅威を与えるには十分だったかもしれない。もちろんこの映画の与えた反響は決してそれだけにとどまらないが。

ただ、それまで女性を抑圧し、自由な自己実現を妨げてきた家庭責任を、一時的にせよ全否定したり、そこから逃げ出してしまわなければ自立できない、本当の自分の生き方を求めることはできないと感じ、行動に移して



しまった女性の気持ちもわかるのだ。

しかもアメリカは実力社会である。子育てと仕事を両立させる政策的配慮がどのように行われているか私も詳しくは知らないが、育児休暇制度もないし、産休後の復職の権利も保障されていないし、託児所を作る努力は、政府や労働団体だけでなく女性運動自身の力によっても行われていないとフリーダンは言う。そんな中で、どうやって女性が自由に子どもを産むことを「選択」できるだろうか。

中絶の権利も含めて、女性が勝ち得たと思っ
ている選択は、本物ではない。「女性運動の主
張する平等の社会というのは、女性がもう一
つのベトナム戦争で男たちと同じように弾道
弾を撃つことを本当に意味しているのだから
か」と。

私は正直言って、アメリカの女性運動には
あまり関心がなかった。「犬のように働き、レ
ディのようにふるまう」なんて願ひ下げだっ
た。けれども、フリーダンのこの本を読んで
感じたのは、その洞察の深さと率直さと、力
強さだ。女性運動は家庭崩壊をもたらしたと
いう非難を、すべて敵の宣伝だと無視してよ
いのだろうか、と問いかけ、彼女は、こう言
っている。

「私たちは、少くとも、フェミニストたちが
これまで、家庭の重要性や、愛や養育ややさ
しい思いやりなどを与えたり、受けたりする
ことを女性自身が必要としている事実を否定
してきたことを認め、率直に話しあわなけれ
ばならないのではないか。」つまり、女性運
動が目ざしてきたスパーウーマンたちの家
庭や愛や子どもを切り捨てた生き方には無
理があった。そのことを認めようというので
ある。

自立をめざして生きてきたけれど、その生
き方に疑問を持ちはじめた、平等なんかいら
ない、女として自分に自信がない、家庭に戻
りたい。そんな女性たちの葛藤を描いた『シ
ンデレラ・コンプレックス』も、愛や子ども

を切りすて、男並みに働くという到達目標の無理から来ているのだとしたら、「やはり、女性の弱さが」といった日本での解釈とは全く違った問題提起であることが理解されるであろう。

ウーマンリブの元祖、ベティ・フリーダンは、やっぱり家庭が大切だと言いはじめた。女たちよ、自立自立と自分のことばかり言わないで、家庭を大事にしなければならぬ。再び、そんな声が聞こえてきそうである。事実、「自由を得たはずのアメリカ女性は、家庭を失って幸せになっていなかった。今、日本の女性は、あるいは、アメリカのフェミニズム運動の第一期を経ずして、セカンド・ステージをねらっているのではないか。」と、日本のある女性経済学者は言う。

*人間の解放こそ真の課題

私はその意見には少し納得がいかない。第一期を達成した実績があればこそ、セカンド・ステージが次の課題になったというべきであろう。女性の社会的地位や労働分野での平等の達成という点では、日本はまだまだ第一段階である。男性中心の社会は、まだ、言うほどの脅威を受けてはいない。そのことを見ずして、セカンドステージを語れば、家庭か仕事かという古くて新しい二者択一の発想の枠内で、依然として家庭責任が女性の足をひっぱるといふ結果になるのではないか。

しかし、第一段階の達成は、日本もアメリカ

カの女性のようなやり方で進むとは少し考えられない。フリーダンのセカンドステージの内容を見ればそれがわかるだろう。

セカンドステージの課題は、単に従来通りの家庭を大切に保持するということではない。そこでは、フェミニズムと女らしさが統合され、愛と仕事とが両立される。その上で、家庭にしがみついていた人も、家庭を否定していた人も、ともにもう一度、家庭を見直し、家族との新しい関係を創造しなければならぬ。そこでは、女性問題の解決が目的なのではなく、人間の解放こそが真の課題であり、とりわけ、人間らしく生きたいと願う男性たちとの協力が重要になってくる、とフリーダンは言う。彼女は、フェミニズムが必然的な歴史の流れであるという樂觀的確信に基づいて、第二期の運動のすすめ方、発想のし方、生活のあり方などについて新たな創造的イメージを提起している。ERA批准が挫折し、レーガン政権が誕生し、中産階級の反撃、といわれる保守化の時代に、将来の展望を大胆に提起しているのは、アメリカの樂觀主義のスケールの大きさ故であろうか。とりわけ、同性愛のカップル、同棲、単親家族、コミュニティンなど、血縁にとらわれない「人生を分かちあう仲間」としての家族の新しいイメージ、家族の機能を社会的に補うための託児制度、福祉システム、住宅プランなど、提起は多様で柔軟である。住宅や託児施設、老人施設のプランについては、スウェーデンの例が

先駆的なものとしてとりあげられている点も興味深い。

今、私たちに必要なのは、男性も女性も共に働き、共に子育てをし、共に生活を楽しむことのできる社会や家庭が、どんなに明るく豊かなイメージを持つかということを示すことではないだろうか。希望の持てる将来のイメージ作りをする努力をこししばらく忘れていたように思う。

そしてまだ当分の間は、第一段階の課題の達成がさしあたっての私たちの課題である。その過程では、やむを得ず、家庭からの自由を求めたり、長い間維持してきた家庭を解体しなければならぬ現象も起きるかもしれない。しかし、新しい家を創造するため、古い安易なつながりで維持されてきたかつての建造物を解体しなければならぬ過渡的なものだとして理解しよう。スクラップ・アンド・ビルドでいくか、内部補修ですませるか、やはり方は人さまざまである。

*私自身の第二ステージ

話を私自身のことに戻そう。この十年間を振り返ると、ある意味では、私自身の第一期であったような気がする。女性の自立について語りあった当時の友人たちも、多くは結婚してしまった。それぞれに家庭と仕事との二つの課題にとりくんでいる。私たちは、結婚指向の非常に強い社会に生きてきた。その中で、私の十年の前半五年間くらいは、結婚し

たい、あるいはしなければならぬという思いこみという自分自身の思いとのたたかいたったし、そこから脱出した五年間は、何故結婚しないのという周囲の圧力に対するたたかいたったと思う。たたかいたという少し大層かもしれないが、このたたかいたは年々楽になってきていた。むしろ、結婚や家庭といったものからは自由になって、男の人と変わりに働き方をし、自由に旅行をし、映画やスキーを楽しむことができた。その気楽さや自由さの方が優っていた。家事や子育ての負担を持ちながらも、社会的に活動したり仕事をしている女性に比べて、私は、何らの果たすべき家庭責任もないという若干の後ろめたさはあっても、身軽さの方が快かった。最初のうちは腹が立った、「結婚してない人は一人前ではない」と言われることにも慣れて、少々なら、「そうですか」と笑顔で聞き流せるようにもなった。結婚しているかどうかということとは、本来個人の価値や評価とは全然関係がないのに、それにまつわる日本の社会の息苦しさからのがれて、スウェーデンの人たちの生き方に出会ったことは大きな収穫だった。

そこには、男も女も、結婚、子どもの有無にかかわらず、個人単位で、自分の生活を全うする社会制度があり、人々は、余分なしがらみや先入観なしに自由に生きていくと感じられた。

人は一人で生きることから出発する社会が私の求める社会、身軽さが私の身上、一人で

生きるということが、私のエネルギー源だった。そこでぶつかった問題は、個人と家庭の桎梏といったテーマだったと思う。私はもう一度、家族の問題を勉強しようと思って大学院へ行くことにした。

一人一人の人間がよりよく生きる道を探る、大上段に、生きることの意味をそう仮定し、私も、その道の末端を歩んでいるのだとしたら、おそらくそれは、果しなく続く一点のプロセスの連続なのだろう。私が到達点だと思った問題は、実は出発点でもあった。

早い話が、家庭の問題は、まだ我が身にふりかかるものではなかった。就職も決まらないうちに子どもを産む人には、なんでそんなハズレになることをするのだろうと思ったり、子どもの病気で休むという人には、「女同士、いろいろ都合はあるものね」と言いつつ、やっぱりこの人は責任を果たせないのかしらと思ったりもした。主婦の悩みはせいたくな悩みだと感じたこともあるし、第一、私は、あんな風にはならないわと確信していた。その限りでは、婦人問題なんて、私にはいらないでも、困っている女の人の人たちがいるんだからその人たちのために少々力を尽くすぐらいはしてもいいだろう。多分、本音で実感していたのはそんなことだった。家庭のしがらみの火の粉のふりかからないところで、自己完結して生きていたのが私の第一期である。

人間やっぱり何ことも体験ですよ。そんな垢のついた説教だけは言わないで欲しい。ど

うやら、始まったばかりの私の三十代は、家庭と仕事や研究の問題が、現実のものになりそうなのはいいである。「あんな立派なこと言うてたやないの」「実践になるとこの程度？」なんてこと言われないかしらん。事は、ワリカンの提案よりは、ちよっぴり難しそうではある。

“平等法”のゆくえや如何

—国会傍聴レポート

正路 伶子

昨年の7月17日、均等法が強行採決されるかもしれないというニュースを聞いて、急に国会傍聴に行くことになった。

ポイチェックのあと部屋に入ると、議場は右半分がガラガラ、つまり自民党席は20人中たったの3人、しかも新聞をよんだり雑談したり左の野党側はまじめに出席。傍聴席は国会はじまって以来の超満員、全国の女たちの熱いまなざしが、女のこれからの働き方をきめる法案審議にそそがれている。

参考人の日経連の喜多村氏曰く、この国には男女差別はないと思っていたが、どさくさまぎれに署名した差別撤廃条約によると差別があるそう。終身雇用の日本では、すぐに仕事をやめる女性を優遇するわけにはいかない。何といっても女は家庭が第一ですから。

自民多数の国会では反対にもかかわらず5月には通過しそう。もっと力をつけなくては

Ⅲ

わたしたちの活動レポート

人間のしるし

— その前後 —

網野和子

本箱の片隅に押しやられたまま、もう何年も手をとったことのない古ぼけた一冊の本。C・モルガン作、石川湧訳『人間のしるし』。「人間のしるし」が描いているのは、一九四二年のフランスの抵抗運動と人間変革である。この一冊の本に出会った日を境に、私の青春は鮮やかに二つに塗り分けられている。「人間のしるし」を読んだのは二十二歳の時だが、私の追憶は十五歳まで遡ってゆく。

◇

一九五四年の冬、私の高校進学を控えて、父は病死した。命日は私の誕生日の翌日。結婚七年目に生まれた私を、父は次に生まれた弟よりもかわいがったといわれるが、その私の十五歳になる日を見守って安心したかのようには翌朝早く、病院で冷たくなってしまったのである。

のこされたのは、何の資格も経済力もない母と、私、弟、妹の四人である。一体どうや

って生活していくのか、母は大へんな思いをしたであろうが、私は「進学はあきらめなくてはならないのか」と、そればかりが気がかりだった。

定時制でもいいから高校へは行きたい、と考えていたら、担任の配慮で試験を受け、大阪市の奨学生になることができた。公立高校の普通科へ入学し、授業料は半額免除の待遇をうけて昼間の高校生活を送れることになったのである。

大学へも本当は行きたかった。勉強したいこともあった。だがこれは自分からあきらめ、高校二年からは就職コースを選び、家庭科の授業を週に五時間受けた。共学なのに、二年間は女子ばかりのクラスだった。

高校三年の春、求人第一号の会社の試験を受けた。担任が「あんたは片親で不利だから何でも早くきたところから受けなさい」とすすめたのである。第一号は××生命保険会社だった。片親だったがこの会社に採用された。

その面接では恥ずかしい思いをした。試験官が数人並んでいるところへ通されて質問を受けるのだが、どんな色が好きか、ときかれて、水色です、と答えたまではよかった。その理由は、といわれて、わずれな草の花の色だからと答えて、なぜか涙がポロリと出てしまった。

しかし、××生命はそんなセンチで気の弱い高校生を合格させたのである。採用通知がきたのは夏休み前だった。



一九五八年三月三日が入社式だった。昭和にいいかえると三十三年三月三日で、三ばかり続く日付である。本社で一カ月ほど講習を受け、そのまま本社内の新契約関係の課に配属された。

生命保険会社は、外勤はもちろん、内勤も女子が圧倒的に多い。まだまだ「お嫁に行くまで」の腰かけ就職の頃である。私も大した目的もなく入社した。平日は九時から四時まで、土曜日は正午までという、当時としては恵まれた勤務時間が入っていた。初任給は八千四百円。母に半額を渡し、残りは自分の身のまわりと小遣いに使った。

社会人になるとたちまちみんながお化粧などおしゃれをはじめたが、私はその中でも最先端をいった。その年流行したのはサックドレス。それもまっ先に着て行った。服はいっも知人にオーダーして作ってもらい、とにかく

くおしゃれに凝りはじめた。目には濃いラインを入れ、マニキュアもした。ダンスを習いに行きたいとおもい、係長に「ダンスを習うから火曜と金曜は残業させないで下さい」と申し出て、あきれられたこともあった。

社内では「おしゃれに凝ってるふつうの女の子」をふるまっていた私も、四時がおわりとそうではなかった。社内の友人とのつきあいは限界を感じており、高校時代の友人と親しくつきあっていた。



その一つに二十人くらいのグループの読書会があった。メンバーは同じ高校の卒業生ばかりなので、月一回の日曜日に母校の会議室を借りて集まっていた。テキストは岩波新書が多く、小塩力の「聖書入門」、レオ・ヒューバーマンの「資本主義経済の歩み」などや憲法の学習もやった。この、大いに知的刺激を受けた集まりは六〇年安保以後もしばらく続いたとおもう。メンバーは大学生、社会人とさまざまだったし、男女もほぼ同数。時に

は合宿もやり、女子の多い保険会社では得られない人間関係が楽しかった。



就職して二年後、二十歳の時が「安保」反対の大運動が盛り上がった年だった。このころ、前記のメンバーとはちがうが、やはり同窓生である大学生とも交流があり、彼らが出かけるデモの話は熱っぽかった。私自身は加わらなかったが、御堂筋をいっぱいひろがってうねっていくデモ隊を見に行つては、何かドキドキするものがあった。あの頃のデモは、中央郵便局前で解散、というのがおきまりコースだったから、通勤の帰りにもよく立ちどまって見物した。自分も——という気にはならなかったが、そこには何か魅きつけられる力強いものがあったと思う。

もう一つ、私が二十歳前後に夢中になったものはフォークダンスだった。歌ごえ喫茶も流行していたが、健康なエネルギーを燃焼させる場所のような意味で、フォークダンスの集いがあちこちで開かれていた。日曜日であれば、午後一時から五時まである小学校の体育館でのサークルに出かけ、夜は電車に乗ってまた別の体育館へ六時から九時まで踊りにいく。平日に踊るサークルもあって、週に二、三回はそこへも出かけていく。女友達と連れ立っていくこともあったが、大てい一人で行った。踊りの好きな人はどこへでも顔を出している、その人たちがパトナーの申

し込みをしてくれる。踊りも上手、というわけで指導者のパートナーをつとめることも多くなり、とにかく楽しい汗を流した。

フォークダンスといっても各国の民踊をおどるだけでなく、当時流行のポピュラー曲にも振りつけたダンスが次々紹介されていて、曲ごとに踊り方がちがう。それをおぼえるのも楽しかったし、マスターした曲は何十曲もあった。「ダイアナ」や「第三の男」もフォークダンスで踊ったなつかしい曲である。



労音や労演も職場単位のサークルで構成された観賞団体として、活発だったことも思いつく。私ははじめ、労音のCM（クラシックミュージック）やPM（ポピュラーミュージック）の会員になっていたが二十歳を過ぎてからは労演にかわった。新劇に特別に関心があったわけではないが、誰に誘われたのでもなく、自分の考えで入会した。

するとまもなく、××生命サークルの代表ということで毎月の例会の券をとりまとめた集金して事務局へ持っていく役を引きうけることになってしまった。これがきっかけで、職場内でのつきあいは別の広がりを持ちはじめた。

あるとき「労演をみるだけのサークルではなく、合評会もやってみてはどうですか。考えてみて下さい」と言ってきた人があった。社内電話なので顔はわからないが女の人の人だった。

でも、どうすればよいかわからず、とまどっているところへ、同じ課のTさんという美しい女性からある合会に誘われた。

一体、何と誘われたのか忘れてしまったが、仕事が終わったあと近くの会場へ連れて行かれた。そこには何十人という男女が集まっていた、どの人も××生命の内勤職員だった。

「内勤職員組合をもっと民主的にしよう。我々の手にとり戻そう」というような主旨の集まりだった。それまで組合の合会にも仕方なしに参加していた私には、あまりわからない内容だった。

でも、ショックだったのは××生命にこんなにも大げいの「ものを考える人」がいるということだった。それが民主青年同盟の集まりだったのもあとで知った。

その会合の帰り、「この本をせひ読んで」と手渡されたのが、「人間のしるし」だった。そして、この日を境に、私は180度変わったといつていくくらいの衝撃をうけていた。

母親があまりにもうるさかったので、半分折れた感じで、私は好きでもないのに近所のおばさんに和裁をならいに行っていた。週に五回もおけいこの日があり、全部は行けないのでそれまでもよく休んでいた。それでもゆかたを三枚くらいとウールのふだん着を二枚くらい縫ったと思う。

そのあと襦袢の縫い方を習っていたときだった。この「人間のしるし」に出会ったのは。

その夜かぎりで、私はニセ花嫁修業の和裁をやめた。縫いかけの襦袢には待ち針がついていたが、それを放ったらかして「新しい道」に進むことにした。母が何とぐちをこぼしたか、縫いかけの襦袢の後始末をどうしたかはおぼえていない。

それは二十二歳の九月のことだった。



組合の支部委員補欠選挙に立候補して当選。関西労働学校に入学。労演の合評会を組織し意識的に会員をふやすようになったこと。民主青年同盟に加盟。これらの大転換がすべて九月中のことだった。労働学校は夜の部で、週に二回の授業を半年受けて卒業である。ここで黒田了一氏にも憲法の授業を受けたと記憶している。

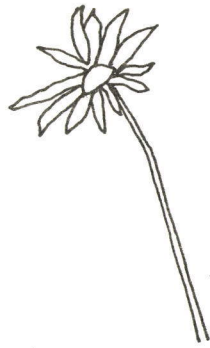
半年後の一九六三年三月に決意をして入党した。入党に際しては二人の推せん人が必要であるが、そのうちの一人は「労演の合評会をしませんか」と電話をしてきた人だとわかった。意識的にマークされて接近され、私もそれに応えたわけだが、後でそのように聞かされても不愉快ではなく、むしろ晴れがましい気分でもあった。

この頃の共産党は一つの単位を「細胞」と呼んでいて、××生命にも細胞があり、その上の組織は「地区」で、地区委員会からいろいろ指導をうける仕組みになっていた。また細胞はいくつかの班で構成されていて、××

生命の場合、仕事上の関わりの深い部課にいる党员が一つの班をつくっていた。

××生命は資本主義社会の中核である金融機関であり、その中で活動ということでは、非公然活動だった。各党员はペンネームを用い、戦前の非合法時代の一端を思わせるようなきびしい活動形態だった。

大阪から国鉄に乗って十分ほどの駅を降り、さらに歩いて十分のところに一軒のアジトを借りていて、各班が交代でそこを会議に使用



していた。みんな活発でまるでハイキングの打ち合せのような明るさの半面、外部との接触には異様に気を使わねばならず、何かチグハグで、あまりなじめなかったのを思い出す。党の機関紙『アカハタ』を読むのも一つの闘いである。当時は梅田新道の西寄りに極東書店（今の清風堂）があり、そこへ一人ずつが毎日自分の『アカハタ』を受けとりに行くことになっていた。尾行されているかもしれないということ、日によってコースを変え

たりして店に入り、自分の番号をいう。すると店の人がスッと『アカハタ』を渡してくれるのだった。

細胞内の連絡に街頭連絡を使うことも多かった。「阪神の駅の〇〇のところで六時半」というと、そこですれ違うのである。お互いに口をきかず、紙片だけ受けとるというやり方で。

党员としての活動はこのように非公然活動だったが、組合やサークルなど、大衆組織での活動は活発にやった。例えば組合の委員などはなり手が少ないから、ちょっと発言をすると注目され、すぐに選ばれた。私のように引っこみ思案の者がどうして発言までする積極性ができたのか、組合の支部の集まりでも発言するようになっていた。

賃上げやボーナス闘争では「給料という言葉は上から給わる——という意味なので、労働に対する正当な支払い——は当然のことだから、賃金というべきである」というような発言をするのである。そして一般的にいわれていた「給料日」とか「月給」という言葉も意識的に使わなかった。

これらはすべて、細胞で「そのように発言をして、組合員の意識を高めよう」と指導されていたので、黙ってはいられなかったのである。するとたちまち中央委員に選ばれて、本社にいる組合員だったから、常任中央委員になってしまった。こうして、三年か四年は組合にも委員として関わった。



この頃の職場内の闘いでは、婦人の権利を守るためのものもいくつか体験した。

母性保護のための生理休暇は、ある時期、一部の人を除いて女子のほぼ全員が取得したことで、成功したといえる一つの闘いだったと思う。会社では年に二十日間保障している有給休暇を、定例休暇と言っており、それは略して「定休」とよんでいた。定休と生休は電話できくときややこしかった。私は年功序列で班長をしていたが、休みの届けはその朝になって私あてに電話で伝えてくる人も多かった。

「今日はセイクウです。生きる方です」とききちがえのないように言ってくる班員もいた。しかしこの生休闘争も、ほんの数カ月間、一般の組合員と共に盛り上がったが、会社側のしめつけがきびしくなると、また、たちまち以前のように、生休をとるのは一部の活動家のみになってしまった。

婦人部でもう一つ印象的な闘争は「事務服改悪反対」の運動だった。それまで、女子の事務服は冬は紺サージの上っぱり、夏は水色で半袖の同じく上っぱりだった。ロッカールームで全員着がえて仕事につく。

ところが会社から組合に対し「女子の事務服を従来ものから、スーツスタイルにデザインを変えたい」と申し入れがあった。

従来事務服なら、お腹が大きくなろうと

少し年をとろうと、着る人の体型や年齢を選ばない。ところが会社が提案してきたデザインはウェストをしばったもので、明らかに若むきであり、妊婦には着られないものだった。

このことは、一九六四年、六五年ころから「結婚しても××生命で働きつづける」女性が現われはじめたことへの、会社の警戒態勢だったのである。

「事務服についてどう思うか。どんな事務服がよいのか」等について、各職場で婦人部を中心に討議を重ねたが、「スーツスタイルには反対」と発言するのは我々、民青や党員とそれに近い人ばかりで、一般の人はだまっていた。「カッコいい服の方がいい」と思っているも発言しにくい雰囲気、我々の方が作っていたとおもう。若い女性が圧倒的に多い職場で「妊婦のことも考えて」とか「結婚しても働きつづけるために——」と言ってもあまり通じず、それよりスーツ感覚の事務服がいいと思っているのは、その表情にあらわれていた。

黙って会社のいいなりに受け入れるよりはよかったかもしれないが、思い返すと頭でっかちだったと思う。一部デザインを修正してまもなく事務服も、スマートなものに変わった。

◇ ××生命の本社内で働くH氏とK子さんが結婚することになった。この二人、所属の課

はちがうが、活動を通じて知り合い、今後活動も続けていくことを誓って結ばれることになったのである。

結婚式は「人前」とか「友前」とも称された会費制結婚式で、私たちの職場の第一号だった。結婚式に出席するというのがそもそもはじめてだったので、従来の「〇〇家」と「△△家」が……というようなのでどうちがうのか、比べることはできなかったが、いかにも手づくりの結婚式という感じはよかった。式場も公民館のようなところで、料理は仲間のつくったサンドイッチ。祝福の言葉やコーラスに上気していた主役の二人は、晴ればれと美しく見えた。

このあと、続々とという少し大げさかも知れないが、活動の仲間で結ばれたカップルが誕生し、いずれも会費制で同様の趣向の式と披露宴だった。

◇ 大阪労演の会員として、はじめて例会に参加し、観劇したのは関西芸術座の「はたらき蜂」である。一九六一年の七月例会だった。（この月から会費は二六〇円に値上げされている。）

郵便局が舞台の喜劇で、セリフは大阪弁、とても親しみやすかったのと、舞台にさっそうと赤い自転車が登場してびっくりしたものであった。まだほとんど劇らしい劇もみることがなかったので、本物の自転車が舞台に出て

きただけで驚いたのだろう。

その次の月がぶどうの会の「夕鶴」。この時の「夕鶴」は初演以来大阪で四回目の公演だったと思う。

続いて、山代巴の「荷車の歌」（文化座）石川淳の「おまへの敵はおまへだ」（俳優座）。久保菜の「火山灰地」（民芸）は、第一部と第二部に分かれ、二カ月つづけての例会だった。芝居の楽しさにひき入れられて行った私は前述したように、××生命サークルの代表者として、職場内での労演の世話役になっていた。

労演は大阪が全国ではじめて作った組織であり、正式には「勤労者演劇協会」という。労演はその後、全国的にひろがり、「全国労演」もできたが、発祥の大阪の組織が一番大きく、全国でもリーダー的な存在だったと思う。演劇人口は東京の方が多いが、劇団が多くあり、個人で観賞するにもさして不便ではない、というのが組織としての労演の発展を遅らせていたらしい。労演は、職場又は学校、地域などで三人以上のサークルを作り、申し込むという形になっていた。サークルの代表者というのは、所属の会員に希望日をきいてまわり、それをまとめて労演の事務局へ申し込む。そのあと事務局へ券とパンフレットをとり行ってそれを会員に配る——というのが最低しなければならない仕事である。

××生命サークルの代表者になったばかりの時は私も三十名ほどの会員のためにその最

低の義務を果たしていたにすぎない。会社の方もまだあまりきびしくなくて、地下の職員通用口のところに掲示板にはポスターを貼ることができ、そのポスターの下に「申し込みは〇〇まで」と書き加えておく。三十名ばかりの会員といっても部課がちがうので、例会希望日申込用紙は、社内メールに便乗して発送することも自由にできていた。

次の段階で合評会をはじめることにした。民青の仲間が中心になっている自主サークルとして、すでに「コーラス」と「読書サークル」が発足していた。ポスターやチラシで社員によびかけ、会場は社内の食堂や会議室を借りるのである。わが労演サークルも合評会をやるには、会社の厚生課の窓口を通じて、そういう手続きが必要だった。この頃はほとんど障害なく会社の会議室を借りられた。



労演のことを思い出すために、今も大切に残している例会のパンフレットを広げているとその中から一枚のガリ版刷りのニュースが出てきた。わら半紙一枚のウラオモテ二ページ建ての小さな新聞、「労演会報——××生命労演サークル発行」となっている。

合評会をスタートさせると同時にサークル紙も発行し、会員をふやすこと、合評会への参加をよびかけてきたことがわかる。

合評会をはじめたのは一九六二年秋。サークルの仲間にKさん、Sさん、Aさん達がい

て、仕事のあとは、ほとんど毎日のように堂島の「ムジカ」に集まり、四時間も五時間もおしゃべりしていたものである。

一九六三年九月の例会は関西芸術座の「米どころの報告」（宇津木秀甫作）だった。例会の前にわがサークルでは、宇津木氏の自宅で合宿けいこをしている関芸の人たちを訪ね、そのとき劇団の人たちに接して得た感激や劇の見どころを「労演会報・第10号」にのせている。

そして「米どころの報告」をみたあと、関芸の人たちとの合同ハイキングを行った。劇団からは出演した俳優さんたちが十数名参加されたし、労演事務局からも参加があつて、総勢六十名以上の団体になった。当日は近鉄上本町駅に集合して奈良公園へ。お弁当をひろげたあとは車座になり、劇団の人を囲んでの合評会。私は責任感から、ハンドマイク片手に大活躍したのを思い出す。とにかく必死に司会やら何やらやって、大成功。

この行事をきっかけに、地元の専門劇団「関芸」との交流はその後も続くことになった。一九六三年、六四年というのは、大阪労演としても、もっとも会員数がふえた時だし、××生命サークルも、二百四十名をこす大ぜいの会員がいた頃である。

花の一九六四年——一年間の労演例会をふりかえってみる。

一月 大橋喜一作「消えた人」（劇団民芸）
二月 ボーマルシェ作「フィガロの結婚」

（俳優座）

三月 堀田善衛原作「海鳴りの底から」（劇団三期会）

四月 アルブローゾ作「父と子」（劇団民芸）

五月 福田善之作「オッペケベ」（新人会）
六月 島崎藤村原作「夜明け前・第一部」（劇団民芸）

七月 シェークスピア生誕400年記念
「ハムレット」（俳優座）

八月 T・ウィリアムズ作「欲望という名の電車」（文学座）

九月 山崎正和作「世阿弥」（俳優座）

十月 木下順二作「冬の時代」（劇団民芸）
十一月 老舍作「北京の茶館」（関西芸術座）

十二月 鶴屋南北作「東海道四谷怪談」（俳優座）

こうして、例会の演目名を書いているだけで、心をうばわれた舞台の数々が目に浮かぶ。

またこの一九六四年は、私が労演の幹事として、運営機関の一員に加わった年でもある。××生命サークルでの活動が評価されて、事務局から推せんされたのだろう。幹事会のメンバーは、約四十人。その中から常任幹事（執行部）が選ばれ、常任幹事の中から二名が代表幹事として、労演全体に責任をもつ人だった。幹事はすべて各サークルの代表者の中から選ばれている人である。事務局にいるのは専従の事務局員で、女性の事務局長の他男女

六人の人が常駐し、活気あふれていた時代である。

一年後に私は常任幹事になり、さらに後には調査部の部長も引きうけて、思い出ししてみるとよく働いたものであった。労演の会議は、もちろんいつも夜。調査部は十人足らずのメンバーだったが、いずれも私より年上の男性ばかりなのに、部長であるために会の進行もやっつて、こわいものなしに張りきっていたのだらう。



二十年前の一九六四年は、文化運動も、職場内のさまざまな活動も、最高に盛り上がった時期ではなかっただろうか、大阪労演では会員が二万名をこえた月が五回もあった。俳優座の『仲代ハムレット』が最高記録だと思ふ。

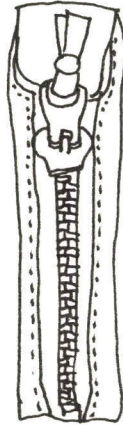
六五年に入ると、急速にかけりが見えはじめる。

××生命でも自主サークルの活動に対し、会社はいろいろな制約を持ち出し、活動を大幅に制限しはじめた。今まで自由だったポスターの掲示や、会議室の使用に対し文句をいわれるようになった。労演サークルの場合、合評会には劇団の俳優さんをよぶことも多かった。すると「外部の人に入ってもらっては困る」というように言い出したのである。自主サークルに口出しする一方で、会社もサークルを作りはじめた。それまでも、会

社がおぜん立てしたクラブ活動はいろいろあった。スポーツの活クラブ、お茶、お花などのクラブである。それは会社が補助をしているクラブ活動であった。

自主サークルの方は、メンバーは社員で構成するが、運営は全く自由なサークルで、その一つとして労演サークルも誕生したのだった。

一九六五年ころになって、会社が新たに作ったのは、この自主サークルと、民青の活動



をミックスしたような内容の、部課単位のものである。私が所属していた契約部（保険の新契約関係の仕事をする）がこの会社の方針にもっとも忠実で社内でも「先進的な役割」をしていた。契約部だから「契友会」と名づけ、会長は契約部長で、以下、課長や係長が率先して会の運営をするのである。

契友会の会員は、契約部の社員全員というのがたてまえのようだったが、実際は何をやったか。「反民青」のキャンペーン的なことを

やったのである。休日にハイキングを計画し、いい年をした部長が息子の赤いセーターを着て参加し、若い女子社員と肩をくんでカメラにポーズをする。ハイキング先ではゲームをしたり、歌をうたったり。民青の仲間がやっているのと、ほとんどかわらない催しをして、「会社がやることもこんなに楽しいんだ」というイメージをうえつける。

その会に参加すると、部長や課長にかわいがられるので、組合活動をしたり、会社がいやがるサークルに出入りしようと思わなくなる。

しだいに私たちは、孤立させられ、職場の人たちとの間を切りはなされてしまった。と同時に、課長や係長が仕事中でも絶えず私たちを見張るようになった。私の所属していた課はその時で百人に近い大所帯。私の他に二人の仲間がいた。一人は私をはじめ「云合」に誘ってくれたTさんであり、もう一人は四つ年下のMさん——とくに組合の婦人部で活躍していた後輩である。

社外、社内を問わず私に私用の電話が多かったのも、まっ先に攻撃された。私が電話で話していると課長がとんできて「おい、その電話やめ」とどなられたことも何度かある。会社がとくに私に警戒したのは「ソフトで人あたりがよく、活動家タイプでないの、それだけ一般の人への影響が大きい」ということだったらしい。

「課長がうるさいので話はできないが、ほ

んとはあなたたちの方が正しいとおもっている」と、そっと伝えてくれる人も中にはいた。

ある時は会社の帰りに、中之島から梅田までの十五分、たまたまロッカーでいっしょになった同じ課の人としゃべりながら帰ったことがある。次の日、私といっしょに帰った人は課長によびつけられ「何を話したか」としつこくきかれた上、「二度と口をきくな」と厳命されたことも知った。

そうなる、気の弱い人は私たちと視線が合うことも恐れて避けるようになる。

昼食時は社員食堂で思い思いのグループが、おしゃべりする楽しい時間でもあるのだが、私はTさんやMさんと三人だけで食事をするしかなくなり、それ以外の人は誰も寄りつかなくなってしまう。

私の家はこの頃、母も弟も妹も働きに出ていて、昼間はすだつたが、そのるす中の屋間にどろぼうが入った。タンスの中、私の机の中などが荒らされていたのとられたものはなかった。そんなことが続いて二回あった。この件は会社が私のことを調べるつもりでやったのだろうと、党の人たちにいわれて驚くと同時に背すじが冷たくなった。



このような暗い状況になる前に、職場の中で盛り上がった催しの一つに「ひとりっ子上演運動」がある。パンフレットを調べると、大阪実行委員会の主催で、大手前会館を会場

にこの劇が上演されたのは一九六三年の十二月四日と五日になっている。

関芸の「米どころの報告」をみて、六十人でハイキングに行き、劇団とのつながりが深まったことは前に書いた。この頃、関芸は「ひとりっ子」の上演にもとりくんでいたのである。

古い記憶をよびますと「ひとりっ子」はもともとテレビドラマとして作られたものだった。ところがこのドラマは放映直前になって、なぜか中止されてしまった。ドラマの内容は、ひとりっ子の高校生の自衛隊入隊をめぐる話である。

理由のはっきりしない中止に怒って、まず動きはじめたのが民放労連だった。この件で私も毎日テレビの人と何度か会ったのをおぼえている。

テレビで実現しなかったドラマを舞台で、ということに「ひとりっ子上演実行委員会」ということで、大阪での上演を成功させ、六四年の一、二月には全国でも巡演された。私たちのサークルもこの実行委員会に加わり、労働会員以外の人たちにもよびかけて、二百枚近い券を売ったと思う。

「ひとりっ子」は関芸の人たちで演じられたのだが、劇団でも力を入れて上演のためにとりくみを展開していた。劇団の人たちが券を売るために各職場をまわっていたが、ハイキングなどですっかり「有名」になっていた。××生命の私のところへは、何人もの劇団員

が入れかわり立ちかわり面会に現われ、閉口して劇団に苦情を言ったほどだった。まだ当時は、外部からの私用の面会にも会社はとくに文句もいかなかった。地下にある喫茶室で、その都度、二十分、三十分と応対していたのだが、回数が多くなると周囲に気がつかった。

××生命の職場内で、労演の会員をふやし、合評会を開いて考えたことを話しあう、という活動は、芝居の魅力にとりつかれた人たちといっしょにいるので楽しかったし、自分でもよくやれたと思う。

ところが、会社のアカ攻撃がつよまってくると、職場の雰囲気は暗くなり、信念は曲げなかったものの、何ほどの力もない自分を知り知る。本社の中はいくつもの部課に分かれていて、会社は「アカ」というメンバーの比率も片よっていた。私のいた契約部は、社員数に比べると私たちの数は極く少なかった上に、管理職からの攻撃はいちばん巧妙でかつ露骨だったのではないかと思う。

共産党の機関紙「赤旗」も、本屋へ受けとりに行くのはやめて、職場内配布に変わっていた。これがまた大へんな聞いたことも記しておきたい。

××生命の党は細胞としては一つの組織だったが、便宜上、いくつもの班に分かれており契約部にも一つの班があった。班の中で役割分担があり、機関紙係が「赤旗」を毎日、配布するのだが、これがどんなに困難だった

ことか。

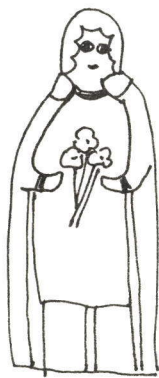
私たちの班の機関紙係はH君という独身の若い青年で、うたごえ運動を熱心にやっていた一人である。H君は阪急沿線の独身寮から梅田経由で通勤していた。そのH君は毎日、『赤旗』をとりて梅田から環状線に乗って玉造へ行き、そこから歩いて六、七分の党本部まで行って『赤旗』を受けとると再び環状線で大阪へ出て、中之島まで歩く、というコースで出社し、私たちに『赤旗』を届けてくれた。それも社内で、課長が監視している中でやりとりするのは、一日ずつがまさに闘いだった。大ていは紙封筒に入れての受け渡しだったが、仕事では直接関係ないので、席に近づくことは不自然だし、廊下や階段ですれ違ふようにして受けとるのだった。これほどの苦勞をして届けられる党の機関紙。「新聞を読む」ということが一つの闘いだった頃のきびしさが今はなつかしい。現在はこれほど苦勞しなくていいし、『赤旗』は居住地の黨員によって、各戸に届けられるようになつてしまっている。

一方、契友会の力はますます大きくなり、私の課の係長と、私と同年の女性の結婚は契友会がとりもつ縁だったという。そして結婚

式も、私たちの仲間が会費制でやったのと全く同じように、会社のおぜん立てでやられたということだった。



一九六六年の秋。私にも突然の転勤命令が出た。京阪沿線の寝屋川にある月掛支社へ行けということである。本社に八年以上も勤務していた女子が、支社へ転勤させられるというのはまだ前例がなかった。



だが、これを拒否することは、退職することである。私はくやし涙と共にその辞令を受けとった。辞令を渡したのは、もっとも私に露骨な攻撃をしたM課長である。

「支社に出るとそろばんがいるから家にあるのを持っていくように」といわれたので、「会社の仕事をするのにどうして家のそろばんを持って行かないといけないんですか」と切りかえた。

すると課長は封とうに入れたものを差出し

「せんべつや、これでそろばん買ってくれ」と渡された。

課の親睦会からもおせんべつはもらったが、送別会のようなものはなかった。私たちはみな、会社の方針で、追われるように転勤させられたのである。

久しぶりに本棚から『人間のしるし』をとり出してみる。

本のオビには「愛は闘いのなかに」と大きく書かれ、「この小説ほど、みずからの手のみずからを解放する人間的行動の偉大さを、はっきり教えているものはない——」とアピールがつづいている。

『人間のしるし』に描かれている精神的な深さには程遠いが私自身のささやかな青春の記念碑ともいべき活動の思い出は、今も鮮やかである。

あれから二十年。心情的には左翼支持だが、具体的にはほとんど行動をおこしていないなまけ者になってしまっている。

あの輝かしい日々——少なくとも私の半生の中では——は、一体どういう意味をもっていったのか。最近になって、かえって生き方に迷い、試行錯誤をくりかえしている。

もうすぐ迎える四十五歳の誕生日。また何かひたむきな目標をもって、後半生を賭けてみたいと思ひながら、探り出せずに焦立つ思ひの日々を過ごしている。

差別して何が悪い!?

大西陸子

(一) 研究室内の極端な女性差別

私は、京都大学文学部西洋史学科の大学院博士課程を修了してから、今年で六年目になる「オーバー・ドクター」(＝博士課程を終了しても職の得られない無給の研究員)です。ところが、研究室全体の就職状況は非常によく、同級生は博士課程の二年目か三年目を修了した時点で、それぞれ大学の教壇に立ち、今春は私よりも六学年も下の後輩までが就職して行きました。現在研究室には、留学中及び発令待ちの人を除いては、「オーバー・ドクター」は一人もおられません。数学年上の女性の先輩も、女子大や短大の増設時で人手不足の時期であったにもかかわらず、やはり長期間の浪人生活で苦労されました。要するに、就職率のきわめて高い学科で、女性だけが就職に異常に苦労している訳ですが、その原因は受入れ側の大学にあるのではなくて、こちらの研究室(＝主任教授)の側にあるので、困ったことです。

では公募の書類さえろくに公開されず、私たちにはどの大学で教官を募集しているのかさえも、全く分らない状況なのです。今までの五年間は、私が就職の問題に触れる度に、指導教授の越智武臣教授からは、「女の人の就職はなかなか難しくて……」というような返事が返ってくるばかりで、もう一年もう一年と研修員の身分を延長して、今日に到ってしまいました。しかし、あまりにおかしいと思ひ、この三月に就職問題についてゆっくり訊いてみますと、「男はそれ(学問)で身を立てるものだが、女性の場合は必ずしもそうではない。また、大学院入学時及び博士課程進学时に、就職の世話をすると約束した覚えはない」との返事で驚きました。また、

大学や学界は「女性が実力でおし渡れる世界などではない」とのことです。女性が学問をすること自体には賛成だが、それで身を立せていく(＝研究職のポストにつく)ことには、必ずしも賛成ではない、ということのようです。

(二) 「就職の世話はただではできない」

——就職詐欺事件——
更に、もっと奇妙な事件があります。昭和

五六年度には神戸女子大、昭和五八年度には大阪樟蔭女子大から就職の話があり、どちらもカリキュラムの相談にまで話が進みながら、不思議な形で立ち消えになってしまったのです。

今春発令予定だった樟蔭女子大の場合、話はきわめてはっきりしております。昨年六月にJという人物(愛知女子短期大学副学長。樟蔭女子大や神戸女子大等にも関与する、いわゆる「スクール・メーカー」)を介して、「越智先生からの紹介で知ったが、樟蔭女子大で西洋史の先生がほしいので(後期からでも)来てほしい」との連絡があり、私もOKしました。すると七月に、「一応内定したので、正式の手続きをするための事務手続きが必要」と言われ、十万円支払いました。ところがその後、更に多額の要求があり、それ以上は応じないでおりますと、理事長との面接の日の相談のところまで進んだ時点で、話が急に途切れ、今日まで発令されないうままです。

越智教授は、勿論以前からJ氏とは知り合いたのことですが、三月一八日に、私がこの件はどうなっているのかと伺いますと、「J先生のことは悪く思わないように。他人の子供の就職の世話の様に面倒なことは、なかなかただではできないから」との返事。また、J氏は以前、やはり西洋史学科の藤縄謙三教授の同僚でもあった人物です。これでは、自分の研究室の二人の教授の知人に「就職詐欺」

にあったことになりませんが、私の他にも同様の被害があったと聞きます。

(三) 文学部当局の対応

この女性差別と就職詐欺事件を、沢田敏男総長に訴えましたところ、文学部長にさし戻すという返事をもらいました。それで、ようやく六月一日に、服部正明文学部長と本田實信教授(評議員)に面会したところ、次のような見解を提示されました。

1. 西洋史研究室で女性差別があったかどうかは、他の研究室のことだから分らない。
2. 「J事件」に関しては、調査してみなければ真相は不明だが、調査する義務はない。
3. 現在、社会一般に女性差別は現に存在し、自分たちも男である以上、大なり小なり、差別意識は持っている。
4. 指導教授には、教え子の就職の世話をする義務はない。就職の世話は、教授が好意ですることであるから、世話をしないからといって文句を言うのは、筋違いである。(従って、教授が男子卒業生の世話だけをし、女子卒業生の世話をしないからといって、違法でも何でもない。)
5. 学問とは、本来それによって生計を立てていくべきものではない。……自分は、京大教授の職を離れても研究を続けて行く覚悟はある。神聖な学問の場に、就職

とか女性差別といった、俗な問題を持ち込むな。(「マスコミ、一般世論、文部省に対して訴えたい」と。)

(四) 研究室側の対応

この事件が九月下旬に学友会(≡文学部自治会)の手によって表面化すると、教授及び研究室側の拒絶反応はすさまじく、開催予定の自治委員会は、乱入して来た西洋史学科の院生や卒業生——越智教授の「弟子」で、すでに他大学の助教になっている人物まで加わっている始末——によってつぶされるという事態。教授が自分の気に入った学生を大学院に残すという傾向が根強い文学部といても、この研究室がこれ程強い団結を見せたことは、いまだかつてありません。彼らを結束させた動機は何かというと、「この様な『不祥事』が表沙汰になって、教授と研究室の名誉が傷つけられると、自分たちの将来までがダメになる」という危機感なのです。彼らにとっては、真実は何かなどということは、問題ではない訳です。「研究室」という名の、この利害共同体の異様な本質を、まざまざと見せつけた一事件でしたが、このヒステリックな反応こそ、逆に、そうまでして隠蔽しなければならぬ事実があったことの証明になるのではないのでしょうか。

それ以後、学友会は越智教授や研究室側と何度か話し合いを試みましたが、越智教授は「当人に会う必要は全くない」と主張して、

応じようとしません。また、助手や院生が、「内部告発しようとした時点で(当人と)研究室との関係は切れている」と言っているとか。要するに、「反逆者」を研究室と学界から完全に締め出そうという態度です。

研究室も研究室ですが、この件を四月から知りながら、そ知らぬ顔をしている沢田総長の管理責任者としての無責任さも、文学部長以下のアナクロニズムも、一般の常識からしても異常なものではないでしょうか。世間では、「男女雇用平等法案」が通ろうという時代に、国民の税金でまかなわれている国立の京都大学では、いまだアナクロニズムの見本の様な人たちが学部長や教授の公職について、様々な被害を私たち一般国民に与えております。民主主義を愛し、差別と闘うすべての方に、この場を借りて呼びかける次第です。(昭和五八年一一月記)

△抗議ハガキ送付のお願い▽

この件に関しまして、一通でも多くの抗議書を左記の四カ所に御送付下さいませ。お願い申し上げます。書式は、葉書・封書・電報その他、何でも結構ですし、また差出人は、団体・個人・ペンネーム・匿名の別を問いません。この問題が何らかの形で決着を見るまで、波状攻撃になるようにしたいと思いますので、一定間隔でお願い致します。

一 沢田敏男(京都大学総長)

京都市西京区大原野上里男鹿町五十七

二 服部正明（京大文学部長）

京都市左京区鹿ヶ谷桜谷町四〇一六

三 越智武臣（京大文学部西洋史学科教授）

京都市北区小山下内河原町一九一

四 京都大学文学部西洋史学科

京都市左京区吉田本町 京都大学内

以上についてのお問い合わせは

「京大西洋史学科女性差別を考える会」

京都市左京区浄土寺馬場町二六 末吉方

フィリピンの政治犯に激励とカンパを！

稲垣紀代さんのクラスメートで、投獄されて3年近くになるマニー・グスマンさんからアピール。

フィリピンでは不平等な体制が非常に顕著です。土地は一部の人に所有され、企業はエリートや日米の投資家に握られています。豊かな資源にもかかわらず、多くの小作農や労働者は貧困にあえいでいます。

72年の戒厳令、そして憲法の改訂で大統領が権力を一手に握り、労働運動家、ジャーナリスト、コミュニティワーカー、教師、学生等が政治犯として幽閉されています。人々のくらしを少しでも良くしたいと願ったばかりに私たちの苦しみと闘いを多くの人に知らせて下さい。

問い合わせ 京都市左京区吉田下大路45鈴木マサホ方 京都フィリピン研究会

☎〇七五―七六一―一七一一

「私には父が居ません。母は父のことを話してくれませんが。就職にも不利……将来結婚にも……いろ／＼考えると先行どうせ私の人生ナンテと思ったから……」、事情はよくわからないのだが、何かのショックを受けたのか。家出したらしい女の子の声がラジオから聞こえてきた。何ということかを、甘えなさんなど言いたくなった。

今の世の中、なろうと思えばどんな職業にもつけるチャンスは一杯。結婚でも法律でしぼられることも無い筈です。40年前の世の中はこうではなかったんです。貴女には想像さえも出来ない時代でした。私は丁度適令期、すゝめられるまゝ結婚の約束をしました。相手は軍人。その当時、軍人と結婚する場合、上司の許可が必要だったのです。そんなアホナーと思うかも知れませんが事実でした。私の相手も当然許可願を出しました。調査の結果、思いもよらず「不許可」の通知が来たのです。何故!! どうして!! 武士道華かなりしころはお殿様の御意志如何でどうにでもされたことでしょうか……今でもその時のショックは昨日のように思い出せますが理由が判明した時、もう一つのショックがありました。私は当然長女とばかり思い込み、実父母であることをうたがっては居なかったのです。それが違っていたことです。戸籍には私の知らない人の名前が母として、書いてありました。「長女」ではなく「庶子」という字が目にとびこんで来ました。そして、結婚不許可の原

戸籍 田畑鞠子

因はその「庶子」という文字にあったのです。何故そうなっているのか母も教えてくれず、父は当時戦地に居たのでたゞすことも出来ませんでした。

当時のショックは、今後誰も好きになるまい、結婚へと話がすゝんで又嫌な思いをしたくないからと心の中で思ったことでした。その後この「庶子」の疑問も解けましたが、父へのいかり生母へのうらみが無かったとは云えません。

此の頃になってふり返って考えると何というヒドイ時代だったのだろう、個人の結婚にまで自由がなかったとは……。後で聞いた話ではこうした場合誰かの戸籍へ一度養子縁組をしてすませるという方法もあったとか。これも又おかしい話ですけれど……。

戦後、父の戸籍から分離した私の戸籍には五十年間も私を育て、くれた義母の名前はありません。そして庶子の字は「子」に変わっただけです。関係者は全部他界した今、誰もせめることは出来ません。そんなこと、どうでもいいこと、現代は四十年前のように束縛されることもなく、職業も結婚も自分の意志で選べる時代。貴女の知らない時代にはこんなヒドイ話があり、苦しんだ人が居ること、貴女も知ったら、少しは心が和むのでは……。

「不投函の手紙」より





国際婦人年北区の会

10年

3万のパンフと
10のサークルと
2000人をこきざす人たち

正路 怜子

国際婦人年北区の会は昨年12月のさよならパーティで10年間の講座をしめくり、次なる方向をさぐっているところです。毎年百円のまとめパンフを作ったのですが、講座の中味についてはいま在庫があるのはNo.7と10までだけ。10年ひとむかしといえますから、せめて簡単な記録でも残しておこうと筆をとりました。

何を話しあったのか、何が見えてきたのか、誰と出会ったのか、ごく私的で偏見にみちたレポートであることを初めにおことわりしておきます。

*参加者一人一人の10年史

“あのとき24歳でした。大学を出て図書館につとめ始めて2年目、話しあいがとても具体的でおもしろかったので、この10年間ずっと出席し、この2と3年はミニパンフの編集長もやっています”という神谷伸子さんは、大阪女性史研究会のメンバー。いつもするど

い発言をして、みんなをアツといわせます。職安の窓口でくさっていました。こんな仕事で一生をおえるなんてと。でも「働く婦人の悩み11番」の電話相談員になったとき、あちこちの主婦やパートの人がかくも熱心に仕事を探し、労働条件の不当さを訴えるのに、あらためて心をうたれました。

私が毎日やっている仕事はこんなにも期待されておられ、また労働基準法よりも少しでもましな労働条件を定着させる機関としても大切なですね”と講座の中で仕事の見直しをしたのは森良子さん。子どもが小さいとき、組合分裂をからめてのいやがらせの配転攻撃があり、朝5時すぎに家を出てがんばったという体験談が印象的でした。いまは、講座で知りあった八木さんとドイツ語の勉強にうちこみ、れふあむ17号で現代ドイツ女性の結婚のかわりようを翻訳してくれました。

“職場で初めてのミセスとして、残業するときは近くの保育所まで子どもを迎えにいっ

て机のまわりで遊ばせました”という船井喜美代さんは損保会社に勤続35年、その生活感のある発言で若い参加者をいつも励ましてきました。“なかなか昇格できないのが腹立たしい。別に役職になりたいたいではなく、賃金体系が職務職能給なので、昇格しないと賃金があがらないのです。いまのシステムだと、大卒男性の初任給なみになるのに、高卒女性には36年もかかるのですよ。何とか昇給、昇格を男女平等に保障する“平等法”はつくれないものかしら。まだまだこの問題を考えている女性には少ないし、はやく多数派になること、労使の力関係をかえ、政治をかえなくては、と北区母親連絡会の会長らしく、大きな視野で物のみかたをアドバイスしてくれます。

彼女は本当にくそがつくほどまじめな人で骨身を惜しまず働きかつ活動しており、いつも頭が下がります。

“2年目からの参加です。この会がきっかけになって「男女差別賃金をなくす大阪連絡会」ができ、その研究会の中から「商社の女性は今」というパンフレットをつくりました。華やかな商社マンのかげで、男は世界をかげぐるが、女は内勤で現地採用で非営利部門だから、給料は男性の半分で当然というひどい男女差別の実態を世に問いました。

84年夏の国会で、均等法審議のときに働く女性の実態レポートとして取り上げられていたから、少しはお役に立てたかとよろこんでいます。この講座は、いつも刺激的で視野が

ひろがるので、すべてに最優先して出席しました。でも、どれだけたくさんの人たちに影響を与えたかとなると、もう一つ自信がありません。どうしたら、男女平等についての本当の理解をみんなにわかってもらえるのかしら”と語るのには、商社に働く三浦美也子さん。

＊誕生は革新大阪府政づくりの中で
そう、あれは今から10年前のことでした。
国際婦人年大阪準備会よりこんなアピールが届いたのです。

どんなものでも自分の目でたしかめ、自分で考えるという自立したミセスです。彼女もやっぱり産休後2年間は仕事がないという窓際族だったそうです。

大阪婦人のみなさん
一九七五年は、国連総会で決められた国際婦人年として幕をあげました。今日まで婦人がさまざまな場で努力し、協力し、力いっぱい生きてきたにもかかわらず、それほど認められもせず、お互いにどんなに残念に思っていることでしょうか。

そして、18年間も女性の採用がないという朝日放送の今田純子さん、大阪市大の学生サークルから「れふあむ」を経て「北区の会」の有力メンバーになった米家佐奈恵さん（彼女は10年の自己総括をこの号にかいています）、2年前からミニパンフをみてとびこんできてくれた薬剤師の松村淑子さん、昨年は松尾弁護士事務所で働く井上和さんも。そして出版社に働く言いだしべえの私を入れて8人がこしはらくの世話人といったところです。

国際婦人年には、世界中の、日本中の、そして大阪中の婦人が手をとりあって
男女の差別をなくし
婦人の発展をはかり
平和につくす

その他大広の江口春江さん、市職の加藤明さん、商社の坂口秋子さん、北川恵美子さん、高島利津子さん、出路美登江さん、豊田和子さん、出版の柿崎浩子さん、裁判所の塩田宣代さんらの名がミニパンフの裏には書いてあります。

年とする、よい機会にしましょう
わたしたちの力が大きければ大きいだけ、みのも大きく、将来への展望も明るくひろげるでしょう。経済・政治・社会・文化などの場で、思いきり自由にはばたきたいものです。

みんな仕事や家庭や他にもしたいことがいっぱいあるなかで、なぜか婦人問題に執着し、講座をつづけていく牽引車になったのです。

さあ、みなさん、お互いが平等に民主的に国際婦人年を生かそうではありませんか。
平等の翼をひろげ
かぎりない発展めざし
平和の鳩よ 飛べ
婦人よさらに力づく

一九七五年一月一日

私も何かしたいなあ、大学時代からつづいている「れふあむ」の友人たち、そして最近知りあった、北区に働くすばらしいミセスたちとちょっと深く語りあいたいと願ったのでした。

折しもこの四月は、第二期黒田革新府政を守り発展させる年でした。私は、夫を亡くしてひとりぼっちになった姑と同居するため、通勤一時間半もかかる神戸の神楽台にうつったばかりだったのに、候補者が「れふあむ」メンバーの黒田悠紀子さんの父上であることもあって、大阪知事選にうちこんでいました。あの廃屋めいた大阪フィルムビルの一階の片すみに、革新府政をすすめる北区婦人連絡会をおき、その事務局を手伝うことになりました。（これがきっかけで、のち「北区明るい会」の事務局長にスカウトされました）
そこには、電話局や阪大病院の看護婦、テレビ局や新聞、広告、商社、損保、市役所、裁判所などに働く人や労組幹部、弁護士などもしょっちゅう顔をみせていました。

私たち婦人連絡会のメンバーは、国際婦人年記念のバッチを「北区明るい会」に出入りする男たちにせつせと売りつけました。「なんやメスのバッチや」と皮肉られながらも、六百個以上ひろめたのです。

このバッチの利益と、選挙のおかげで知りあったたくましいミセスたちの力を借りて、

婦人問題講座を始めました。会長は川西渥子弁護士。講座のお知らせチラシを書いたのは平井悦子さん。彼女は「女・エロス」をみてれふぁむに参加し、アルバイトで北区明るい会を手伝っていました。関学で絵画部についてデザイナーをめざしているという彼女に、シルク印刷で婦人年マークを染めぬいたゼッケンをつくってもらい、淀屋橋で何度も婦人問題講座おさそいのピラをまきました。あちこちの労組の婦人部をたずね歩き、新しい知りあいをふやす努力をいたしました。

そしていよいよ、7月から12月までの第2土曜日の午後、30名から50名での話しあい、参加費は百円、そのかわり、講師謝礼も千円という手づくり講座が始まったのです。第一回目のテーマは「婦人解放のために」でした。場所は、紀国屋の近くの北市民教養ルーム、男性もハガキでの申込者が3名ありました。7月例会は、ひかりのくにの西森幸世さんと朝日放送の村井邦子さんによる「職場の中の男女差別(その1)」でした。8月は「その2ー母性保護と育児」。パネラーは東洋紡の河野ひとみさん、大成火災の根岸康子さん、電話局の塩満恭子さんです。

9月は「性をめぐる問題」。パネラーはキリスト教婦人矯風会の飯沼道子さん、養護教諭の荒井由美子さん、産婦人科看護婦の泊更子さんです。

10月は「家庭と社会の中の男女差別」。家庭科の男女共修運動をやってる北野高校の阿

倍八重先生、三井物産の荻和子さんのO.L論、枚方で婦人白書をつくった山崎万里さんの主婦論でした。

11月は「明治・大正・昭和を生きる」で、二人のおおばちゃんをおまねきました。一人は『女工哀史』の共著者高井としをさん。細井和喜蔵夫人で、もう高齢でしたので、尼崎のお家に伺って聞いてきたインタビュートープと彼女が書いた数冊のミニコミが資料でした。この資料をまとめた杉尾敏明先生とはのち甲田光雄さんのお考えをまとめた『少食健康法』でお世話になったのは奇遇でした。もう一人は北区の商家のおかみさんで地域婦人会の活動を長くやっている黒田幾久子さん。

12月は「婦人解放をめぐる」というしめくり集会。国際婦連などのよびかけで10月にベルリンで開かれた国際婦人年世界大会に参加した横田昌子さんと沢田好子さんがパネラーでした。

こうみてきますと、7月のメキシコ会議や藤田たきさんのあいさつ、世界行動計画などは、宝の山だといわれながらもあまりまじめに学習されていないのが、残念なことです。

でも「平和・発展・平等」をスローガンに一九七六年から一九八五年までを「国連婦人の10年」にするというメキシコ会議のよびかけにこたえ、私たちも婦人問題講座を10年間やろうと決意しました。そして、第一回目の講座の内容は翌年の3月8日の国際婦人デー

のとき、百円のパンフにして販売しました。手帳サイズでハンドバックにもすっぽり。表紙の絵をかいたのは浜田ひとみさんの妹さん、千冊はあったという間に売りきれずぐに千冊重版しました。

＊私たちの共働き論を平行して「主婦問題講座」も誕生

女にも労働権がある、女性の自立は経済的裏づけがあってこそ——これが大学時代の私たちの結論でした。仕事について2年目に参加した日本母親大会でも「共働き」の分科会に出た私です。第2期講座は「働きつづけるためにー共働きと子ども」といたしました。

7月は「共働きをめぐるー働く意味」。パネラーは大正海上で保育所づくりにもとりくんできた滝川典子さんと、枚方の主婦で、物理学者でもある曾田書子さんでした。「もっと妻は夫をつきはなすべき」と訴える主夫の小川さんや、「託養所も必要」という神崎さんの顔もありました。

8月は全司法の樋口基子さんと生野保健所の山衛守和枝さんを講師に「働きつづけるための条件づくり」で、とても感動的なつどいでした。9月は大保連の樋口和恵さんと保育所々長の吉本昭子さんを迎えて「保育所をめぐる問題」を考えました。10月と11月は「小・中学生の子ども」で学童保育をやってる萩原道子さん、小学校教師の池田民子さん、少年少女センターの塩満さんと粕野高子さんがパ

ネリストでした。そして11月はまとめの「共働き論づくり」。

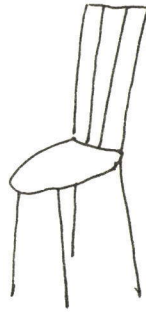
このとき主婦の参加者から「働いてる人にあこがれる一方、全く別の人種と想っていたが、子どもの問題で働く母親は実に不安定な状況にいることを発見した。人間にとって家事のもつ意味、男にとつての働く意味、主婦の社会的な位置なども考えたい」との発言がきっかけで、保育所つきで朝10時〜12時までの主婦問題講座が誕生したのでした。初めの頃は「れふあむ」の片岡陽子さんや私が講師でした。

また、関経協の平田順子さんが出産後、仕事をとりあげられて退職強要されたのを、「守る会」をつくって婦人少年室に訴えたのもこの年でした。いまでは二人の子どもも大きくなり、村八分も少しはゆるんで元気で働いています。

共働きの先輩たちの生活の知恵、心のもち方、子どもが小さい時のすごし方、保育所のつくり方に利用法、夫と子どもへの家事の特別法など、楽しい共働きのためのノウハウがぎっしりつまったパンフNo.2は、新聞で紹介されるやいなや電話と手紙が殺到しました。あるお爺さんは、「うちの孫娘が共働きをするといっている。どんなことになるのか知りたくて」と手紙。「子どもが生まれたらやめるつもりでしたが、このパンフをみて勇気がわいてきました」と若いOL。様々な世代のいろ

んな人が共働きとかかわりがあるのに感心したものです。

なおこのパンフづくりは、小さな子どもと老親をかかえた母子家庭でありながら、タイプ印刷屋さんを始めたばかりの藤崎光子さんの「あらくさタイプ」で印刷され、以後、会長である川西渥子弁護士事務所と並んでここがもう一つの拠点になったのでした。



＊闘う女は美しい

さて3年目は「仕事の中の女たち―職場の中での男女平等」で7月は「産休をとったらベースアップなし」という日本シェーリングで裁判闘争中の寺内豊豆子さんとラジオ大阪の杉崎信子さんをよんで「母性保護は平等のさまたげか」という白熱の論争、8月は「男女差別賃金をどうしてなくすか」がテーマでした。ちょうど三和銀行では、男子のみの手当は「同一労働同一賃金」の労基法第4条違反であると、労基署からの命令がでたことも

あって、勇気ある24名のうちの一人香田法子さんと、東洋紡の井上千恵子さんが講師でした。

9月は「昇進と昇格―管理職への道」でした。阪大病院小児科の主任婦長でILOの総会で看護労働について発言してきた布引喜美江さんと、鈴鹿市の山本和子さんをおよびして、当時まだ婦人運動の分野では弱いテーマである管理職問題にとりくみました。

ちょっと長いのですが、その時の彼女の発言をメモしてみます。

「私の受けた差別の歴史は、一九四八年鈴鹿市に就職した時の初任給差別に始まり、昇任、昇格、雑用、役付、研修、扶養手当支給認定、健康保険給付、消防手当支給の差別と10項目のぼり、それ以外にも住宅手当が世帯主のみ、大卒の女子は採用しない等の差別があります。私はそれらに対して一つ一つ闘って、完全な差別撤廃までに25年かかりました。労組の役員にも立候補しましたが、66年に団結権のない消防本部に配転されたのです。(中略) 昇格差別撤廃の訴訟をおこしてからは、女性係長も大幅にふえ、給茶器が入り、掃除も早朝当番から委託にかわって、他の市町村にも影響を与えています。」

地裁では全面勝利、高裁では敗北、そしていま最高裁での勝利をまっているところです。一人の女性の偉大なる闘い、どこの集会にも必ず出かけてピラをまき署名をとる彼女の姿に、私たちがどんなにか励まされたことで

した。一九七八年発行の「れふあむ」12号にも彼女の手記「差別とのたたかい—どんな男女差別もゆるさない」が掲載されています。

10月は「パートタイマーやアルバイト主婦と労働者の間」というテーマで、訪問販売会社の職場保育所で働く豊田雅子さんと高槻の主婦辻幸子さんがパネリスト。35歳をすぎたらパートしかなく、若い人も6カ月契約のアルバイトやマンパワーなどの人材派遣会社の仕事をしている人がけっこういて、無権利、低賃金の女性労働の実態が浮彫りになりました。11月は「労組と婦人部—婦人部はなんのために」で、全司法の春名邦子さんと三井物産の溝川ひろ子さんを囲んで、大阪市バス車掌の33歳定年裁判のはなしなども聞き、労働組合のあり方についていろいろ考えさせられました。

12月は「女が働く意味—どんな仕事をどんな立場で」と題して、私たちの親団体ともいうべき国際婦人年大阪の会の事務局長の城ゆきさんと、大阪府での男女平等をめざす婦人行政の推進者山代喜代子さんを迎えての話しあいです。

まとめのミニパンフNo.3の付録には、私たちのまわりのすばらしい女たち七人へのインタビューがのっています。ちなみに寺沢勝子弁護士、紀国屋書店の女性管理職加藤敦子さん、全司法で婦人部をつくった清水睦子さん、14歳の時から電話交換手として働いてきた東田富美江さん、36歳で初産、職場で初めての

子持ちミセスとなった博報堂の丸子喜代子さん、ベテラン保健婦の藤井千恵子さん、河内音頭が得意の小山よし子さんの七人でした。

＊まず一人で生きられる社会を

4年目は「女性と福祉—一人でも生きられるか」です。せわの一人である柿崎浩子さんが独身婦人連盟関西支部に所属していて、京都嵐山の常寂光寺に「女の碑」をたてる運動をしていました。この全面協力で、生活保護をうけてのくらしぶり、年金ぐらしの実態、老人ホームの寮母さんのはなし、病気になるたときの医療と福祉のあり方など看護婦さんやケースワーカーにたっぷりお聞きしました。

また8月には、特別例会としてソビエト旅行も企て、楽しい思い出がいっぱい。

念のためテーマと講師名を列挙しておきます。7月女の一生と福祉。区役所で生活保護担当の平川暢子さんと、社会福祉協議会で老人給食や家庭奉仕員制度にとりくんでいる人見和子さん。8月私たちのソビエト旅行。78年7月30日～8月12日、30名で、モスクワ、ウリヤノフスク、レニングラード、ラズリヨフ、エルミタージュ、ハバロフスク、ナホトカ。卒業して一年目で旅費がないという米家さんや柿坂さんも無理矢理参加。「子どもが好きでスキップしながら教室に入ります」とみんなを笑わせてくれる浅野祐子さんもちの時から初めての海外旅行でしたが、すっかり

やみつきになって、以後毎年どこかへとびだすほどの凝りようです。保育所や雑誌「ソビエト婦人」の編集部をたずねた他は、ごく気楽な観光旅行でした。

9月年金では、年金生活体験者の田畑鞠子さん、橋本正代さん、独身婦人連盟の神崎房子さんがパネラー。

10月女性と医療では、医師で保健所長の逢坂隆子さん、阪大病院の看護婦柳生啓子さん。11月女性の老後は、独婦連の谷嘉代子さんと老人ホームで働く神田富子さんに。

12月女性の自立・生きがいにはフリーターキング。ずっと参加して土屋隆司さんは老人の孤独は①仲間②役職③孤独に耐える力の3つを持ってないことからおこりがちなので、人間関係を豊かにし、家族や地域の中に自己の場や仕事を持ち、死をみつめる力を自己教育して自分なりの道をきりひらくことを提言しています。男ながら婦人問題にずっと関心を持ちつづけていつも私たちのとりくみに協力してくれる貴重な存在です。

ミニパンフNo.4の付録には大阪府下老人ホーム一覧がのっています。

なおこの年、『婦人問題ハンドブック』を片岡さん、樋口さん、森さん、川西先生など北区の会メンバーに執筆してもらい、創元新書の一冊として刊行いたしました。

＊花のOL御堂筋をゆく

— 女たちの昼休みデモ

そして78年11月、労基法改悪案が出たので

す。国連婦人の10年の中間総括を控えて、保護抜き平等法をつくらうというとんだプレゼントです。私たちは翌年の6月、特別例会として全司法婦人部や新婦人北支部との共催で、八労基法をしてアジアの女たちという塩沢美代子さんの講演会にとりくみました。

「労基法の改悪で一番被害を受けるのは、声なき声の未組織の婦人労働者です。繊維、電器、食品、水産などの工場で働いている三百万人の現場女子労働者のことをご存知でしょうか。機械にあわせた猛スピードの中、ある特定の筋肉とか目だけを酷使し、2年も働けばくたくたです。

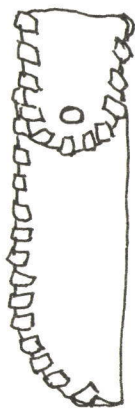
いま女子労働者の深夜業禁止で男子が深夜に働いていますが、能率が悪くコストも3倍、安くて器用で従順な女子労働者をねらっているのです。

アジアでは今も、「女工哀史」が生きています。日本の労働時間の短縮、人間らしい労働の確立は、アジアにきつといい影響を与えることでしょう。みなさんのように学習会をもち、組合もある人たちは、もっとたくさんの人にとっての問題を知らせる義務があります。

私たちはこの提起をうけて主催3団体であちこちによびかけ、その年の秋、思いきって女ばかりの昼休みデモを始めました。スローガンは「女性の地位向上、労基法改悪反対、平和を守ろう」などで主催はその年ごとにつくる「女たちの昼休みデモ実行委員会」、財政は団体、個人の自主的な分担金システムで

す。

一回目のときは、デモの集合場所を確保するだけでも大変でした。天満警察署に申請にいったら、三〇〇人の集まれる集合場所を確保せよというのです。駅前第3ビル前のひろばがいいと思って交渉すると、大阪市の許可がないとダメ、駅前第2ビルのいま、ともしびのある所を貸してくれるというはなしがあったので申し出ると、へやは確保しても道路にでるまでの通路の許可を得よととにかく



一日中ふりまわされ、全く頭にきました。結局は西梅田ビル前の空地を借りたのですが、とても腹がたつたので「大阪民主新報」に投書しました。そしたら、その投書を見て、フオーク歌手の野田淳子さんが「私もそんなデモ好きよ。参加します」とギターかかえてとびこんできてくれ、翌年彼女のうたと片岡美智子さんの踊りで、「いきいきコンサート」を開くことになったのです。

全く窮すれば通ずということばがあります

が、必死であがいてると思わぬ展望がひらけるものです。

第二回目は、宮地光子、斎藤ともよの両弁護士に付添ってもらってデモ出発地点の確保です。昼休みだけの30分を、次々あつまっては出ていくのだし、通行のじゃまにならない範囲で桜橋東洋ビル前で許可してほしいと交渉し、いまではすぐにOKとなりました。二回目からは東区も加わって4コース。とくに北区コースでは全司法の婦人たちのがんばりで先頭をチャアガールとブラスバンドがすすみ、道ゆく人を楽しませています。

手に手にプラカードや花をもつ制服や私服のOLたちがつづき、交差点ごとに入ったり出たりのをがしいデモながら、年々ふくれあがって、「均等法」を国会で継続審議中の84年秋は、五〇〇余名の参加となり、「労基法改悪反対・実効ある平等法をつくれ」の声がビルの谷間にこだましたのです。

実行委員長は七回ともずっと全司法の石渡照代さん、ごころうさまでした。

この年の婦人問題講座は、国際児童年を記念して「女性と子ども——あえて母性を問う」です。プログラムをかいておきます。

1 私と子ども。パネリストは田丸青美さんと、里親運動をやっている家庭養護促進協会の福山萬亀さん。

2 子どもにとって親とは何か。北淀高校の永田治良先生を助言者に、中・高生たちを特別ゲストに、子どもからみた親への意見を述

べてもらいました。村上良一、前田敦司、北沢初枝、片岡まきこ、水野真奈美、赤松理、山本雅子の7人でした。

3 職場と地域の母性。パネリストは次の2人です。一人は加古川の産婦人科で健康相談をやっている保健婦の赤松彰子さんです。彼女は6月の塩沢さんの講演会に新聞をみて参加して以来、すばらしい発言の数々です。つまり私たちを魅了したのです。体からみた女の自立、自らの生活革命——くわしくは、れふあむ、15号の彼女のエッセイや、最近私が担当して創元社刊で出版した『女、心とからだ——婦人科相談室五〇〇〇枚のカルテより』をごらん下さい。

そしてもう一人は、松下電器の松本明子さんです。中学卒業以来22年、組合の婦人部長として、松下健康を守る会のメンバーとして、2人の子どもをかかえながら低賃金の中を合理化と闘ってきたその体験はすばらしい迫力でした。彼女が労組の婦人部長だった昭和38年には生休取得率は90%、45年には25%、そしていまは9%と、みごとに組合を骨ぬきにして会社が利益をあげてきただらう軌跡を示しています。右手で材料をとり、左手でスイッチを入れるなど31の動作を35秒でやるコンベアの仕事は体も心もむしはんでいっています。労基法改悪は絶対阻止しなければという彼女の発言は説得力あるものでした。

なおこの時三浦さんが何度も流産した体験を話す中から「働く女性の結婚・妊娠・出産」

という特別パンフを作ることになり、赤松、内田のコンビで六〇〇〇冊も普及しました。

4 「母性」はつくられるかのパネリストは市大・生活科学部の岩堂美智子さんと、大阪女性史研究会の神谷伸子さん。

5 労働基準法そして男女平等法は、渡辺和恵、松尾道子の両弁護士。12月は親子フェスティバルで、「家事、育児のできるすばらしいお父さん」の表彰、人形劇団「チロリン村」による「桃太郎」、野田淳子さんの「女からの共稼ぎのパラード」などたのしいしめくり集会でした。

* パートと離婚の相談ばかり

——現代女性の悩み事情

さて、いよいよ一九八〇年。北区には女性弁護士がたくさん働いています。子育てに悩む共働き女性の仲間でもあります。第6期目の講座は彼女たちを講師に「女性と法律」としました。

結婚と家庭のテーマのときには、朝鮮人と結婚している女性の発言から、関西国際結婚を考える会が誕生し、8月から10月にかけては「働く婦人の悩み110番」も毎週一回計10回で開設いたしました。

もとはといえば、ミニパンフを買ったある女性からの手紙です。「私は研究職20余年、独身でひたすら会社のために働いてきて、男性にも負けないだけの実績をつんだつもりですが、この男女差別の賃金は何とかならない

ものでしょうか」という切々たる訴えにこたえて、彼女と一緒に労基署に行ったり世論をかえる行動に参加する勇気のある仲間をたくさんみつけようと始めたことでした。

ところがあけてびつくり、パートと離婚の相談が殺到したのです。

「収入が70万を越えようと扶養家族からはずされるなんて。これをタテに低賃金をおしつけられます」「先月は仕事が少ないので休んでくれ、今日は仕事がないからやめてくれ。13年もつとめても、パートには退職金もないのでしょうか」「暴力亭主から逃げたい」

女も管理職などと上昇志向ぎみの私たちにあって、女ゆえに置かれている重苦しい現実をまざまざとみせつけられた活動でした。

いつでも安く使いつてできるパートタイマー、まるで正社員よりも身分が下であるかのような労働条件があるかぎり、日本中の労働者の賃金はあがるはずがありません。パートも労働者、労働基準法が適用されて、社会保険も休暇もとれるというこのあたりまえのことを知らせるためにつくった二百円のパンフ「パートで働くために——損をしないための12章」は、何と3万部も売れたのです。マスコミの取材攻勢、あちこちにひろがった110番活動、まさに80年はパート問題にやっと光があてられた年だったのです。

この年の7月、日本政府はコペンハーゲンでの国際婦人年世界大会で、「差別撤廃条約」に署名いたしました。

タイトルとパネリストをあげておきます。
6月「結婚と家庭の法律」(松尾道子、松井千恵子) 7月「財産にまつわる法律」(斎藤ともよ、川西渥子) 8月「女が働くときに」(宮地光子) 9月「子どもをめぐる法律」(大野町子、平岡延子) 10月「老人に関する法律」(山田磯子、寺沢勝子) 11月「生きのびるために」(石田法子、正木みどり) で、講師はすべて女性弁護士、司会は全司法の人たちでした。

この時のミニパンフNo.6の監修は松尾道子弁護士。すっかり意気投合して、それから2年後「楽しんでます共働き」と「はずんでます共働き」の2冊の本を書いていただきました。全くのところ国際婦人年で一番得したのは私かもしれませんね。婦人問題という趣味が会社の仕事でもうける(！)という実益と両立できるようになったのですから。

＊平等法づくりは私たちの手で

第7期以後のミニパンフはまだ数百冊残っておりましてそれを買っていたくとしてテーマとパネリストだけメモしておきます。
第7期講座「ゆれ動く女性像―男女平等をどうすすめるか」で、大教組の宮本英子さんの全面協力を得ました。

1 つくられた「女」と「男」(中村純子、宮本英子) 2 期待される女性像―女子教育の歴史(阿部八重、高木方子) 3 いま男女平等教育は―家庭科や性教育(会澤たか子、森田とよ子) 4 働いて生きる―女性の進路や職業指

導(与儀ちひろ、本幸子) 5 マスコミの渦の中で―テレビ、雑誌、広告(樋口佐代子、中塚圭子、津村明子) 6 21世紀の女たち―「いい女」になるためになつていきます。
81年にはILOの「家族的責任条約」が出て、国際的に男女の役割分担の問いなおしが始まりました。

また3月には日本橋ですわりこみまでして昇格差別を突破した日本信託銀行の木崎泰子さんをよんで「男女差別賃金をなくす大阪連絡会」を結成し、私たちの手で平等法づくりのスタートをきったのでした。

第8期は優生保護法改悪運動にも刺激されて「あなたお元気ですか―働く女性と健康」にとりくみました。

6月「女のからだ―そのしくみと働き」。赤松彰子さんの「生理があがったらシルクロードへ」という言葉がおもしろかった。7月は「仕事で起る病気」。三和銀行の井口恵子さんによる職場のQCサークルやら残業が値切られ過労死が増えているなど、ぞっとする話のあとは、舞踊家の片岡美智子さんの指導で体はぐし。8月も同じテーマで、武田薬品の富樫弘子さんのなし。アンブルと6キロの砂袋を持参して注射薬の肉眼検査のようすを実演。もう一人のパネリストはフリーの保健婦の内田真砂さん。9月は「母性保護」。大阪府職労の母性保護講師団で保健婦そして婦人部長でもある小椋芳子さんが講師です。

10月は「心の病気」がテーマで大阪府立職業病センターの水野洋先生のおはなし、11月は北千里公民館の料理教室をかりて、宮本和子さんと中筋恵子さんによる調理実習。その土地のその時期のものを食べる(身土不二)、丸ごと食べる全体食、陰陽を見きわめる、食品添加物のないものをといたおはなしは、山崎万里さんや棧敷よし子さんから何度もきかされたなつかしい原則でした。

この年は、日本母親大会が大阪であることとで何かと大いそがしでしたが、会場の都合でやれなかった「わたしの映画祭」は、第4回わたしの昼休みデモの前夜祭にすることにしました。

主催は映画の好きなグリーンピースの会、上映作品は「声なき叫び」と「愛と喝采の日々」。「母」の3本で七百円、観客は五四〇名で十数万円の黒字となり、「映画の好きなへちまの会」にひきつがれて、84年の秋「地の塩」と「女性の地位」を華麻衣で上映したばかりです。できれば年に2回くらい、わたしの映画祭をやるうと話していますが、どうなりますやら。

83年の第9期は再び女性弁護士とくみ、世界中の平等法比較研究をやって、11月のしめくくり集会では、渡辺・石田弁護士の協力で「平等法試案」、「お役に立ちます、私たちの男女平等法―人間らしい働き方を求めて」を発表しました。差別をなくす過渡期での特別措置や、「女子は自宅通勤にかぎる」とか

「転勤のできる人」というのも差別だと禁止行為認定のガイドラインを示し、こんな平等法ができたらどんなに良いだろうと夢をかきためたものです。

ところがご存知のとおり、84年7月に国会で上程された法案たるや平等という名さえなくした「雇用機会均等法」（別名、奇怪禁等法）採用と昇格は努力義務にして、禁止されるのは結婚退職や若年定年などのすでに判例で確定されたものばかり。そして残業規制や深夜業の禁止などの母性保護はとりはずし、男にみに働く人のみが平等になれる。超過密の長時間労働のいやな人はパートで安く働いて下さい。女の仕事はまず家庭から、という日経連の筋書きどおりのものが出てきたのです。おかげで「平等法」への熱気はすっかりさめてしまいました。

この年のテーマは6月女にできない仕事って採用はすべての職場に。7月年収一千万も夢ではないー男女差別賃金をなくす。8月あつまれ女性管理職ー女がトップに立つと。9月いまだき結婚退職なんてー女はいっ、なぜ仕事をやめるか。10月パートはなぜ女だけとなっていて、それぞれアメリカやイギリス、フランスなどの平等法と日本の現実を比較しています。

＊世界の女性と連帯して

そしていよいよ第10期講座はいままででの総まとめ。日本語のできる外国女性との交流で

男女平等比較をしようということになり、あちこちのコネをつかって依頼し、6月はアメリカでキャサリン・ブロードリックさん。日本の労基法は母性保護があつて天国みたい、私はお産のあとすぐ職場にもどりました。きびしいけど、やっただけはむくわれる国アメリカ。たとえ50歳すぎてからでも大学へ入つて資格をとれば、また別の仕事保証される。7月はスウェーデンでウラ・フリスクさんの予定だったのに急にダメになって米家さんと金谷さんのスウェーデンレポート。8月はアジア女子労働者交流センターの広木道子さん。ほとんど知られてないアジアの女子労働者の実態と日本企業のひどい支配ぶり。

9月はフランスでジュヌヴィエーヴ・原口さんと国領苑子さん。失業のきびしい中でも男女平等大臣をつくって着々と成果があがっています。労働時間の短縮、休暇の多さは日本とはくらべものにならず、一カ月のバカンスはあたりまえです。10月はイギリスとドイツ。クリステイニス・サトさんとアンケ・ヴィーガントさんを囲んでヨーロッパの女たちのくらしぶりを話しあいました。母性の国、日本とくらべて、これらの国々では子どもの数がへっていて、女性には働いてもらうよりまず子どもを生んでもらいたい。労働力なら移民で間にあうが、いざという時この国を守るのには自分らの血筋をひいたもの、という論議もあるようです。

11月は社会主義のソビエトと東ドイツ。リ

ュドミール・小川さんとワルトラウト・大橋さん。今までの資本主義のきびしさと貧しさ退廃とはちがつて、非効率かもしれないけど人間本位の体制が何えました。女性と子どもにとつては天国です」と通訳の大橋氏が言っていました。利益を優先するのでなければ女が働いて、子どもができたら休み、病気になるったら休むのはあたりまえのことです。か。「あなたはなぜ働いているのですか」という日本の主婦の質問に「私が生まれたときから、まわりの女たちはみんな働いていましたのでそんなこと考えたことありません」との答えは、日本とかの国との断層のちがいを大きく見せつけられた瞬間でした。女もみんな働くのが前提で、保育所も学校もお店もまわっているわけですから。

いま、同じ時代に生き働き子を育てている世界の女たち、住む環境や体制はちがっても「生む性」としての「女」をかかえながらこの国際婦人年を歩んでいるのだなというほのぼのとした連帯感の湧き出た楽しい講座でした。くわしくは3月8日発行のミニパンフNo.10をごらん下さい。なお「月刊社会教育」にも、「れふあむ」の20年と北区の会の10年について寄稿いたしました。

私たちの10年間のささやかな学習会は、学び、はなしあい、パンフをつくり、ひろめ、行動する起爆剤となつて、三万五千部のパン

フ、のべ二千人を越える参加者、10余りの関連サークルを生みだし、女性の意識変革に大きな影響を与えたと確信しています。とはいえ、女がこれだけがんばっても政治も経済も労働組合も男の世界——平和、発展、平等を世界に根づかすのはまだまだ時間がかかりそうです。二千年かけてできた差別は二千年かけてとりもどすのだという声もありますが、この10年、差別の実態はかなりみえてきました。自分の意見を持ち、自分で行動する女たちも着実に増えています。女も自分の人生を生きる——たとえ働きの条件がいっぱいあっても、自分の幸せのためでも、楽しくきりひらいていくことでしょう。

7月ナイロビで開かれる世界大会には国際婦人年北区の会として30人の旅行団を出します。21世紀までこの運動をつづける提案が出されると聞いています。私たちも、世界的な流れの中で、さらにながらばりたいと思います。

正路さんへの手紙

小田島美影

この間は電話で長く話して申し訳ありませんでした。お忙しかったのに悪かったなあ、と思つてます。ところで、十一月十七日の国際婦人年北区の会の講座「世界の女性は今」とてもおもしろかったです。書物で読むのと

違つて、直に話を聞くとニュアンスの差みだいのまで伝わってジーンと響きます。第一回から聞けばよかったと悔やまれたくらい。ソ連と東独という鉄のカーテンの向こうの体制が、男女平等を目ざす生活者という話し手のフィルターを通すと、素直に胸に溶けこんでくるから不思議です。それにしても、私たちの置かれてる現状の貧困さに愕然とした思いで帰路に着きました。体制の違いだけではかたづけられない層の違いも感じました。私たち日本人の質問はいじましかった。私たちと比べものにならない程の権利を当然として生活している彼女等が心底羨ましく感じられました。障害者の質問をした時だつて、「ここ

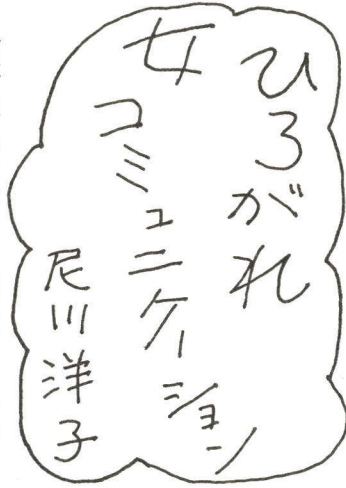
は男女平等を話し合うための場なんだから、どうして障害者のことがでるかわからない」と前置きされて話されたきめ細かな障害者対策の施策を聞きながら、これは彼女との見解の相違ばかりなのではなく、障害をもった女が背負う十字架は、政治によってかなり打ちくだけるのか。国によって障害者の世界だつて違うのだという新しいショックを受けました。障害児の母となつた女の自立は？ 障害者の女の問題こそ女性問題の原点などと考えていた私に、彼女たちの答えは新しい視点を与えてくれました。駅まで一緒だつた新婦人の人も、スウェーデンあたりからずっとショックを受けっぱなしだつたと言っていました。二人の一致点は野たれ死する自由など欲しくないねということでした。ソ連の人が言つて

た、他に問題はあるけれど、男女平等に関しては私たちはかなり到達しましたという言葉、手垢にまみれた社会主義だけど、やっぱり見直したいなあ。

話は変わりますが、この間あなたに言われた「もつと自分の頭を使って考えたら」という言葉、最初はムカツときたけど、よく考えてみると私やっぱりあなたに甘えていたんだなあと反省しました。私、人生の先輩としてあなたを尊敬しているんです。あなたがやっているといるように女性問題と関わっていかたらなあと思つているんです。どうかこれからも、よろしくアドバイスお願いしますね。

そうそう、私、我家を拠点にして、地域に女の問題を考え、各メンバーが少しでも自己変革とげていけるようなグループ呼びかけることにしました。地域紙に呼びかけ文を載せてメンバーを募つてます。同じ気持の友と、何とか軌道に乗せたいと思つてます。前途多難ですが、また応援して下さいね。それと女性学の方も、何とか建て直そうと思つてます。こちらの方ももう少しメンバーを増やさなくてはならないし、共同体をもう少し見ていくかということくらいなので大変なのですが、でもグループとしては少人数にも関わらず、一月の例会ーキブツの報告会は成功させました。十一月には主婦講座の講師として招かれたし、十二月にはスイスのベナルさんから、彼女の報告を聞きに来てという嬉しいラヴ・コールを戴いたしで、対外的には結構充実してた

と思います。来年は内容を充実する方向で続けたらと思っています。今の生きる姿勢が四〇才の自分を規定すると思うと、あせりも感じますが、来年はいろいろ具体的目標があるのでも、やる気も湧いてきます。事故の後遺症も柔らいできたので、人生を後悔しない女になるためにも、速度をあげて走ってみたいと思っています。疲れたら立ち止まったらいいと言える余裕の心をもって。いろいろと私なりの新たな旅立ちの決心を書きました。



何事も、事の始まりは簡単である。神戸・三宮の一番大きな本屋、ジュンク堂サンパル店で、私たち、ささやかな女性問題懇話会「それいゆ」が主催して、女性問題の本、千冊のブック・フェアをやることになったのも、そもそもはこんな会話からなのである。

「尼川さん、この前お預りした『それいゆ』の2号、5冊、店に並べたら1日で3冊売れてしまうんですわ。あと5冊とついでに創刊号も10冊、お預りしましょうか。それから

うちの企画の者が、あれ読んでなかなかよかったですよ。僕も読ましてもらいました」。私の働く図書館にやってくるジュンク堂の外商のMさんはそう言いながら「今、これやりますねん」と児童書フェアのちらしをくれた。この本屋は店内にギャラリーと喫茶店をもっている。

それから一カ月あまりたった六月の初め、私はジュンク堂の企画のOさんに会うことになった。Oさんの頭には「それいゆ」を読んだ時に「女性問題の本のフェア」の構想があったらしい。ただ、本屋が本を集めて並べてもおもしろくない、できれば女性たちのグループが独自に企画して、それを本屋が応援するという形にしたい、もうけることは考えていないということだった。私は典型的なO型タイプ、こんな話になると、もう頭の中に女性問題のさまざまな本がずらりと並び、ほとんど本を求めてやってくる女性たちの姿がうかんできてしまう。「おもしろそうですね。やってみましょうか」となる。Oさんの血液型は聞かなかったけれど、彼も又、大らかな性質らしく、「それいゆ」の活動実績や力量に頓着なく「おまかせします。自由にやって下さい」と不安気もなく、フェアの期間も8月3日から14日と決めてしまった。後にOさんに何故「女性問題の本のフェア」を企画する気になったかという公式見解を書いてもらったがそれは次のようなことであった。

『ウーマンリブの時代、中ピ連はなやかなりし時代、跳んでる女全盛時代、いろんな時代を経過して、女性問題を考える人たちも地に足つけた活動を始めた。いや、以前から連綿と続いてきたのが、今、表出してきたのかもしれない。

書店は常に、時代と共にある。書店は常に読者と共にある。地道で本格的な女性問題が巷間で討議されるなら、我々も又、本気で参画せねばなるまい。

『広がれ、女、コミュニケーション』の開催を「それいゆ」の尼川さんにお願した理由である。読者の半数は女性、ましてこれは男性の問題でもあるのだ。書店が参加するのは、ごく自然のなりゆき。どうして書店が？と聞かれるとかえってとまどってしまう』

しかし、まかせられるとこちらもとまどってしまう。女が女たちの中で主催者になるのはだいぶ慣れてきたが、書店という企業体をまきこんでの主催者となると……とりあえず喫茶店に入ってケーキでも食べながら、一人ゆっくりと考えてみようと思った。準備期間は2カ月たらずである。「それいゆ」は会員制をとっていない。今までも例会の他に、思いつくまま、「バイオリン・コンサート」や「宮沢賢治の詩を語りてアイリッシュハーブで表現するクラムボンの会」など催してきたけれど、いつも、やりたい人集まれ方式です

べて手作り、最終的には参加者、主催者の区別もつかないくらい調子でやってきた。やっぱり、今回もそれでいくしかない。何しろ神戸で初めての「女性問題の本のフェア」である。やる意味はある。やれば自分自身にも新しい世界がきつと広がる。私はこの単純明快な方針でメンバーを募ろうと決めた。そして7人の「やりたい人」が集まって事は始まった。女性5人、男性2人の構成である。

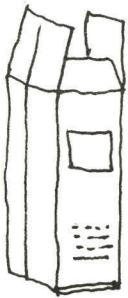
まず、このブック・フェアに何を求めるか。みんな「やる気」だから話はどうどん前へ進む。「とにかく本をただ並べるだけではだめ、もっと立体的にやろう」「女性問題って自分とはちがう世界のことと思っている人も多いからできるだけ女性の日常感覚をすくいあげて感じてやらなきゃ」「関係ないって思っている人も多いけど、悩んでいる人も多いよ」「ブック・フェアの期間中に女性たちが集まれる場をもつたら?」「女性問題の本の中ではミニコミ誌やグループ紙のはたしている役割は大きいから、それもあちこちから集めなきゃ」「パッと楽しくやれる催しもあれば」「それで、選書はどうする?」「とりあえず、自分が今まで読んでよかった本をリストアップする?」「それから、案内のちらしもつくらなくっちゃね」「えーっもう2カ月もないの?」「じゃ、ちらしの原稿は今週いっぱいじゃない」等々。ジュンク堂のOさんは私たちの姦しい会話のもっぱら聞き役である。2時間あまりのあれやこれやの話し合いで、

今回のブック・フェアは女性と女性問題の出会い、一步をふみ出したい女たちの交流を願って「広がれ、女、コミュニケーション——のびやかな女の生き方を——」というテーマにしようということになった。期間中に、パネルディスカッション「自分らしい生き方のすすめ」とコンサート&ビアパーティーの催しをやることも決めた。力量などは考えずにである。

女たちは、真に自分が主催者になった時にはすばらしい能力と行動力を発揮する。先の「バイオリン・コンサート」と「クラムボン」で、それは実証済である、やりたいことはやるにかぎると思う。しかし、実際にそれぞれがかかえている生活はある。私自身もきつちりと9時から5時まで拘束される仕事を持っているし、おまけに子供2人をかかえての共働き生活。保育所のむかえもある。夫がかなり仕事人間なので、夜の時間は出かけにくいし、出かける時は子供づれということも多い。その子供も上の方は学童保育で時間ぎりぎりまで遊んで帰宅後は宿題とテレビにおわれて夜の外出をいやがる。組合の会議もあれば、学童保育の集まりや手伝いもけっこうある。そして尚、ぼんやりとしている自由な時間もほしい。仕事と家庭と自分のやりたいこととこの三つの両立が、まさに私にとってはここ10年の闘争課題ではあった。結論は、できるだけ日常生活ペースをくずさず、自分のやりたいことを家族全員に理解させつつ、家族

との時間もとっていくということ。ブック・フェアをとりくむ2カ月間、我が家の生活は、2、3回子供たちがジュンク堂の喫茶室でハンバーガーの夕食を食べた以外は何の変りもなくすぎた。もちろん、私の平均睡眠時間10時間は7時間にへったけれど、体重はへらなかつた。

「女性問題の本のフェア」は新聞各紙で紹介されたこともあって、注目をあび好評のうちに終った。今尚、ジュンク堂には「ブック・フェア」の問い合わせがくるという。このフェアは、女性問題の本として千冊以上も一同に集めることができるというほど現在の日本の女性たちの多様な分野での活躍、そして女性たち自身の行動したい思いにささえられて成功したと思う。でも、私が一番うれしかったのは、一緒にこのフェアをとりくんだったジュンク堂の若い女性社員Iさんが「女性でも、結婚して子供ができて、やろうと思えばやりたいことがやれるんですね——」という感想を述べてくれたことである。



キブツは女性を解放しなかった

ヴェレーナ・ブルコルタ

キブツという言葉は「組」という意味です。まず、イスラエルの土地で働こうとした人々は、東ヨーロッパの知識人でした。組で土地を所有し、自分の身体を働かせて理想的な社会を作るといふことです。

共同体の台所は、内から女性を解放し、新しい社会を築くため男性と同じ役割を果たさず。この理想は初期の段階では、うまくいったのですが、現在では段々失われつつあります。

食堂はキブツの生活の中心です。コミュニティの運営を決定するミーティングが、食堂で行われるからです。これは民主主義の基本となり、毎日の規則がここで決められ、規則の例外もここで決められます。これは週一回行われます。またキブツの指導者の選挙が三年ごとに行われます。それは人間は特別な権力を持たず、最も平等でありたいからです。

民主主義は、人間にとって最高の政治的生活の形ですが、多くの問題点を残しています。

私事ですが、キブツのメンバーと一緒にいた一年の経験はスイスの共同体から出発した民主主義を思わせました。しかしスイスの民主主義の欠点は、女性が進出したのは、ごく最近のことだということです。

一緒に食べるということは、個人的な問題を皆で共有するということです。キブツの中で平等という一番大切な価値観は、食堂をみればわかります。たとえば、皆同じ食物を食べており、また仕事も平等であり、必要な物も共有であり、仕事にかかわらず、人間として必要な物を得ます。そして労働による階級差別はないのです。

ところが、一つの問題が起ります。誰が望ましくない仕事をするでしょうか。誰が食堂や汚い所を掃除するでしょうか。もちろん皆は、奉仕するよりされたいのです。キブツの人といっても一般社会の人と異なりはしないのです。これを解決するのは皆で交代して仕事することになります。ですから、キブツでは仕事の内容の区別よりも時間の配分が考慮されます。

もちろんこの理想を子供に伝え、子供は働くことの大切さを知り、子供は子供なりに働きます。子供は一週間に決められた時間を働きます。一般にはキブツは家庭的でないと思われていますけれど、子供の数からみれば、一般イスラエル社会よりも多いのです。近年は大家族の傾向、つまり祖父母、両親、子供というように三世代が一緒に時を過ごすことが

多くなりました。

キブツの一番大きい欠点は、女性の解放ができなかったということです。それは何故でしょうか、子供を育てるといふのはキブツの大切な価値観で、そのためにはキブツでは時間と費用を惜しまなかったけれど、結果は一般社会と同じでした。つまり男性の新しい発展はありませんでした。キブツの男性解放運動が必要なのです。女性の仕事の内容は常に子供との関係の中にあつたので、新しい分野の社会的仕事にはつげなかつたからです。けれども、経済的に妻は夫に依存するというような関係はなかつたので、妻は常に夫の附属物ではなく、一人のメンバーとして存在したのです。個人の存在の価値はこの中で認められるでしょうか。日本人や中国人にとっては個人の存在主義は余り問題じゃないかもしれませんが、ヨーロッパ人にとっては大きな問題なのです。

キブツの一番の特色は、全ての点で力学的に作用することです。生活しながら勉強し、勉強しつつ生活する。常に進歩と発展を求めるといふことです。だから誤ちは認め、すぐ改正します。

キブツは理想的な社会ではなく、理想をめざした社会なのです。これからどういう風に発展するのか、興味深いことです。

京都国際学生の家で行われているセミナーで、私ヴェレーナ・ブルコルタが発表したことの一部を書いてみました。ご批判下さい。



意にかなうか、かたがた

言葉と現実

その1

片岡陽子

「マダム、マドモアゼルはなくなりまして。今年一月一日から、公文書のうえでのことですが……」——ある日の教室で

NHKの銀河テレビ小説「幸福戦争」をみていたら、こんな場面に出会った。星野知子演ずる姉が、大学生の弟の前に電子レンジで暖めたごはんを並べてやる。そこで二人の会話がしばらくあって、池内淳子の母親が帰ってくると、弟はさっと食卓をはなれ、姉は弟の食器をさげて、その手で洗いながら、今度は母との会話に入っていく。次にみた時にも、母親が姉に「勇を起して食べさせてやってね」といって出かける場面があった。

こんな場面をみて顔をしかめる者がまだまだ多いから、作者の高橋玄洋氏もNHKも平気なのだろう。ドラマを最後までみる時間も根気もないから断定は危険であるが、高橋氏はかなり良心的なライターであるときくし、母親は家裁の調停委員という設定でこれなのだから、げんなりしてしまう。やはり男は自分が男で、相手が女であるというだけで、自分の食べたものの後始末までさせて平気なのだと思ってしまう。それに息子にこんな厚かましさを許している母親の、家裁での調停内容の旧態依然ぶりは推して知るべしではない

だろうか。もっともドラマの後半、母親が家出したあたりでは、一応弟がお米をといったり、父親が朝の仕度について「おれがやるからいいよ」という場面があった。いかにもとってつけたようなその状況設定をみながら、やはり顔をしかめた人がNHKに抗議して、こんな修正がほどこされたのではないかと推量したのであるが、事実はどうだったのだろうか。

非常勤講師という形でフランス語を教えることになったのは一九七五年だから、今年で十年目、フランス語をとる学生が年々少なくなっていくことを含め、さまざまな状況の変化により、細々と続いてきたこの仕事もいまや風前の灯。しかしともかくこの間一、〇〇〇人は優に越える学生と接してきたことになる。といっても私が担当するのはいわゆるフランス語Ⅰ（文法）かⅡ（読本）、たまにはⅢということもあったが、ともかくほとんどが一回生、まれに二回生、一年かぎりのつきあいである。このような状況で、フランス語を媒介にどんなメッセージを送れたかを考えると

最初の数年は慣れるのに精一杯、その後はフランス語の枠組をつかませるのに精一杯というのが正直なところである。

それでも四、五年目からは自己紹介にさいして、フェミニストでヴェジタリアンでエコロジストですと宣言することにし、たとえばフェミニズムという言葉の説明することをきっかけにして、女性問題にふれるように努めた。今年十月二十一日の朝日新聞は「『女の本』しか出しません」というパリの出版社「デ・ファム（女たち）」を紹介しているが、その冒頭に出てくる絵本『バラ色のボンボンヌ』も、私が毎年生徒たちに見せてきたものである。

とはいえ反応があるのはフェミニズムより肉食主義の方で、たとえば肉を食べないというだけで、「それじゃ何を食べるの」ときかれる。缶ジュースには角砂糖にして数個以上の糖分が入っていることやコーラの謎、さらに少食、断食、ゴミやし尿が昔のように土に返るのではなく、結局は海へ流れでて汚染を蓄積している事実などは、「はじめて聞く話、信じられぬ話」であったようだ。私にしてもある朝水洗便所の快適さを満喫しつつ、ふと「これはおかしい。昔はみんな土に返っていたものを、どんなに浄化しようと、薄めようと、流しつづけていいはずはない」と気がついたので、学生にとやかくいえる筋合いではない。反応といっても「そんなことまで考えてたら、食べるものもないし、生きてら

れへん」というのが多いが、しかし最後に感想を書いてもらうと「考え方が変わった、物の見方が変わった」というのがあるのも確かである。「前のようにジュースを飲めなくなりました」とか「今までは肉を食べなくては思っていました、やめてみたらニキビが出なくなりました」とか「たばこをやめるのはむづかしいことですね」とかいう具体的な例にもぶつかるので、やっぱり話してよかったですと思う。

さて目下使用しているフランス語Iの教科書はわが夫を含む六人の男性の手になるものである。夫の書いたものはほとんどすべて目を通し、反フェミニズムの著述があればかならず文句をいうことは私の長年の習慣である。しかしこの教科書については、まとめる役が夫以外の人であったこともあり、事前に全体を読む機会はえられなかった。

実際に使用しはじめて「父も兄もいません。家にいるのは母だけです。母はお菓子を作っています」とか

「夕方です。デュプレ家では、デュプレ夫人が夕食の用意をしています。ルイは部屋でブラッサンスのレコードを聞いています」

「マリーは肉を買いました。それから乾物屋へまわって、ぶどう酒と牛乳とミネラルウォーターを買います」

「彼女は夫の帰る前に買物をすませます」などという例文にぶつかって顔をしかめ、とば

すか、他の例文にかえるか、彼女を彼にしますといったりしてきた。

「ほら、あなたコーヒーよ」

「今朝は急ぐんだ。ゆっくり飲んでるひまはないよ」というつもりで置かれたらしい例文なんかは、一字つけ加えれば、

「ほら、おまえコーヒーだよ」

「今朝は急いでるの、ゆっくり飲んでるひまはないわ」と訳すことも可能であるから、そう訳したり、二つ並べてみせたりした。

もっともびっくりしたのは、

「シモーヌは一週少くとも四〇時間、ときにはそれ以上働きます。土曜と日曜は休みです」という例文が、二訂版では見事に

「ピエールは……」に代っていたことである。夫につめよったら「ぼくがそんな提案をした覚えはない。二訂版にする際、少しづつ変えることになっていたから、何気なくそう変えたのだろう」という。しかし私は意図的に女にしておくことが大切なのだ、変えるならピエールではなくソフィとかカトリーヌとかにするべきだったと主張した。

幸い三訂版を出すにあたって、ゲラの段階で全文を読む時間があつたので、おかしな文例を列挙したり、問題点を指摘して渡してある。たとえば

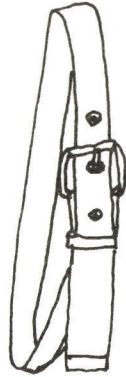
「彼はおしゃべりな女はきらいです」とあつたから

「彼女はおしゃべりな男はきらいです」と書き直したり、

「ジャンはジャンヌを愛している」を
「ジャンヌはジャンを愛している」にかえたりという具合。

はっきりしているのは主語は圧倒的に男で、目的語は女。女が主語になると、家事、料理、買物しかしらないことになっているみたい。あるいは若いとか、美しいとか、肌が白いとか容貌や年齢が問題になる。

もちろん
「私の方はすべて好調です。来年は家から



近い研究所の上級職につけると思います。とても満足しています」という文章の私が女であつたりするのは評価できるし、次のような無神経な例文はさすがに出てこない。

「彼はいちばん勇気がある」

「彼女はいちばん勇気がない」

よくこんなものを並べて平気でいられると思うのは例によって少数派で、だから受動態の例文といえは、ハンで押したようにどの教科書も愛するのは男で、愛されるのは女に決

まっていた。「この娘はポールの氣にいつている」とか「彼の娘は幼いが、行儀がいい」は多々あっても、その逆はまずない。

もっとも国際婦人年も十年目となると、やはり状況は少しづつ変わってきて、「女が働いていて、アルジェリア人が出てきて、肉も魚も食べないという男が料理をしている」場面のある教科書を使ったこともある。それでもまだまだ物足りなかつたが、今年の初め、私が「ついに出了た」と叫ばずにはいられなかつた画期的な教科書が送られてきた。寺田恕子、キャロル・ロッシュという二人の女性の手になる『今を生きるフランスの女性たち』という本で、これを出版した朝日出版社には敬意を表しておきたい。〔週刊本〕の出版社である)

内容は共働き女性の一日、未婚の母の証言、同様の流行、子育てをする父親、女性をめぐる法の変化、女性大臣とのインタヴューなど十年を一挙に跳んだ感じである。イラストが子どもっぽくて残念至極だし、中級の教科書であるから、私には使う機会はありそうもない。中級を担当しているAさんに頼みこんで使ってもらつたが、彼女がいうには「男の学生はやはり退屈するし、女の学生も半分は無関心」とのこと、でもこのような教科書が多くなつたら、これはまたこれで状況を変えていくのに役立つだろう。

フェミニズムのみならずエコロジーや菜食

主義、さらにフランスが植民地としたアフリカやアジアの国々にとっては、フランス語が「支配者の言葉」であつた(そして今もそれを排除できない)ことを盛りこんだ初級の教科書を作りたいというのは今も私の念願である。さしあたっては三訂版の教科書がどのように変るのかを注視しつつ、自分の教室には『今を生きるフランスの女性たち』のなかの、男の学生がベビシッターのアルバイトを探す話を初級用に書きかえて、使つたりしている。(一九八四・十一・七)

ケニアに行きませんか

ことしは国連婦人の10年の最終年なので、婦人の10年の成果を検討、評価し、さらに二千年に向けて何をなすべきかを考えるための世界会議が、ナイロビで7月15日〜26日に開かれます。一方NGOフォーラムは7月8日から17日で、「平和・発展・平等」及びサブテーマである「教育・雇用・保健」にそつてのパネルやワークショップがあります。

国際婦人年北区の会も、経済大国日本の男女差別の実態と世界平和を訴えるため旅行団を出します。7月10日から21日まで、会議には3日しか出れないのですが、ワークショップを申し込み中です。お金と時間の許す方はぜひ一緒にどうぞ。キャンセル待ちです。二〜三人は行けそうです。申し込みは、井上和(〇六一三一六一七六八)まで。

ことば ■ 旅 ■ そして ■
ポルトガル ■ 若松千代子

近頃東京の夕焼けがとても美しい。十二月もあと二十日を残すばかりとなって今頃は午後五時になるともう暗くなるが、その前のほんの十四、五分間の茜空が私を今日もとらえる。地下鉄のひと駅先が新宿のビル街というど真中に住んでいるので、三階の窓にはいつも工事現場のクレーンが二本も三本も突き出ているのが見えるのだが、陽の沈み始めるこの時刻には地上のすべてがはかない夕影におおわれて、やがて空は或日は茜色、或日は薄いピンクの残光に照りはえる。人工が自然と一体となる此のひとときは不思議に音も無くまるで儀式のように荘厳で美しい。

今日はこれからイタリア語の受講のため虎の門の教育会館に出かけるので、夕陽けに心を残しながらカーテンを閉じた。四月から始めたイタリア語は文法をやっとひと通り終えたばかり。自分で授業料を払っての勉強は楽しくて、五十歳を過ぎて記憶能力が残されていたと喜こんだりする。いつかイタリアに出かける機会があれば、このうちの幾分かは役に立ってくれるだろう。

初めてヨーロッパに旅立ったのは十二年も前のことで、たった一人の旅は、途中のアンカレッジ空港の待合室でもおいてけぼりなく

うのではという不安から椅子にも腰を下せないでいた小心の旅人であった。無事にパリに到着してもまだ空中にふわふわと浮き上っているような日々を過したものだ。出かける前に読んでいた荷風の「ふらんす物語」の雰囲気がそのまま残されている古都に大感激して、ふらんすを現すのはあの文章だと荷風ばりの一文を書きたくて何と大げさなと周りの人へきえきさせたものだった。

日本にはないローズやオレンジや紫などの色彩を、旅先のヨーロッパの夜明けや夕暮れの空に実際に見て、気候や風土によって異なるその土地個有の自然の色合に心動かされるようになった。東京の一隅で夕陽を眺める無心のひととき、かつての旅先での風が空気がふとよみがえる。

去年の暮はヨーロッパにいた。クリスマス前のパリは想像していたより飾りつけも地味で、不景気にあえぐフランスの気配を昼間の街のあちこちで感じたのだが、イブの宵にはシャンゼリゼの並木にふんだんに取りつけられた灯りが光りのシャワーを降りまく。世界の恋人にふさわしい豪華な演出であった。

パリから満員の列車で南下してトゥールーズに二泊し、ここから又汽車で四時間バスで

同じ位の時間をゆずられて、スペインとの国境の小国アンドーラにようやく到着。二泊の後やはりバスで国境を越えてスペインに入った。広大なピレネー山脈はバスの窓辺にごつごつとした西部劇の舞台のような岩山や切り立った崖、なだらかな広い長い斜面等、さまざまな顔を見せるが、フランス、スペイン両国の経済、観光政策の違いなどがはっきりと現れているようだ。バルセロナでは友人の予約してくれた街はずれのアパートの一室で、大晦日の感慨はなく気楽に正月を迎えた。

気分が引きしまったのは寒さではなくて、ポルトガルに出かける朝のことである。汽車もバスも、もううんざりしていたので今度はひと飛びしたかったのだが、週に一番の直行便を逸したためにマドリッドで乗り換えねばならない。マドリッド空港では大きな墜落事故があったばかりで、霧が危ないと言われていた。行先のポルトガルは、アンドーラとともに私にとっては初体験の土地であり不安がつる。ポルトガル語は出来ないで、フランス語は、ホテルは、と上衣やパンタロンのポケットの中の地図や案内書の所在を確かめる。旅先では不安と緊張で疲れが積って行き細かい字を読む気がなくなるし、読んでみてもすぐ忘れてしまうのでこれらは必ず身体につけているが、日本を出発する前、別の案内書からも二、三のホテル名を抜き書きしておいた。不安ではあるが未知の行先にわくわくする期待の方がまさっていたのは事実である。

マドリッドの空港では重い荷物を引きずって長い長い連絡通路にも迷わず、無事にリスボン行きの子機に乗り換えた。ここまで来ると日本人は私一人で、機内は正月休暇をふるさとで、或はバカンスをという様子の乗客で一杯になる。隣には身体がちぢらにもはみ出しそうな大きな女性と、ベレー帽の老人が先程配られた入国カードを前に顔を寄せてもたついている。日本人の私が適当にもう書き終ったのに、とこの国の人ではないのだからかと想像したりする。

リスボン空港はこじんまりとして着陸中の飛行機は少ない。愈々ヨーロッパ大陸西端の国にやって来たのだ。インフォメーションはすぐ見つかり、眼鏡のやさしい、おぼさん風の係員が笑顔で迎えてくれる。仏語が通じて、私のメモ帳に記してあった行の頭のホテル名を見て、すぐ電話帳を確かめ交渉してくれた。ポルトガルは丁度雨期で曇り空の街は予想に反して清潔できれいなのに先ず驚く。タクシーはやがてリスボン市内の中央を走る。立派な建物が並んでいるが人影は多くない。ごみや子供や話し声などで賑やかなマドリッドとはまるで違って、むしろ小パリとも言いたいシツクな風情がある。

この街が忽ち気に入ったのだが、目指すホテルは大通りに面しているもののビルへの入口の扉は硝子が割れたままで人がない。無人のエレベーターに乗りこむのは何だか薄気味が悪いものだ。が、ホテルの看板の下の扉が

開かれワイシャツ姿の普通の男が現れてほつとする。部屋の天井は真白でブルーの縁飾りが銭湯のようだが洗面台の湯は出ないしスチームも冷い。森閑とした廊下に出て「むっしゅう」と叫ぶと少年とつづいて現れた中年の女性とともにアラブの服装で私の仏語は全く通じない。ぶつぶつと不平顔でしゃべる言葉は仏語よりスペイン語に似ている。どうやら日本の女はうるさい、暖房はないのが普通なのだと言っているようだ。似たような経験を南仏で味ったことがあるので諦めて別室の浴室に入ると、まるで魔法のようにシャワーのお湯がほとばしった。

ともかく腹ごしらえを、と外に出た。時雨の故なのか人影はなく、スペインほどにはホテルも見かけない街の、入口の感じや客の入り具合で判断してやっと一軒のレストランに入る。言葉の面倒な外国人を敬遠する素振りのボーイに、今日は運が悪いなあとがっかりするが、気を取り直してまず此の国の特産ワイン「ポルト」を注文した。効果即決で、やがて中年のボーイがうやうやしく真新しい瓶を捧げ持ち、目の前でそれを開けてグラスに注ぐ。瞬間、この瓶全部が私の負担なのかと心配したが、彼は又瓶を持って去った。店主は異国人が自国のポルトを注文したことで手間のかからない客だと見て安心したのでろう。

この手はフランスで経験済みのことで、日本人の多いパリでも、ふらりと入って来た女

にレストランの客は一せいに注目する。何語でも先ず口に、そしてメニューは注文は、と客の話し声が途切れるのだが、食前酒の名を口にすることをきいてやっと安心したようにフオークを動かし始める。おかげで私はすっかり紅茶色のマルチニと友達になった。ヨーロッパではアルコールはその土地の人々との大切な媒体の役目をするようだ。それが高くないのがけちけち旅行には助かっている。

表の扉がさっと開き美しい女性が私の傍らを通り過ぎがてらにっこり会釈した。彼女に続く二、三人の連れの中に飛行機の隣席に乗り合せたベレー帽の老人をみるとめて、見違えるほど美しく化粧をしているのがあの時の不愛想な女性であったと思ひ出した。全く偶然の再会で、このレストランは界限では有名なのであろうか。

この夜のホテルは窓もきちんと閉らないし部屋の中央の扉が気にかかる。続き部屋があるようでもあり、夜中に音もなく扉が開かれ私はアラブあたりに連れ去られるのではないかしら、アラブという国は年齢に関係なく女でありさえすればいいらしいときいたことがある。朝此で無事に目を覚ますことが出来るのだろうか。でも空港のれっきとしたインフォメーションが紹介してくれたのだからたとえ行方不明になったとしても手がかりは残している、と希望をつないで、セーターを重ね靴下をはいたままで冷いベッドにもぐった。

疲れとポルトの酔いでどうやらぐっすり眠ったようだ。無事だ、荷物を置いたままホテル探して飛び出した。歩ける範囲で探したホテルの中でロッシオ駅のそばが便利だからときめたのは、何と私のメモ帳に二行目に記してあったホテルである。フロントはいつも明るくて人がいる。三階の一人部屋は手紙を書いたり食事をしたり、居心地よく照明も明るい。しかもホテルの隣りはスーパーマーケットで、昼飯時にはお総菜が各種売られているが、日本の五目御飯そっくりなのがある。お米に鶏や野菜を炊きこんであり醤油色、漬物が無いのだけが日本と異なるが、ここは日本人にとっては住みやすいのではないかしら。でもスペインほどには見かけなかったようだ。

このホテルに移って、すっかり安心して市電がのんびり走る街を歩き、黄色のケーブルカーで坂を上り、郊外電車とバスを乗り継いで、まるで神戸の西部の、昔の舞子や明石のような海辺の町を眺め、最西端のロカ岬に太平洋の波を見下す。

リスボンではたった三日間過しただけであつたが、機会があれば一カ月もいたいような愛着を残して再びマドリッドに戻つた。

短い滞在のポルトガルであつたが、裏通りで見かける子供たち、いたいたいほど幼い腕に大荷物をつぎ引きする姿に、行きずりの観光客はよく働くものだと言うような、又可哀相だと同情するような複雑な表情で足をとめる。残屑ひとつ見当らない大通りと、崩

れ落ちそうな崖に立つ古い住宅。国鉄の駅の裏にまわって見ると、まるでかつての新橋や三宮駅の様子を思い出させる赤茶けた雰囲気だ、この国の持つ明暗の歴史や政治、現在の事情などについてふと考えこんだりする印象的な旅先であつた。

旅ばかりして老後はどうするの、と時折不安が耳許で私にささやく。又時には少しばかりのアルコールで上気した頭の中に、むあーっと苦い汁がひろがって過去の悔いやこれからの不安が狼となって暴れる。未知の土地に旅立とうとするから外国語を懸命に覚え、旅先で足許危くころんだりしないように、と毎日歩いて健康に気をつける。頭も身体も老いてしまわないように努力するのだと、何倍もの勢いで不安を打ち負かす。実際に健康で手足が動けば、掃除婦をしてでも食べて行けると今の私は明るく考えている。

年金生活者とお金 田畑鞠子

＊金銭残高照会書が届く

銭勘定をしていた今は亡き三益愛子の「おしか姿さん」の姿がダブって見える程ニマリとする。第三者がこの姿をみたら、山家の独り暮らしの山姥が自分のたくらみが成功してニヤついている姿に見えたかも。…ささやかな「たくらみ」だったがそろそろ成功に近づいている。

定年退職後は年金生活。預金等とんでもないこと。しかし老年後半の経済生活を思った

時、老年前半は出来るだけ現金を手に入れることを考え後半はどうすれば？働けなくなるかも知れない、病気になるかもしれない。不安は十年満期の預金の配当で考えた。配当金に見合う生命保険料、払込期間と払込の月を預金利子配当の月にしよう。ナント素晴らしいと思つたが十年もつかと心配だつた。どんな事があつてもなどという気もなかったが前半は現金入手の手だてをしたので出来たのかもしれない。目の前を数字だけが通りこし手にしたことは無い利子だが、安心料と老年後半の経済に勞せずして少々のゆとりが出来た。めでたし、めでたしである。

＊五万円もの定期を買う

普通乗車賃を溜めておいた空ビンをひっくりかえして勘定してみた。残高七千円余り。前回分前々回分と併せて二万二千円と少し。

月のうち十六回以上出かけるなら定期の方が得と単純に考えて買ったのだが、最初の出費はスゴイという思いだつた。半年ずつの購入とはいえ、これでは大変と、毎回乗車の度に普通乗車賃をポイポイと投げ入れてみた。残りは第一回の購入資金が回収出来れば大成功ということか。定期で定期預金というシャレでもないが、第一回の金額になるまで貯金でもして……と思つているが今はまだビンの中。これで味をしめて、地下鉄の回数券もやりはじめてみたが、途中で値上げがあつたりで、なかなか思うようには出来ていない。

あお田ちよび

|| 2022

吉田

喜代

女性だけで経営する私の広告事務所には、男性が仕事の合い間をぬってふらりと息抜きにやってきます。中企業の中間管理職であったり、中小企業の親父さんであったり、グループ活動の事務局長であったり、大抵は、頭に白いものまじるオジサン達です。時には二十代の会社員がやってきて、わが事務所の女性たちを喜ばせます。

彼等とはとも正直に話します。信じていた相手にまんまと利用されたと言っては口惜しがり、私のような者のささやかなアドバイスに耳を傾けて帰っていきます。そういうとき私は相手が自分より年上の男性であることを忘れていきます。相手もそのようです。男、女、どちらでもいいのです。それよりも、数日前にそっくり同じような「口惜しい話」を女性の友人が持ち込んできたことを思い出します。私の目にはうっすらと見えてきます。彼と彼女の背景に詐欺師でもなんでもない、ちょっと悪知恵の働く人間たちが、何とか生きのびようとあがいている姿が、悪知恵サンたちは手近かに彼や彼女がいたから、自分の窮地を脱するために利用したらしいのです。あまり強くもない者が弱い相手を踏み台にしただけ。

彼らの背景にはもっと大きな曲者がいます。人より一步先んじて才覚を働かさなければ生き残ってゆけない社会です。才覚の働かせ方は時代と共にどんどん複雑になってゆきます。昨日と同じことをしていたのではじり貧になつてゆくような社会です。分りやすい例では、石油ショックの後も燃費を食う車を作りつけて才覚ある日本に追いあげられたアメリカの自動車産業などがそうですね。

そんなに働いてどこへ行くの？

社会の技術進歩がそうさせたと言ってしまうのはおしまいだ。技術進歩させたのもどこかのオジサン、オニサンたちでしょう。この人たちも、昨日と同じことをしていたのでは脱落してしまうから進歩に追いかけていられるのです。技術が進歩したら、それを使いこなす技術がまた「進歩」し、それを売る技術にすさまじいばかりの才覚が必要となります。低成長時代の今は「売る」のが大層難しいときで、大手のスーパーでも最近では六店舗もパッサリ閉鎖して赤字解消をはかった例があります。これも消費構造の変化に対応する才覚を持たず、じり貧になったから。閉鎖

になればそこで働いていたパートタイマーは職を失って、買い控えるでしょう。すると、また……。

みんなワになつてぐるぐる回っている。ワのつなぎ目で大多数の男と少数の女たちがやつきになつている。

私は一昨年、流通業界で働く勝者と呼ばれる男性の、一日のスケジュール表を読んだことがあります。午前中、二つ企画会議、午後は東京から名古屋へ飛んで、夕方帰ってきて売上げの分析、夜は異業種の人脈交流とかで飲み、帰宅は深夜。恐らくその間隙を縫ってデータを読みこなしている筈です。

彼だけではありません。勝者の層にいる男性たちはそれを維持するために必死です。セミナー会場で時々そういう男性の知人を見かけます。ちょっとからかってやろうと、私はわざと彼に明るい声をかけてみます。彼は不意をつかれたように、セミナーのテキストから顔をあげます。そしてきょんとします。彼はきょとそのテキストから次の「才覚」を見つけ出そうと、我れを忘れて没入していたのでしょう。エリートコースに乗っている銀行員が長時間労働の過密スケジュールをこなしている話も聞きました。家へ深夜帰って、朝、定刻に出社して、という生活です。それがイヤだとはエリート氏は思っていないらしいですね。その姿に接した出入り業者の中小企業の社長が真似始めました。一日七軒の得意先回りを十軒に増やす過密スケジュール

を組んでみて、「やれば出来る」と、私に得意そうに話していました。

さて、これからどうする？

もうお気付きですね。このような男性たちが、女性と「男女差別」について話し合うゆとりを持っているでしょうか。話し合う気持ちすらどこか置き忘れてしまっているかもしれないません。経済の「ワ」に組み込まれて自分の目の前の対処でせいっぱい、そんな自分の姿が見えていたとしても「ワ」からはずれては食べてゆけない。だから、この「ワ」をゆるがすものは必死に排斥しようとする。

この「ワ」にはOLはもちろん、消費者である主婦も組み込まれています。女性の低賃金も、結婚や出産、退職による従業員の新陳代謝も計算に入っています。経営者の立場からすれば、男女雇用均等法といったものは経済闘争のひとつに見えかねません。これではひと筋縄ではゆきません。男性も含めて、人間らしさを取り戻す生活運動になればよかったのか……。こうした変革の後に、エレクトロニクスやロボットによる新しい労働環境を迎えることができたらよかったか……。

戦後四十年かかって出来上がった経済社会の、ぐるぐる巡りの複雑なワを睨みつつ、私は、男たちと一緒にちょっと立ちすくんでいくところですよ。

詩

もが
り
笛

西本 椰枝

光いっばいの裸木の山道が
なぜこうも静かなのか

大方は弱々しい色彩の下草の中
ホトトギスの柴斑の妖しい視線が
先ほどから わたしを焦らす
ここはいつかきた山

いつか歩いた道

混乱の麓の里から分け入った
けもの道

記憶の甕にたどりつくことが
溪川の水流の源を見極めた時ほど
感激的な体験になるなどと思いはしませんが
やはり たどりつかねばならないのだ

冬には早い山の道を

いろいろの人のことを考えたり
ユダや小早川の安息の時間を推したり
あるいはブラウニングの詩をくちづさんだり

—— 神 そらにしろしめす
すべて世は こともなし

大きな岩と大きな樺にはさまれた
小さな生き物たちの秘密の場所をのぞいたり
気がつく

寂しい雲の群れ

ボロをひきずり疲れた足どりで
記憶の甕を持ち去った

地上の神々たちのように
悲しい顔

凍りついた光の粒

さがしものの甕に近づいたのかもしれない

裸木の山が鳴り始めた

静かな山に聞こえてくるのは

自然の声だけではない

呻きや歓声や それから
わたしの胸の鼓動

たどりつかねばならないのだ

とりもどさねばならないのだ
十四年前

怒りや叫びをおしこめた
焰のようなあつい甕を

私たちの同時代

田丸青実

昭和三十年代は外国文学、特にアメリカ文学ではリチャード・ライトの全盛時代であった。ベスト・セラーの「アンクル・トムの子供たち」「アメリカの息子」「ブラック・ボーイ」が昭和の何年に日本で出版されたのか、調べてみる必要があるが、ベスト・セラーの故に翻訳され、文学少女の手に渡ることが可能になったのだ。デテイルは今でも覚えていながら相当印象的だったのだろう。

それから三十年、『北米黒人女性作家選』(朝日新聞刊)という翻訳が出たのが一九八一年、一九三七年のライトのアンクル・トムの出版から実に半世紀がたっているという事になる。ライト以後の女性作家の作品を読むにつけ、ライトのえがく悲劇的な黒人というイメージが固定化されてしまっているせいか、これ程の充実ぶりをみせているとは思ひもかけなかった。日本文学の低迷する内容に比べて、そこにはありとあらゆる現実の姿が丸ごと浮び上ってくる所にショックを受けたのだ。

リチャード・ライトの繁栄の蔭で、多作でありながら、無視され、作品は絶版になり、死んだときには墓標すらなかったという、ゾラ・ニール・ハーストン。代表作は自伝「道に残る砂ぼこりの跡」一九四二年初版だが、黒人でありながら、作家となった先駆者の事を「われわれの祖母の時代には黒人の女が芸術家になるといふことは何を意味したか？それは血の流れを止めるほど残酷な答を引き出す質問なのだ」とアリス・ウォーカーは書いている。

読む本、読む本、白人のもので、黒人の文学はないのか、と、捜しとめその時はじめて、彼女はゾラ・ニール・ハーストンの名を脚註に見出したという。ゾラとアリスは一本の線で結ばれた。ゾラはアリスの手本となり以後、今日の女流文学の隆盛をみることになる。

六〇年代以後の注目すべき、黒人女流作家トニ・モリスンの「青い眼がほしい」がある。主人公の少女ピコラは、彼女は黒い肌という地獄から浮かび上って、青い眼でこの世を見たいというねがいをもっている。そのねがいも、結婚していない他の女のように赤ん坊をみごもってしまったばかりにだめになってしまふ。赤ん坊の父親と彼女の父親が同じだという赤ん坊のために。

トニ・モリスンの処女作だというこの作品には問題のシーンですら愛にみちたやさしい気持の父親が少年時代の夢の女の子と自分の

娘をこっちゃんにしまっただけの事をさらりと納得させ、読ませるための、少女のまわりの黒人社会のみごとな描写がある。ピコラのすごしてきた貧しい日常、いさかいを続ける両親、家出ばかりしている兄、住まいの二階に住む娼婦たち。学校の友達……

なかでも、鉄道の線路わきに捨てられた赤ん坊だった父親は、生まれてから現在に至る当然の帰結として娘への愛情を性交という形でしかあらわせない。悲劇風な組み立てに、時代の古さを感じるが、大そう魅力のある作品である。

「わたしたちが彼女の上に投げ棄てて、彼女が吸収してしまったすべてのごみ。それから最初は彼女のものだったのに、彼女がわたしたちにくれてしまったすべての美しさ。わたしたちはみんな、彼女の上でからだを洗ったあと、とても健康になったような気がしたものだ」と、その後、気が狂って、ごみばこをあさるピコラについて描いているが、読後感のさわやかさは現代作品にはみられないものをもっている作品である。

「青い眼がほしい」の主人公ピコラは、貧しい黒人社会の内部での犠牲者として描かれている。貧しさに押しつぶされる一つの家庭がまともに子供を育てることができないという。

明治時代の日本だって、貧困から、父親は娘を売り、兄が妹をおとしめる、妻妾同居、公娼制度廃止運動、婦人有権者同盟の婦選獲

得運動と、まさにこの小説の世界と同じ世界があったのである。

両性の平等に立ち、自主的な純潔を尊び、愛を基調とする「家庭」という新しいことばをイメージに、幾冊かの婦人誌が発刊されたのは、明治三十六年の事である。

羽仁もと子夫妻は雑誌「家庭の友」で「如何にして円満なる家庭をつくるべきか、如何にして不健全なる家庭を改良すべきか」、それには一夫一婦制の確立と、「家庭は社会の下積みとなるのではなく、この社会を高め、うるおす泉とならなくてはならない」という家庭観を誌上でキャンペーンするばかりでなく、自ら実践してみせるという先駆者であった。

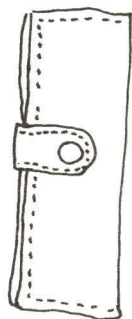
はっきりとテーマを「家庭」という事にしてしまえば、今日の日本の文学の中で女性作家のしめる位置が明らかになってくる。社会とのかかわり具合によって様々に変化してゆく家庭を彼女らはめんみつに描きつづけているし、今日の女性作家の存在理由もあるわけである。明治の先駆者が身をもって問題提起したテーマは現代にも連綿として続いていると思われる。

さて、トニ・モリスンに戻って、一九七〇年に書かれたこの作品が、祖母の時代を描く小説として位置するのなら幸せなのだけれど、今日、更に新しい商業主義社会の中で、家庭も商業主義にはんろうされ、強烈な崩壊劇が演じられている。その事では「青い眼がほしい」は現代小説にはかならない。

さて次はエリーズ・サザランドの「獅子よ菓を食め」である。

祖母、ハブルシャムかあさんの手から実母に五才の時ひきとられたアベバはブルックリンに住む。「ろくでなしなんだから、あたしらの連中は」と彼女の母は言う。「あたしらの連中のできることにいったら、赤ん坊をつくることだけ」と母親は怒っている。

彼女はピアノを習い、高校の卒業式には音楽賞と自治会の活躍賞をもらい、モーツアル



トのソナタを演奏する。しかし、娘をピアノストにしようとする母の願いは結婚によってしりぞけられ、母につれられていった占い師の言う通り、十五人の子供を生んで死んでしまう。

母はアベバに「もうこれ以上赤ん坊はいらないからね。赤ん坊は一人で十分だからね」といつづづける。

「かあさん、どうして、そんなにがみがみいうの？娘がしあわせになるのが我慢できな

いの？」

作者サザランドは「すべての苦しみが外から加えられる圧迫にもとづいたものではないことを、わたしはいいたいと思った。アベバとその母の場合のように、苦しみの原因は自分の母親であることもある。命を与えてくれたその母親が苦しみを与えることがある。わたしは人種差別のことなど重要ではないといってるわけではない。でも、何か書くたびにそのことばかりを正面に押し出す必要もないと思う」とサザランドは言う。

だがま正面にはすえられていなくても、差別の苦しみが、母親をして、命を与えた娘に苦しみを与えてしまう。差別の根深さがにじみ出てきて、まさしく、今日の日本の婦人の置かれた状況と一致する。子供を生む事がだんだんむくわれない時代になって、女は生む事をやめる。

アベバの母親はニューヨークにおける生活の苦しさもアベバのせいだと感じた。しかし、アベバには何故母親がそんなに怒りっぽいのかわからない。母親には娘に対する願望を通してしか生きられないのだから。「わたしたちは出来なかったから、おまえを通じて生きるのさ。おまえたちが男のように生きるのならいくらでも協力するさ。それなのにおまえは子供を十五人も生んでしまう。わたしがあれ程子供はひとりでもいいからね、といったのに」というアベバの生母の嘆きは娘アベバには通じない。

しかし、現代のアベバ達はアベバのように十五人も子供を生むこともなく、賢く一人か二人だけしか子供を生まない。

女が子供を生み育てる中に、あらゆる経験と伝統を次代に伝える作業をしつつ、進歩してゆくのだが、母と同じように生を生み出してゆく連鎖の中にはまりこむ事を拒絶する社会という社会はどうゆう社会なのか。

黒人がアフリカの地からアメリカに拉致されてきて三百年、やっと、私達と同じ地点に立つ事ができるようになった。一九六〇年の運動を経て、黒人の地位が社会的に確立し、アメリカの体制的な枠の中にはまった現在、黒人としての枠にはまりこむのでなく、現実を追ってゆこうとするゾラの娘、孫娘が大勢生まれているのが、現代の黒人女性作家たちなのである。

ニューヨークのマンハッタン・カレッジで教えているエリーズ・サザランドはニューヨークのソシアルワーカーとして働いていた頃、ゲッターの母子家庭の母親たちと話をし、ひどい状況をたくさん見た。けれども似た境遇にある者たちがそれぞれいぶん異なったかたで生きのびるのだな、という事を悟ったという。

実際黒人女性作家という一くくりの名で呼ぶには様々な生き方とテーマがありすぎて、ここに二つ選んだ作品は黒人女性の置かれている典型とも云えるテーマを書きあげている二作だけだったが、しかし、作品そのものは

今日の日本でもそのまま通じる作品となつてゐる。小説として優れている作品に接すると、あらゆる問題に深くつながっていて、少々の文章力では表現できない。まずは作品を読んで欲しい。

れふあむ例会レポート

57回 / 5月13日 / 北千里地区公民館にて

講師 貫名美隆氏 (元神戸外大教授)

テーマ エスペラント百年―その夢と現実―

二月の新年会以来、ことし二度目の例会は趣向を変えて、エスペラント運動の大先達貫名先生のお話です。先生は「れふあむ」創立のころからかわりのある方です。

またこの会の縁で寺島令子さんの「クオレ書房」から「セーモ」小辞典を出版されました。来年の夏、ケニアのナイロビでひらかれる「国際婦人年世界大会」にエスペラントのできるグループも派遣しましょう。

エスペラントは一九八七年に百年祭を迎え日本でも関心が高まっているようですが、れふあむ内には及ばぬよう10人の例会。初参加は冠野さん。

さて会場の公民館の館長正置友子さんと久しぶりに再会できたのは感激でした。大阪子ども文庫連絡会でお会いして、当時住んでいた枚方の御殿山婦人学級にお招きし、文庫や子どもの本の話をしてもらったことがあるのです。それから『お母さん、本とごはんとど

っちが好き』を出され、これにはあまりびっくりしませんでした。公民館の館長さんにはびっくり仰天。でも心から応援したい気持ちでした。そしてそれ以来悩みつつも二足のワラジをはいておられるのだから脱帽。(片岡)

貫名先生とエスペラントについては60頁を
ごらん下さい。

*エスペラント学習会

毎週火曜日夜6時半〜8時。「南森町」下車3番出口から、天神橋商店街を六丁目にむかって歩き、すぐの交差点、つまり「玉野屋」を右にまがったサラトガ書店の二階です
連絡は寺島まで(〇六―三〇一―四八〇五)

*クオレ書房オープン

本が大好きな寺島さんが84年12月から開店したのは古本屋さん。自分の大切な本をかざって、お客から注文されても「これは売約済ですから」と売らないとか。

みなさんのお家になむって本をどしどしおくりつけて下さい。10時〜20時まで。十三東口から3分です。

自費出版のお手伝いもしていますのでご利用下さい。

532 大阪府淀川区十三東二丁目九の十九
クオレ書房 寺島令子 〇六―三〇一―
四八〇五

心身統一 合気道に学んで

片岡美智子

思えば早いもの、合気道に出会って十二年目を迎えようとしている。踊る事の本質について考え悩んでいた時期、「天地と一体となる事が合気道の根源との言葉に開眼、それを体現している指導者を求めて道場廻り。五度目の正直でやっと出会えた、「氣」の事を中心に説き、まるで空氣がうねっているような柔らかい動きの心身統一合気道。このままで合気道も、柔道のだった道を歩んでしまう事を危惧され、氣の研究会の設立、心身統一合気道を確立された藤平光一先生との出会い。そして現在関西の責任者である指導者と生活を伴にしている。私にとって合気道が生涯の伴侶をめぐりあわせてくれ、すばらしい子供二人を授けてくれたのだから、その意義は大きく、一生をかけて探求していく課題だと思ふ。まだまだ一步を踏みだしたところではあるが、学んできた事を紹介したく、筆を執りました。

合気道は氣に合するの道と書く。道は現在

そのものが道であり、振り返れば過去になり未来永却につながっている。氣については、中国、インド、ヨーロッパなど、それぞれの思想体型で追求しており、概念説明に入ると神仏論争の哲学論議になってしまう。氣の研究會・會長の藤平先生は、わかりやすく、次のように説明される、「1は $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{2}$ と極小になっていっても決して0にはならない。又2倍にしていけば無限にしてはしない、そのような無限の半径で描いた無限の集まりを総称して氣という」。氣は実在であり、すべて氣より生じたのである。私達も氣より生じたのである。天地無限の氣を肉身である五体で囲って、気持ちの人間が誕生する。我々は、顕微鏡や望遠鏡などを含めた様々な科学の力を借りて、感覚でとらえられた時を現実の1と感ずる。1はそれ自体はどんなに小さくなくても大きくなって1である。現在、受精卵として着床した時が、現実の人間としての1であり、序々に何倍かされて成人にいたる。しかし肉体はそれ以上大きくならない。肉体を形成してきた氣の力は、その時点から拡がっていく。氣の拡がりが増える程、生死を超えた境になるといわれる。藤平先生は拡がっているのが当り前だといわれる、自分で自分の氣を止めたかたくなになる。その陥入りやすい思考パターンを自ら検討し直す必要がある、天地の氣と交流しているのが当り前だという観点から例えば、手を挙げる事、脚で立つことから体験し直してみる、そこからすでに

心身統一合気道が始まっている。「手を前にだしなさいと言ったらどうしてそんなに力を入れるのか。立ちなさいと言ったらどうしてそんなにふんばり、身構えるのか。それは氣を切った行為であり、肉体だけに頼り、立ちむかおうとしている姿である、氷山の一角のみを我力と思ひ、残りの八割に氣がついていない。人間らしくない行動ではないか。」と問われる。

様々な武道は、自分に敵対している相手を想定する、そこで肉体どうしがぶつかれば、強い方が勝つ、勝負の世界である、それ故、なんとしても勝とうとし、勝つことが目的になる。心身統一合気道は、勝負ではなく、正しいか、正しくないかが問題とされる。正しい者が強いという真理に立脚する。そして氣の原理に合う限り、必ず法則があり、解決されない問題はないという信念にいたる。

具体的に先生の説かれる心身統一合気道の五原則から説明しよう。

- 一、氣がでている
- 二、相手の心をしる
- 三、相手の氣を尊ぶ
- 四、相手の立場にたつ
- 五、率先窮行

一、まず自分の氣持を鎮める。相手の全体を受け入れ、包みこむような氣持になってみる、自分がフワッと大きくなった感覚をつかむ。

二、相手がどのような心の状態なのか。例えばつかみに来た時、どの方向からどの位の強さで押しているのか、引いているのか、相手の感情の水位を知る。

三、相手の氣を尊び、押すなら押させてやり、ひっぱっているなら、引っぱらせてあげる。

四、自分のほうから、相手の意志がむいている方向まで身を転じて氣の流れを同じくする(転換) 或いはすぐさま相手のふところへ飛びこむ(入身)、二つの力の流れが合流して一つになる新たな流れをつくりだす。(呼吸)

五、自信をもって正しきを行う。いくら今までが正しくても最後に相手を倒そうという氣持が生じると、相手の氣持も再び硬直してうまくいかなくなる。相手に不快感を残す投げ方は、どこかぶつかっている。二つのエネルギーが空気に美しい軌跡を描き、体で描いた線が書のように繊細にして大胆に生きてなくてはならない。争う立場にある二人が、だんだん透明に柔らかく光を放つ存在に変化していく。そのようなイメージをもって、お互いに練磨することが大切であると教えられている。

武道は、もともと戈を止める道と書く。筋肉と技を磨き、覇者となつて相手を制したり、ソ連とアメリカの武力増強に象徴される競争原理では、牙を隠した平和にしかすぎない。心身統一合氣道の求める戈を止める道は、筋力と意志の増強ではない。自分の争いの氣持を、相手を包みこみ、やさしく導く愛へと自

己変革していくのだ。その一点のみが現在の地球上で必要とされながら、実現できてないところだ。その境地は多くの宗教家が説いている。心身統一合氣道は、争う氣持のある自分をみつめながら、相手を鏡として、より正しい流れを全身全霊で学んでいく。心が体を動かすことがわかつたうえで、自然に体を動かす合氣道は、ほどよい汗も流れて氣持が良い。自分が浄化されていくみたいだ。

それからの武道、体を鍛える運動に必要な事は、自分を殺し、相手を殺す事ではなく、相手を生かし自分を生かす事を念じなくてはならない。軍隊は、相手を殺す為訓練し、武道家が相手を傷つける訓練をしていたのは、平和を願う人々の祈りも暗雲にさえぎられていたようなもの。

心身統一合氣道が、自己実現を求める人々、体を大切に、体にとられない道を求める人々に、役立つ事を願ってやまない。

資料・国際婦人年―国連婦人の10年から
21世紀へ 国際婦人年大阪の会編 980円

国際婦人年は遠くで鳴る鐘、私には関係ないという声もありますが、何ととっても官民総ぐるみの婦人の力を借りて世なおしをしようという運動なのだから、大いに利用しなくては。世界行動計画、国内行動計画、差別撤廃条約など、婦人年の憲法ともいふべき基本文献を収録。創元社刊、近くの書店に注文を。

死のために
立ちどまることが
できないので
―エミリー・ディキンソンの
死生観―
山田典子

死のために立ち止まることができないうので
死が親切にもわたしのために止まってくれた
馬車にはわたしたちだけ
いや それに不滅の生も

ゆっくりと進んだ―彼は急ぐようすもない
わたしも仕事や余暇を
彼の親切にこたえて
捨ててきた

子供たちが休み時間 輪のなかであそぶ
学校を通りすぎた
こちらを見つめている麦畑もすぎた
沈んでいく太陽も通りすぎた

いや 太陽がわたしたちを通りすぎた
露がふるえ つめたい
わたしのガウンは 蜘蛛の巣

肩かけは 薄絹だけだから

土が盛りあがったような家の前で私たちは止まった
屋根はほとんどみられない
なげしも土のなか

あれから 何世紀もたった でも

わたしが最初 馬の頭を

永遠に向けたと思つた

あの日より短かく感じられる

この詩を読むと、長病いで亡くなった祖母のことを思い出す。明日をも知れない命ときいて病院にかけつけると、祖母はや々と聞きとれる声で、「もう治らないかもしれない」と言った。治る治らないの時ではなかった。この世の人とも思えないほど瘦せ衰へた祖母の、なおも生に強い執着をみせるこのことばに、人は生きていくかぎり、自分の行く先を思い、死はないのだと感動した。

だから「死のために立ち止まることができないう人間のために、「死が親切にも立ち止まってくれ」る。ある日、突然、生の真つただ中で、死がやってくる。

しかし死は冷徹な死だけに終わらない。「馬車にはわたしたちだけ／いや それに不滅の生も」とある。「馬車」(霊柩車)で迎えに来た死神と共に、墓場までのデート(?)を楽しむのは、死者の「わたし」だけではなく、「不

滅の生」(immortality)も一緒である。

mortalityとは、「死すべき宿命をもつもの、生きているもの」(現世での生)である。それに否定の接頭語-imをつけたimmortalityは、「死すべき宿命をもたないもの、不死、不滅の生」という意味である。と同時に、すぐに「生きていけないもの」、「死んだもの」と解釈することもできる。

W・スタイロンの話題作で、映画にもなった『ソフィーの選択』の中で、ポーランド人のソフィーは、この詩に異常な関心を持つ。彼女はナチスの迫害をうけ、生きのびたものの、絶望の連続、栄養失調などで死への坂道をずるずるとすべり落ちていく。生きながら死んでいくようなものだ。それでも「死のために立ち止まることができない」でアメリカで生きようと英語学校にかよう。そんな彼女のために、「親切にも止まってくれた」のは、図書館で失心した彼女を介抱し、深く彼女を愛するようになるネイサンであった。しかし愛の救世主、死神へと変貌する。

ソフィーとの結婚を夢みた作家志望の青年ステインゴは、ソフィーとの出会いによって、生きることに、書くことの意味を知り、ソフィーの死後、小説家として生きる決意をする。ステインゴの作品はソフィーの再生としての「不滅の生」である。

しかし死ぬことは、「仕事や余暇を／彼(死神)の親切にこたえて／捨ててきた」ことでもある。この残酷な死の現実を、私たちはい

つのころから知り、生きていることの味わいを楽しみと思う。そして自分の一生とは何であるのかと問うてみる。

人は臨終の時、自分の一生を一瞬のうちに見るといわれている。この詩では、朝、昼、晩という時の流れにそって、人の一生が再現されている。「子供たちが休み時間 輪のなかであそぶ／学校」では、輪の中でレスリングごっこでもしているのだろうか。無邪気に遊んでいた子供が、大人になると、好奇心丸出しで、自分以外のことに関心を持って生きていく。「こちらを見つめている麦畑」の「麦」の粒は、霊柩車を見つめ、自分の死をも考えている大人の真剣な目を連想させる。そして「沈んでいく太陽」のように、人は老年を迎えるのである。

自分一生を走馬灯のように見ていると、突然、馬車は「土が盛りあがったような／家の前」で止まる。「沈んでいく太陽」はまた翌朝、東から昇るが、馬車のついたところは墓場であった。墓は死後住む「家」であるが、この詩のとおり、ニューヨークランド地方には、家の形をした墓がよくみられる。棺を入れる戸口のある面だけを残して、あとは「なげしも土のなか」で、屋根の近くまで土に埋まった、高さ約二メートル、内部が八畳ほどもある大きな墓である。

気がつく、「わたし」だけ、一緒にいたはずの「不滅の生」はいない。しかも「わたしのガウンは 蜘蛛の巣」のような紗、「肩かけ

は薄絹だけ」という経帷子を着て、「露にふるえて つめたい」墓の中にいる。生から死へ、突然移るこの三連の唐突さが、またしても私たちに死の惨たらしさを思い知らせる。

そして「あれから 何世紀もたった」でも／わたしが最初 馬の頭を永遠に向けたと思つた／あの日より短く感じられる」と自分の死を回想する。「あの日」とは、幼い日、葬式や霊柩車を見て、人は死ぬということを漠然と知った日とも考えられる。しかしここは馬車に乗って、「馬の頭を永遠(死)に向けたと思つた」とき、自分の死の瞬間であろう。死んでずい分たったが、過ぎ去った月日より、死んだ「あの日」の方がずっと長く感じられるという。この詩の一連から五連までは臨終の時をうたったものだから、「あの日」を長く感じていることはわかる。死の衝撃がどれほど激しいものであるかを物語るものといえよう。自分の死をまるで昨日のように感じている死者、「わたし」は、天国に行きついてはいない。墓の囲りに出没しては、この世の最後の日のことや、この世で送った日々を思い出している。ここには、死後天国に召されるといふキリスト教の死生観の入りこむ隙もないほど、非情な死が大きく立ちほだかっている。この詩は「英語で書かれた最も完璧な詩の一つ」といわれているが、このようにさりげなく死を書くまでには、死を生きるどんなにかつらい日々があったことだろう。ディキンソンは自殺も考えたことがあるはずだ。精神

的にも、また肉体的にも、死界を彷徨ったことのある人の、死をくぐりぬけてきた筆致が、私たちに死のいろいろな面をみせてくれる。かぎりある命を私たちは、どのように全うすればいいのだろうか。生きていることの尊いことを再めて考えさせてくれる。

エスペラント版「性と平等」

以前にチャリとみた記憶をたよりに、福永牧子さんに手紙をかいた。「85年のケニアの婦人会議に行くについては、エスペラントで交流したいので、いまから始めてものになるだろうか。あなたがやってみる機関誌「性と平等」を一度みせて下さい」と。

実は私がよく読まないうちに人に貸してしまったのでいいかげんな記憶で書いているのだが、ブルガリアの女性が始めたエスペラントによる女性問題の交流誌、まあひらたくいえば、れふあむのようなもので世界中からのレポートをのせていて、なかなかおもしろい。その本の日本語版が「性と平等」。³カ月前ればものになります。がんばって下さい」と福永さんに言われたものの、仕事も活動もいっぱいの私には、あいてる時間がちっともないので、ケニアには間にあいないけどぬきな先生のおすすめにしたがって、新しい世界に目を開いてみたいと思っている。

みなさんも一緒にいかがですか。連絡は寺島令子(06/301/4805)まで。

もっと世界に

目を開こうと

わたしは思った

母名美隆

ずい分むかしから何か書くようにといわれていたが、年末たまたまこのページに国際語エスペラントの講習会のこと(？)が広告(?)されるとか聞いたので、ちょっとその片棒をかっこうと思った。

じつは昨年秋のはじめごろに、本誌の正路さんから「来年の夏(つまりもうことしの夏)アフリカのナイロビで『国連婦人の一〇年』しめくりの世界会議があり、関連して世界じゅうから各種婦人団体がそのワクの内外で国際会合をする。レ・ファムの人たちも多数で参加するので、英語での会議なんだけれど、この機会にエスペラントも使って親善を深めたいが」という話があり、「ちよっとでも役に立つなら」ということになり、「アフリカとエスペラントの話の会」を開くことをお引き受けした。

「残念ながら急なことで、適当な場所もな

くまたそれぞれ忙しい人たちなので共通の時間が作れない」とかで、そのまま取りあえず月に一回ずつ、この奇妙にむつかしい課題の会合を、それでも十、十一、十二の三カ月三回を重ねた。何か要領を得ない会になったなと思っっているうちに、はじめ集った十二、三人の人たちのなから、ひとまずアフリカはさて置くとして、自分たちだけで集りやすい日を決めて、エスペラントの基礎学習をやるうということが起こった。そうして週一回の火曜会が生れた。

何だ三、四人か、という人もあるけれど、わたしの経験からいえば、自発的学習会とはいまだ大きなものだと思う。というのは、敗戦直後のガレキの中で「エスペラントで平和を」と寒い講習会にどっと人びとが集ったあのような一般的な空気がなくなったこのごろ、アメリカ・ブームのエイ語講習会をやるのとはわけがすっかり違うからである。

国際語エスペラント運動は、やがて一九八七年に、出発百周年を迎えようとしている。それはそれなりに、このころは世界各地に新しいうねりが高まっている。来年の夏には、中国の北京で（ことしの夏は西ドイツで）第七一回世界大会がおこなわれ、観光も兼ねて数千の人たちがおなじく全土から集る数千の人たちと語り合うことが予想される。とはいえ、この運動は一般世間の新聞、雑誌、ラジオ、テレビで宣伝される機会はほとんどないし、自らも大したマスメディアを持っていない

わけではない。ただ街頭の人たちが、それでも粘りつよくこの運動の発展に「奮闘努力して」きただけである。この節のように能率本位の日本国でははなはだしく見覚えがないのである。「何の役にたつのか」などと正面からたたみかけられると、義理にも「出世ができる」とかなんとかともいえず、まことにこまる。しかし、貧して鈍する人にもゆっくりと聞いてみれば、なるほどという言い分はあるのだ。そういう形での問答には即応できかねる重要なことは、エスペラントにかぎらず、まだこの世にいくつかはあるものだ。

さてその数人の人たちが細々と自習会を重ねながら、そのうちちよっと読んだり歌をうたったりしているうちに、世界の婦人たちと文通を始めようと考えはじめた。わたしは感心のみならずこのテュータになろうと決心した（もちろん用語や翻訳だけのである）。そして会のために、そして文通相手に当方の身分やテーマをわかりやすくするために、S O C I E T O ・ D E ・ L A B O R A N T I N O J ・ O S A K A（大阪働く婦人の会）という名を提案した。

わたし個人のことを書いては面はゆいのだが、以下は日本の大正史の一つの小さい典型的なドキュメントとして読んでいただきたい。つまり、わたしは、エイ語を習いその後その「専門家」になってこととして六一年になるが、じつはエスペラントのほうはそれよりも一年長くて六二年になる。そのむかし大正デモ

クラシイの時代には、ほんの少年たちさえも日本の「文明開化」の声には毎日のように驚異の目を見開いたものだ。わたしも人には負けないと、兄の影響もあったが、小学二年生の夏にカナモジ会に入会した。しかしカナモジではどうも「かっかそうよう」の感があつてほどなく熱心なローマ字会員になり、母親にローマ字を教えたら、驚いたことに彼女のほうがずつとじょうずにローマ字誌をすらすらと読んで聞かせた。半世紀以上もたったいまでも、あのまま大正期が高まりつづけていたら、日本はどうなっているだろうかと思ったりして胸をときめかすほどである。しかし歴史にはむしろほしくない。例の関東大震災（一九二三年）とともに日本の空気が一変した。デモクラシイといっても一般世情はまだまだ「おしん」の時代であったが、それぞれ何かひとすじ希望の光があった。その日本がああ物理的ひとゆれとともに精神的にも暗黒で不安な毎日へと傾いてしまった。「朝鮮人の蜂起」などというデマが流れはじめ罪もない多数の労働者が暴徒によってなぐり殺されたり、甘粕とかいう軍人がどさくさまぎれに「危険人物」大杉栄夫妻を絞め殺したり（大杉は日本で最初のエスペランチストの一人であった）した。

こんな話をしていては本題の行方が不明になるのだが、じつは、わたしはこの大混乱のおかげで、その片隅でエスペラントを拾ったのだ。二階の押入れの奥深く隠されていた兄

からの古風な本箱（このところはあまりよく順序がわからないのだが、兄は東京の学校で被災し、本の一部が送られて来た）の中から、わたしはロビンソン・クルーソの『絶島記』といっしょに、『エスペラント初歩文法』を「発見」した。それは、そのときすでに古風な入門書で、アルファベットよりも解説の日本語のほうが小学生のわたしにはむづかしかったことを憶えている。『絶島記』も繰返し読んだが、『入門書』はそれにもまして夢をかき立てる神秘的な世界語創造運動へのパスポートであった。当時は学校の国定教科書以外に禁書であった。わたしは、表のポストから奥のへやまで新聞を取って帰るそのあいだに、連載小説のその日のつづきを斜めにさつと読むことにし、おやじの出かけたあとは、さきの二冊を二階の片隅で熟読した。そしてひそかに「もっと世界に目を開こうとわたしは思った」。そしてちよっぴりおやじよりはえらくなつたような気分になつた。

さきにも書いたとおり、その時から六〇年以上もたつて、わたしは性こりもなくエスペラントに熱をあげている。わたしはわたしのエイ語学のおかげで、あの美しいイギリス詩の世界をときどき楽しんでるが、しかしどうしてもよその花園を覗いてひとりよがりをしてる気持ちはぬぐえない。やはり結局は、まだまだつづきも数少ない自分の庭の世話をするほうが力はいらいり心身ともに明るく心地よくなる。いちどエスペラントを始めた人が

容易にはそれを捨てないその気持ちがわたしにはよくわかる。新しい自分のことば、新しい自分の心の窓、の明りを知るからだろう。せつかく先進的に婦人問題に取り組まれる人たちが、世界のおなじ思いの人たちと、直接、おかに、対等に語り合わずには理くつに合わないことだとわたしは思います。いまこそ二一世紀のためにそれが必要なことだとわたしは思います。国際文通は手軽な世界旅行です。お始め下さい。そして火曜会の小さい熱気をご声援下さい。スペースがなくなりました。（一月六日）

イタリア半島 一周の旅

―被害編―



一九八四年八月九日〜二十七日旅行。主要都市ローマ、シシリ島、ナポリ、ポンペイ、ソレント、シエナ、フローレンス、ベニス、ミラノ、コレチナなど巡る。

それぞれの地の様子は、観光ガイドブックでざらんになって下さい。ここでは、老婆心ながら、今後旅行される方々のたしになればと思ひ、被害の紹介にしりました。

まず、しょっぱなの事故は、スリに合ったこと。

添乗員自ら、「サンピエトロ聖堂」へ行くバスの中で、見事にバックからサイフだけ抜き取られてしまいました。

第二の事故が、引つたくりです。例のゴッドファーザーの舞台、マフィアの街のパレルモで、昼食前のウインドウショッピングをした時です。

ねらわれた人は、肩からしっかりとショルダーバックを斜めに下げ、手でもかかえてた程でしたが、とっさのアクシデントにあわてふためくのみ、後ろから体当たりをしてきたのです。

バックのひもは、引きちぎられ、脱兎のごとく走る前方には、仲間がちゃんとバイクのエンジンをふかして待機。「どろぼー、どろぼー」の声を背後にすんなりと逃げられてしまいました。

被害額、約十万円なり。

第三は、ナポリで。夕方、若い女性二人が、駅前ホテルの明るい道を散歩がてら歩いた時です。ニタツと前から歩いてきた男性が、有無を言わずネックレスを引きちぎっていったとの事。ああー、こわー、よく首が切れなかったもの。

今後、海外旅行では、飾り物はいっさい身につけず、ショルダーバックもだめ、腰につけるポシェットで用心することです。

「男がつくる料理を
女が食べる日」から
8月
小田信康

一九七七年八月十三日、まだ夏は盛りだといふのに膚寒く愚痴のような雨が降っている。猛暑を予想した女たちの手になる『ホーキ星』の室内装飾はあくまでも涼し気で、膚寒さがより以上に感じられた。テーブル・クロスもタペストリーも青系統でまとめられ、窓にはスダレ、卓上には水中花、氷にとじ込めた笹の葉の飾り、ガラスの風鈴の澄んだ音に呼応して表通りから自動車のタイヤが水を切る独特な音がする。

そこへカセット・テープから「バス通り裏」や「笛吹き童子」「ヤン坊ニン坊トン坊」や「鐘の鳴る丘」など、幼き頃のなつかしい歌が流れてくるもので、俄然センチメンタルな気分になってしまった。こんな時、飲める人なら飲みたくなる。ただし、妙な酔い方をする恐れがある、などと思っているとこころへ焼酎のサービスが始まった。

今回の料理人、一九二八年生まれの小田信康さんは、自らの人生と時節にちなんで敗戦

直後の料理を企画した。だから焼酎なのである。と言ってももはや戦後三十二年、目の潰れるようなものではない。メニユーはいたって簡単で、

すいとん……人参とゴボウの薄片が数個、淋しく浮いている。指の跡のついた子供の握りこぶし位なメリケン粉のダンゴが二個。

汁の色が怪しいピンクなのは、細かくきざまれたクジラベーコンの食紅が溶け出たのだとわかった。

案外いける。一座からもオイシイという声

が漏れた時、年配の女性が「当時はこんな上品ないい味じゃございませんでした。材料も何もかも、上等すぎますね」

ちなみに今回の出席者は、明治生まれ二人、昭和一ケタ一人、十年代一人、二十年代が大

半で三十年代も三人はいる。まさに、戦争どころか、戦後も知らぬ子供たちの集まりなのだ。

いも……ゆでたジャガイモとさつまいも。当然、塩のみにて食す。

フライパン……Frying pan (フライパン)ではなくて、Fried bread. (まり揚げパンのこと。

すいとんのダンゴの中にこしあんが入ったのを油で揚げてある。当時、屋台で一個五

円、「本当は機械油で揚げますが皆さんの健康を考えて食用油にしました」とは

料理人の弁。食べてみると、タイヤキのよ

うなものである。

スイカ……特別サービスのデザートといったところ。(中略)

「今日は、戦中派の男がいかにまずい料理を食べさせるかということを知ってもらいたかったんです」

メニユーに載せられた小田さんのメッセージは、女たちを感動させた。

「われわれ中年層、俗に『戦中派』と言われる男どもが家庭の台所に立って食事の用意をするなどとは考えられなかった時代に、そのような教育を受けた私が、現代の若い女性の人たちと共に、女性解放を闘うことは、悪戦苦闘です。時には、『女性差別発言』でつるし

上げをくいながら、性懲りもなく繰り返しながら、若い人たちと共に前進することが、私の使命でもあり課題でもある。(中略)

みなさんに、私が小学校時代に学んだ『修身』の中の一部を紹介します。そのような教育を私たちは、『骨の髄』までたたき込まれて大きくなつたのです。(後略)」

一九三五年頃の「修身学習指導案」第二十一「男子の務と女子の務」の一部がコピーして配られ、小田さんは一々それを読み上げながら自分の受けた教育に憤った。

若い女たちを最も驚かせたのは次の一部だ。「男子と女子は」精神上に於ても同一でない。男子は理性的であり、女子は情操的である。意志に於ても男子は比較的強靱であり、女子は薄弱である」

また、学習助成上の着眼点”にいわく「近時、男女同権の誤解から、男子の為す通り女子がなす事を以て女子の務と解せんとするものが多くなってきた(傍点筆者)」。現在なお表現の衣を変えて言われる安易な男女区別論や男女平等はきちがえ論の根は、こんなところにあつたのだ。

自分が国家に都合よく教育されてしまったことにも気付かず、女性解放論に眉をしかめる「中年層」が多いことには本当にうんざりさせられる。だが、「罪を憎んで人を憎まず」が獄中闘争の俗な論理であるならば、「教育を憎んで男を憎まず」。身についた悪しき教育の影を自覚し、なんとか振り払おうとしている男たちとはうまく共闘できるのではないか。

そんな希望を女たちの胸に残して、小田さんの料理は幕を閉じたのだった。

(食べる女 中山千夏・記)

「男がつくった料理を女が食べる日」に参加してから八年を経過したが、私自身が「女性解放」にどのようにかかわって来たのかと振り返った時、冷や汗ものだが、新聞社に入り、マスコミの一線に立って、「男女雇用均等法案」にいろいろの発言や活動もして来たが、男社会の職場にも「平等」を欠いた様々の不合理があることに気付いたが、その不合理を克服しながら「男女雇用均等法」の闘いを進めて来たが、女性自身ももっとこの法案の内

容を理解し、立ち上がるべきだと思う。安易な妥協は許されない。女性の総力を上げわれわれ男性側も共闘して行くべきことを再確認した次第です。

これからの道はなお厳しく、険しいが、「国際婦人年」に参加して、私が指摘した「戦中派」の「教育」を受けた人たちが、「男女雇用均等法」を牛耳っている現状を注視し、この人たちの考えを是正しない限り、期待できない現状を打開し、細く長い闘いになりそうだが、一歩、一歩力強く進んで行こう。

女性解放運動に初めて参加した頃を懐古しつつ。(一九八五年一月一日)

四年前からピアノを始めました

宮城万史さんから手紙

ごぶさたしておりますがお元気でしょうか。私方も相変わらず忙しく過しています。子どもたちも学校がすむと毎日学童室で4時頃まで遊び、家に帰るとカバンを放り出して自転車をのりまわしています。こちらはちゃんと勉強させようとおせるのですが、子どもは逃げまわって、まるで親と子の攻防戦です。

でもあの忙しかったころ(子どもが保育園へ行っているころ)と比べるとずい分楽になったものです。つれあいは、相変わらず仕事が忙しく、早くて八時、おそい時には十二時までまわることがあってまるで母子家庭なのですが

音楽会にも行けるようになりました。二人でしっかり、家の中からカギをかけて留守を守ってくれるのです。母親が一人で出掛けることに抵抗が無いのも共働きのたまものでしょうか。

生活面でも自立出来る子どもに育って欲しいので(共働きで疲れている親を助けるためにも)自分のことは自分でできるように、日夜(?)口やかましくごいています。小学3年の長男は4歳の時から庖丁を持たせていたので、今ではちよっとした料理(?)もできるようになりました。下の娘(小一)も、一緒に洗濯物を干したり、たんだり、一人でがんばらずにみんな力で力をあわせています。

4年前、子どもと一緒にピアノを習い始めました。レッスンを休んだのは病気で入院した一カ月だけです。国立音大出の先生はこの辺では厳しいので有名な先生で、大人でも決していい加減にせず、ちゃんと基礎のバイエルからみっちり教えてくれます。今はツェルニー百番とピアノテクニクとハノン、それからランゲ作品集の中の「花の歌」をえんえん7カ月かけて弾いています。

れふあむの皆さんも髪ふりみだしての育児と家事と仕事の時期は一応峠をこえ、次のステップを踏み出したみたいですね。新居浜のような片田舎に住む私には貴誌はちよっとしたショックを与えてくれます。友人を紹介ししますので、送って下さい。ではまた。ではまた。



編集室

(片岡)

☆ウーマン・リブから15年、国際婦人年から10年。歴史は着実に女性に味方して進んでいる。もちろんその歴史をつくっているのはわたしたち女自身だ。女が変われば歴史は変わることを、こんなにも短期間に実証できたのはスゴイと思う。その大きな力となったものは政治や男の協力ではなく、むしろ政治や男が障害になっても、女が生き方を変えたことにある。14年

でも、ヨソから尻をたたかれなければなにひとつまもれず、まもる気もないので、そんななかでの女性の自立は絶望的にみえる。しかし日本の社会は女の隷属的地位に依存しているから、女が自立するとは日本の社会の自立にもなつて一石二鳥、希望もみえる。絶望のなかから希望を見いだして生き方を変えた女たちとともに、わたしは乾杯したい！ (まつゆ)

信じています。 ☆戦后四十年、長男も今年二十歳れふあむ十八号は、二十何歳になるのだろうか。一月下旬正路さんのお宅にて校正のおつた、といつてもほとんど正路さんがやっ

まえにわたしが『れ・ふあむ』七号(71年発行)に詩「男たちにーくりかえしくりかえし家事について」を書いたとき、ケンケンガクガク、賛否両論、男の猛反撃にあつたけれど、それがいまではウソ

「言葉と現実」で風前の灯と書いた仕事がいよいよ本当にゼロになることが本決まり。かねての決意通り100枚の履歴書をかかなければと思つています。手始めに年賀状でせつせと求職中をPRしました。

自分ではどうなんだろう。 この十年、女たちの意識はたしかに変わってきたようにみえる。近頃は後もどりしたかにもみえる。しかし、ゆきつもどりつではあつても確実にある方向へは向つてい

のように、男の家事があたりまえになつてしまつた。人を変えることはできなくても、人は変わることをわたしは信じている。そして世の中を変えるのはひとりひとりの生き方なのだ、ということも。

「言葉と現実」でとりあげた私たちの教科書、三訂版でも私の意見は完全黙殺。夫は時間がなかつたんだらうと言いますが、名前を入れ替えることぐらいはできるはず。要するに男には一度では届かないのだと痛感しました。幸か不幸か私にはこの教科書を使う機会

も確実にある方向へは向つてい

日本の社会(政治)は欧米社会にくらべると、まだまだ自立と自律の精神が足りなくて、ILO条約にしても女性差別撤廃条約にし

はなくなつたのですが。 どんな仕事であれ外へ出たいと思つています。家でのデスクワークだけでは心身ともに異常をきたすと

☆一九八四年までにせひ18号を出したかつたけれど、ついに年を越してしまつた。はやくから原稿を入れて下さつた原沢さんや角橋さんごめんさい。

くらくらすると、まだまだ自立と自律の精神が足りなくて、ILO条約にしても女性差別撤廃条約にし

くらくらすると、まだまだ自立と自律の精神が足りなくて、ILO条約にしても女性差別撤廃条約にし

くらくらすると、まだまだ自立と自律の精神が足りなくて、ILO条約にしても女性差別撤廃条約にし

くらくらすると、まだまだ自立と自律の精神が足りなくて、ILO条約にしても女性差別撤廃条約にし

くらくらすると、まだまだ自立と自律の精神が足りなくて、ILO条約にしても女性差別撤廃条約にし

くらくらすると、まだまだ自立と自律の精神が足りなくて、ILO条約にしても女性差別撤廃条約にし

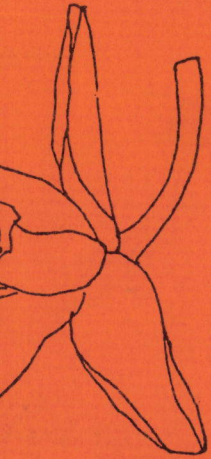
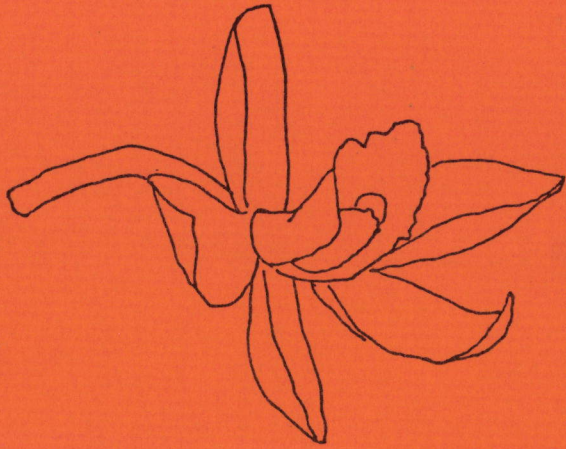
映画の好きなへちまの会主催による第2回女たちの映画祭の映写技師までひきうけた十一月、そして夏には機会均等法の国会傍聴や国会議員アンケート、21世紀女たちの会とやらを結成して大阪会館で3日間の「もう職場の花ではいられない」イベント、それが終わるや結婚20周年をひそかに祝う北海道旅行―個人的には結構充実した一年でした。おまけに、このお正月は欲ばつて一週間もスキーに行つたのでした。(正路)

☆れふあむのバックナンバーあります。11号には黒田さんの「本とごはんとどっちが好き」、13号にはキャサリンの「ママ・女性運動ってなあに」、14号には行俊さんの「秋の終りに」を収録、そして15・16・17号も少し。

発行日 一九八五年二月十日
編集 女性問題研究会II高槻市
真上町六の三一の三正路
怜子方皿〇七二六一八七
一八七九七 振替 大阪
三一八一二一九

印刷 聚文堂印刷

第18号 1985年版 ¥500
240



1985年版
500円